

Bulletion of Kagoshima  
Prefectural Archaeological Center

# From JOMON NO MORI

No. 17 CONTENTS

About human bones from the Jomon period excavated  
in Kagoshima Prefecture

Tatsumi Yubasakir

Introduction of excavated materials at  
the Hoshizako site, Kajiki-cho, Aira City (1)

Kagoshima Prefectural Archaeological Center

Some consideration about of sue ware in the Middle Ages  
in Kagoshima Prefecture

Uwatoke Sin

Characteristics of *Distylium racemoum* and  
excavated materials and folklor materials

Higashi Kazuyuki

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the  
5nd year in Reiwa.

Kagoshima Prefectural Archaeological Center  
October 2024

研究紀要 年報  
縄文の森から  
第17号

二〇二四 鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報

# 縄文の森から

From JOMON NO MORI

第17号

鹿児島県出土の縄文時代該当の人骨について  
—出土遺跡や人骨の集成と概要—

湯場崎 辰巳

給良市加治木町干道遺跡の出土資料紹介 (1)

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県出土中世須恵器の若干の検討～特に貯蔵具に着目して～

上床 真

イスノキの特長と出土資料および民俗資料例

東 和幸

令和5年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2024. 12

## 『縄文の森から』第17号 目次

---

---

鹿児島県出土の縄文時代該当の人骨について—出土遺跡や人骨の集成と概要—

湯場崎 辰巳・・・・・・ 1

始良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介（1）

鹿児島県立埋蔵文化財センター・・・・・・ 23

鹿児島県出土中世須恵器の若干の検討～特に貯蔵具に着目して～

上床 真・・・・・・ 52

イスノキの特長と出土資料および民俗資料例

東 和幸・・・・・・ 63

令和5年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77

---

---



# 鹿児島県出土の縄文時代該当の人骨について —出土遺跡や人骨の集成と概要—

湯場崎 辰巳

About human bones from the Jomon period excavated in Kagoshima Prefecture

Yubasaki Tatsumi

## 要旨

鹿児島県内の縄文時代人骨出土遺跡と人骨の情報を集成し、各遺跡と縄文時代の人骨の概要をまとめた。その結果、鹿児島県内の縄文時代人骨出土遺跡は、17遺跡53体の人骨が出土しており、遺跡立地の内訳は、貝塚10、洞穴3、砂丘2、台地1、低湿地1となっている。時期別には、中期9体、後期32体、晩期8体、不明4体である。その他、年齢層、男女別数、平均身長、抜歯の有無、外耳道骨腫、埋葬の形の集成及び検討を行い、鹿児島県内出土の縄文人骨の情報をまとめた。

**キーワード** 人骨、立地、時期、貝塚、後期、仰臥屈葬

## 1 はじめに

筆者は、上野原縄文の森に勤務しているが、来園者から縄文時代の人骨や貝塚などの質問に日々接している。縄文時代の平均身長は男性160cm、女性150cm程度であることや、市来貝塚などの主な出土遺跡を紹介しているが、具体的な詳細はあまり把握していない。

そこで、鹿児島県出土の縄文時代該当の人骨を集成し、出土遺跡や人骨の概要をまとめ、今後の上野原縄文の森の運営等に活かしていきたいと考え、本稿をまとめることにした。なお、人骨の記載番号については、報告書・文献に報告ある番号を使用し、番号の最初に調査年を追記したのもある。

## 2 研究史

鹿児島県内の人骨の研究はそのほとんどが、各遺跡の報告の中で、人骨の形質人類学や形質的特徴を報告しているものである。その中で、他遺跡と比較検討しているものや、再検討しているものなどを記載したい。

長崎大学医学部内藤芳篤氏は、1961（昭和36）年に市来貝塚から出土した人骨3体（男性1・女性2）について、人類学的観察及び計測結果（推定身長や頭蓋・四肢骨計測値）から、九州島内他の縄文の人骨との比較を行い、市来貝塚出土人骨の特徴を述べている。市来縄文人骨は、長崎縄文人骨とは異なる性質をもっているとして、九州や津雲、関東出土の縄文人骨との検討を行っている。①人骨全体の観察所見として、市来縄文人骨は縄文人共通の特徴をもっている。②頭型は、市来縄文人骨男性は、他の縄文人骨と同様に中頭型。女性は、他の縄文人骨より短頭型が強いとしている。③市来縄文人は、男性ははかなり高身で、女性は他の縄文人と差はな

いとしている。④頭型・推定身長は、市来縄文人骨は長崎縄文人骨とは異なり、他の九州縄文人と類似性が強く、南九州の弥生人の中では、飯島の里弥生人と近似して、他の弥生人とは異なっている。そのことから、市来貝塚出土の縄文人骨は、低身・短頭の南九州の縄文・弥生人の集団とは異なり、他の九州縄文人骨と類似性が高いと結論づけている（内藤1984）。

長崎大学医学部内藤芳篤氏・石田肇氏、鹿児島大学文学部小片丘彦氏は、鹿児島県内の縄文時代・弥生時代・古墳時代とされる出土人骨の一覧とその保管場所をまとめている（内藤芳篤・石田肇・小片丘彦1984）（註1）。

金岡丈夫氏は、一陣長崎島遺跡出土の昭和31（1956）年人骨において、風習的抜歯の可能性が指摘しており、さらに、下顎左中切歯に人為的水平磨削の可能性のあることを報告している（金岡1958）。

中橋孝博氏は、一陣長崎島遺跡出土の昭和31（1956）年人骨を再計測し、詳細に分析している。考察の中で、一陣長崎島遺跡人骨と広田遺跡（弥生時代～古墳時代）で出土した人骨を比較し、一陣長崎島遺跡人骨は本州の同時期の縄文人とは、比較的類似性が確認できたが、同じ島の広田遺跡出土人骨との強い近縁性を窺える結果は出なかったとしている（中橋2011）。

前迫亮一氏は、鹿児島県内の縄文人骨や縄文墓制を集成しており、各時期の墓の可能性のある配石遺構や埋設土器、土坑のある遺跡や縄文時代の人骨が出土している遺跡の概要をまとめている。その中で、事例の中心が後期・晩期に集中しているのは、貝塚が増えることと、土器陪葬が増えることが要因としている。また、縄文時代の遺跡の多さと比較して、墓に関する資料が極めて少な

い状況を指摘しており、用途不明の土坑の規模や遺跡内のあり方から、土坑墓の可能性を考慮すべき事例を検討する必要性を述べている。(前掲2002・2008)。

大保秀樹氏は、九州中南部における縄文時代の人骨出土遺跡と埋葬の状況を集めて、出水貝塚出土人骨と比較(堀込・被覆層・埋葬姿勢・頭位)を行っている。出水貝塚では、屈葬を主としながらも、埋葬姿勢や頭位はバラバラで、他の縄文時代人骨出土遺跡状況と比較すると統一性や規則性がないと述べている。また、特徴的な埋葬として、1953年人骨は、他遺跡の類例から、土器を頭に被せた可能性(いわゆる裏被り葬)や、被覆層の出土から石を抱かせる抱石葬を行った可能性を指摘している(大保2020)。

藤元慎一郎氏・木下高子氏・坂本純氏・瀧上舞氏・篠田謙一氏・神澤秀明氏・角田恒雄氏・竹中正巳氏は、出水貝塚の1954年人骨1～3号と、垂水市終原貝塚の人骨の炭素14年代測定とミドコンドリアDNA分析を行っている。出水貝塚の人骨は、縄文時代後期で、北部九州の縄文人や弥生人がもつM7a系統に属することが判明している。終原貝塚は、縄文時代後期で、ミドコンドリアDNAハプログループの系統は、M7aだが、現代人や古代人のいずれにも見られないもので、九州本土が琉球列島のどちらの系統を引くものかは判断できないとしている。奄美群島出土の縄文時代該当の人骨の分析も実施しており、伊仙町面縄貝塚の2013(平成25)年に調査された際にCトレンチV層出土の頭蓋骨は、縄文時代晩期～弥生時代、天城町下原洞穴は、平成28(2016)年～令和元年(2019)年に行った際に出土した2号人骨は、縄文時代後期相当としている。ミドコンドリアDNAは、弥生時代前期相当の人骨であるトマチ遺跡の3体も合わせて行われており、徳之島の縄文時代相当期の集団は、基本的には琉球列島の集団の一部だったと判断している(藤元・木下・坂本・瀧上・篠田・神澤・角田・竹中2021)。

## 2 鹿児島県の縄文時代該当人骨出土遺跡の概要

### (1) 江内貝塚

出水市高尾野町に所在し、出水平野西北端、北東に八代湾、東に江内川と野田川の沖積低地を望む、舌状の小丘支丘の先端部北側斜面に位置している。

昭和36(1961)年に池水寛治氏及び出水高等学校考古学部により発掘調査が実施されている。

人骨は散乱が著しく個体数も明確でないようだが、把握された確実な3個体分の報告がされている(小片1965)。いずれも、図面等の報告はない。なお、埋葬施設とされる遺構は、大小礫を直径160cm程度に集積し、頂部に石棒を配した配石遺構と、大形礫を平円状に配した半環状配石遺構から構成されている。

#### ① 1号人骨

半環状配石遺構の北側に位置し、仰臥伸展葬である。

老年期の男性で、虫歯で歯を生前になくしているようだが、抜歯はないとされている。骨の残存状況等は、不明である。

#### ② 2号人骨

半環状配石遺構の北側に位置し、散乱して出土している。壮年期の女性で、虫歯が認められるが、抜歯はないとされている。変形性脊椎症が認められている。また、骨に傷創痕がある。骨の残存状況は不明である。

#### ③ 3号人骨

散乱して出土している。壮年期終わりから老年期の男性で、左大腿骨は生前に骨折して、仮関節があり、歩行はかなり困難であったとされている。

### (2) 出水貝塚

出水市に所在し、米ノ津川左岸・大野原積台地の北側に舌状に飛び出した部分に形成された貝塚である。標高は、約22～23mで、貝塚北側は、米ノ津川の氾濫原であったが、現在は出水市総合運動公園となっている。人骨は1920(大正9)年に人骨破片11点、1953(昭和28)年に1体、1954(昭和29)年には4体、1997(平成9)年に下肢骨が残存した1体が出土している。

#### ① 1920年人骨

大正9(1920)年8月、山崎五十磨氏の行った調査で人骨破片が4点確認され、長谷部言人氏が分析を行っている。同年12月、長谷部氏が企画した調査でも人骨破片7点が確認され、報告されている(長谷部1921)。この時の人骨は詳しい出土状況は不明である。

#### ② 1953年人骨

昭和28(1953)年に河口貞徳氏他が実施した調査で、人骨が1体確認されている。調査の概要は『日本考古学年報』6(河口1963)に報告されているが、時期について河口は「阿高式に属するもの」と報告している。1トレンチの貝層直下の赤土層より出土した。頭部を北西に向けた仰臥屈葬で、頭部付近に土器底部が、腰部付近から阿高式土器片が出土したことが分かった。四隅には自然礫が配置されていた。赤土層まで掘り込まれて、膝を立てた状態で埋葬された後、土圧で膝が右方向に倒れたとされる(鹿児島県立埋蔵文化財調査センター2020)。

昭和29(1954)年に山内清男氏の指導の下調査が実施され、1号から4号までの人骨が4体確認されている。

#### ア 1954-1号人骨

1トレンチ2区で、黒土層表面まで掘り込まれ赤土を被った状態で埋葬されていた。仰臥し下肢は折り曲げて立てた仰臥屈葬であった。頭部はS10°Wを向いている。実測図では腰部の右側に人頭大ないしそれより大きな石が置かれている(鹿児島県立埋蔵文化財調査センター2020)。

#### イ 1954-2号人骨

1954-1号人骨を出土した1トレンチ2'区を広げ3'区とした所から出土している。石に覆われ、赤土層に上の貝層から掘り込まれ、仰臥伸張姿勢で埋葬されていた。残存状況はあまり良くない。頭部はS24°Eを向き、人骨上部及び周辺には石塊が多数あり、被覆するような状況であった(鹿兒島県立埋蔵文化財調査センター2020)。

#### ウ 1954-3号人骨

1トレンチ7区で出土した。貝層下の赤土層に掘り込まれ埋葬されていた。1954-2号人骨と同層位で、周囲及び上部に礫を置いて全体を覆った状態であった。頭部はE30°Sを向いているが、頭骨以外残存状態が良くないため、埋葬形態は不明である(鹿兒島県立埋蔵文化財調査センター2020)。

#### エ 1954-4号人骨

1トレンチ6区で出土し、黒色土層を若干掘り下げて埋葬されていた。頭部はW10°Sを向き、大腿骨は肩の方向へ、膝は反対方向へ強く折り曲げられた仰臥屈膝である。頭部の周囲に人頭大の礫が若干あり、大きな礫でしっかり被覆されている状況である(鹿兒島県立埋蔵文化財調査センター2020)。

#### ④ 1997人骨

平成8・9(1996・1997)年にかけて出水市教育委員会が調査したもので、1997年に22トレンチで出土した。攪乱土坑により上半身部分は失われ、腰骨以下の下肢骨が残存していた。大腿骨は肩の方向へ、膝は反対方向へ折り曲げられていることから仰臥屈膝と推定される。調査報告書(出水市教育委員会2000)の方位に誤りがあり、実際の頭部は北を向いていたと考えられている。掘り込みや被覆礫については不明である。調査報告書第2節では、人骨近くから南福寺式土器が出土したと記述されているが、第V章のまとめでは阿高式土器と説明している。なお、調査担当者への確認から、供伴する土器は南福寺式土器で、同時期の人骨の可能性が高いことを指摘している(鹿兒島県立埋蔵文化財センター2020)。

#### (3) 麦之浦貝塚

薩摩川内市の、肥薩おれんじ鉄道上川内駅から、北西側に約2.3km、薩摩川内市街地から北西側へ5.3kmと所に所在する。高城川の支流である麦之浦川の右岸に南方へ舌状に延びた標高約13m台地上に位置している。

貝塚は、台地の東側斜面部に3か所(第1～3)に確認されている。第3貝塚から縄文人骨1体と、散在人骨3体分が出土している。昭和58(1983)年に、川内市教育委員会により、本調査が実施されている。

#### ① 縄文人骨

貝塚北側の第3貝塚から、3基の土坑墓が発見されており、1号土坑(墓坑)から人骨1体が出土している。

土坑は長軸116cm・短軸72cm・深さ31cmで、平面形はほぼ長方形を呈し、南頭位で人骨が出土している。周辺の遺物から縄文時代後期とされ、土坑の大きさから屈葬と推測されている。縄文人骨は、壮年後期の女性とし、身長約140cm前後で、頭型は人頭に近い短頭型で全身形質はほぼ縄文人一般の特徴を示している。また、上顎右中切歯にエナメル質の破折があるほか、右上腕骨の肘頭窩に新たに新生された粗面が認められている。

#### ② 散在人骨

縄文時代後期とされる3つの散在人骨が報告されている。散在人骨1は右腕骨で成人の男性。散在人骨2は右大腿骨で成人の男性。散在人骨3は左右脛骨で成人女性とされるものである。散在人骨2の右大腿骨には顕著な変形性膝関節症の痕跡が報告されている。

#### (4) 市来貝塚(川上貝塚)

いちき串木野市に所在し、旧市来町を流れる八房川中流域、河口から直線距離約3kmの左岸、標高12～13mの河岸段丘の上及び標高7～12mの斜面に位置している。市来貝塚の発掘調査は7回実施されている。発掘調査の経緯等は、「市来貝塚(鹿兒島県立埋蔵文化財センター2023)」に詳細に記載されており、参照していただきたい。本稿では、人骨出土の発掘調査のみを記載する。人骨の出土は、大正15(1926)に2片、昭和36(1961)年に3体、平成2(1990)年に頭骨が出土している。平成6(1994)年に県の史跡に指定されている。

#### ① 大正15(1926)人骨

大正15(1921)年、清野謙次氏・山崎五十麿氏により発掘調査が実施されており、貝層底部に近いところで、人骨は頸骨中央部1片と尺骨1本の出土が記録されている。後世による攪乱はないと考えられるが、他の部分の骨の出土はなかったようである。昭和5(1930)年に田幡丈夫氏により人骨の詳細が報告されているようだが、一次資料を確認できず不明である。

#### ② 昭和36(1961)人骨(1号・2号・3号人骨)

昭和35(1960)年に盗掘事件が発生し、昭和36(1961)年に当時の市来町が調査主体となり、発掘調査を実施している。調査総括は河口貞徳氏が担当しており、3月22日から31日までの10日間実施されている。A・B2本のトレンチを設定し、Aトレンチから2体(1号人骨・2号人骨)、Bトレンチから1体(3号人骨)が出土している。

#### ア 1号人骨

AトレンチⅧ区の5層(混土貝層下部)から検出された。東南方向に頭を向け、仰臥屈葬の姿勢で埋葬されている。人骨の東側側面を中心に長さ30～50cmの礫が配されたように出土した。意識的に配石したものと考えられる。市来式土器期のもので、推定身長148.70cmの熟年女性と同定されている(鹿兒島県立埋蔵文化財センター2023)。

## イ 2号人骨

AトレンチⅥ区からⅩ区の3層下部から検出された。南向きの仰臥屈葬である。下肢付近で有孔の円形軽石製品が出土した。市来式土器期のもので、推定身長146.37cmの熟年女性と判定されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター2023）。

## ウ 3号人骨

BトレンチⅠ区の4層中（掘り込みと考えられる）で検出された。基礎をなす巨岩の陰に埋葬された状態であった。頭を南側に置いた仰臥伸展葬である。推定身長163.46cmの熟年男性とされる。

なお、3号人骨は伴ったとされる土器が「沈線文土器」で、指宿式土器期のもので報告されている（河口1988）。しかし、再検証の結果、伴った沈線文土器を特定できず、Bトレンチから出水式土器が圧倒的に出土していることから、出水式土器に伴う人骨の可能性が高いことを指摘している（鹿児島県立埋蔵文化財センター2023）。

## ③ 平成2（1990）年人骨

平成2年（1990）年に、当時の市来町が埋蔵文化財確認緊急調査事業として、遺跡の範囲確認を実施している。発掘調査は、鹿児島県教育委員会文化財課職員が行っている。1～15のトレンチ調査を行っており、遺跡東側の8トレンチの中世と近世の2時期に造成された痕跡の下層である混泥土層から人骨が出土している。頭骨がまとまって出土しており、埋葬人骨の可能性が高いと報告されている。時期は縄文時代後期とされ、トレンチ内土器は市来式土器の報告が多い。

- 1 人骨の所属年代は、考古学資料から縄文時代後期と考えられる。
- 2 残存していたのは同一個体の人骨片で、頭蓋の一部と肋骨片が残っていたにすぎない。
- 3 乳様突起は小さく、下顎体の諸径も小さいことから、女性と考えられる。
- 4 歯の咬耗、頭蓋縫合の所見から壮年期と推定される。
- 5 下顎の歯に、特殊磨耗が認められた。（市来町教育委員会1991）

## （5）黒川洞穴

日置市吹上町永吉に位置し、永吉川の支流の二俣川の浸蝕によってできた、谷の北斜面に存在している。遺跡地付近は、凝灰岩またはシラス層からなり、80～100mの高さに断崖が形成されている。これらの断崖の基部に、水食によって洞穴が形成されている。黒川洞穴は、海岸部より6.5km、標高84mに大小2個の洞穴が隣接して開口している。西側の大洞穴（西洞穴）は、凝灰岩とシラス層からなり、入り口の幅は13.3m、高さは4.35m奥行きは深いが落盤のため不明である。西洞穴に接して東側（東洞穴）に、入口幅11m、高さ4.35m、奥行き8.4mの馬蹄形の小洞穴がある。この洞穴はシラス層に

形成され、天井中央には円筒形の浸蝕穴がある。西方90mに、元権現洞穴がある。標高79.5mに開口、入口幅21.65m、高さ21.65m、奥行き17mある。

昭和27（1952）年に坊野小学校教諭辻正徳氏の連絡で、河口貞徳氏が発掘調査し、縄文時代晩期の黒川式土器を発見している。

昭和39（1964）年、日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会により、江坂輝弥氏・河口貞徳氏が11月18日から7日間、発掘を行っている。期間中に、新潟大学の小片保教授が埋葬遺構の調査に当たっている。次に昭和40（1965）年8月14日より7日間の発掘調査を行っている。これらは主に東洞穴の調査で、昭和42（1967）年7月29日より11日間、西洞穴の発掘を行っている。平成16（2004）年に県の史跡に指定されている。

## 3号土坑人骨

昭和39（1964）年の東洞穴調査時に、埋葬跡（3号土坑）が調査されている。3号土坑は東西径90cm（南北は不明）、深さ40cmである。人骨は熟年女性とされ、土圧を受けて、土坑床面に密着し、頭部を西方向に側臥屈葬されており、骨盤が洞部下に、尾椎骨は頭部の下に移動しているという特異な埋葬方法とされている。

## （6）草野貝塚

鹿児島市の南部のJ R坂之上駅から五位野にかけて平坦に広がる標高30～50mの台地の一角に位置する。かつては、東側は急崖で海岸線が迫り7つの小島が点在し、西側と北側には開析された谷が形成されていた。現在は、東側は工業用地として埋め立てられ、西側・北側も造成されている。

昭和27（1952）年の河口貞徳氏の調査報告によって、草野貝塚の全容はほぼ明らかになっており、市来式と指宿式の層位の上下関係が判明し、また指宿式から市来式への型的推移を明確に知り、以後の縄文後期土器研究の指標となっている。昭和56（1981）年には鹿児島県教育委員会が開発に伴う第1次、翌57年には第2次の緊急発掘調査を実施している。

人骨は、前頭骨片1点が出土している。年齢は壮年前期とされ、性別は女性の可能性が高いと報告されている。

縄文時代後期とされ、出土状況等は不明である。

## （7）上焼田遺跡

南さつま市金峰町に所在し、長さ約1.5km、最大幅約500mの宮崎台地の北端部、標高約15mの舌状台地北側傾斜面に位置している。小規模な貝塚が点在しており、周辺部は水田地帯で、県営圃場整備事業に伴い、昭和50（1975）年に、鹿児島県教育委員会が本調査（調査対象面積400㎡）を実施している。縄文時代晩期とされる人骨2体が確認されている。

- ① 土坑墓—1号人骨—

長径99cm、短径62cm、深さ19cmで、すり鉢状の楕円形である。人骨は、ほぼ完全な形で残存しており、頭部が北西方向を向き、手は両方とも肘関節を強く屈して胸部にあて、足は股関節・膝関節を強く曲げ、頭蓋・足とも左方向に倒れた側臥屈葬である。熟年の男性とされ、推定身長はピアソン式150.52cm、藤井式151.02cmである。

下顎の中切歯から第1小臼歯までの計8本に相応する歯がなく、残存している歯や歯槽の状況から、風習的抜歯が行われたと推定している。ただし、上顎は残存してなく、実際の抜歯の形は不明である。

#### ② 2号人骨

貝殻や獣骨、土器片等とともに、散乱した人骨が140cm四方に散らばっていた。仙骨・肋骨・脛骨がひどくかたまり、上腕骨片が北、東方向へ離れて出土する状況と報告されている。

### (8) 大渡遺跡

指宿市に所在し、指宿枕崎線の指宿駅と山田駅の間地点で鉄道と国道269号が交差して、陸橋を形成する西側にあたる標高50m前後の台地に位置している。昭和28(1953)年に国分直一氏が試掘調査を行い、その際に、指宿高等学校の先生や生徒も調査に参加している。指宿市誌編纂の一環として、昭和32(1957)年に国分直一氏・河口貞徳氏・河野治雄氏・重久一郎氏等とともに2次にわたるトレンチ調査が実施されている。4つのトレンチを設定して、調査されている。第一トレンチと第三トレンチから人骨が出土している。

#### ① 第一トレンチ

第1トレンチからは2体の人骨が出土しており、埋葬人骨としている。トレンチの1Bから出土を一号人骨、4Bから出土を二号人骨としている。

##### ア 第一号人骨

頭蓋骨と脛骨、肋骨のみである。頭部は西側に埋葬され、頭部上部及び脚部付近には石皿の破片が出土している。胴部付近にも、平たい板状の石が記録されている。頭部直上にはさらに、獣骨や魚の背骨、土器片が出土している。脚部V字状になって出土していることから、屈葬でないかと推定している。土坑墓等の掘り込みの記載はないが、状況から埋葬人骨と判断している。

##### イ 第二号人骨

頭部を北に向けられており、顔はうつむきかげんで南に向けられている。特異な点として、人骨が置かれた状態が傾斜面に沿うように、頭部と脚部では30cm程度の高低差が記載されている。保存状況は悪いようであり、遺構もないと判断されている。

#### ② 第三トレンチ

第12層から人骨とみられるものが出土している。西壁面には2個の頭蓋骨が確認されている。10層以下から市来式土器・指宿式土器の出土が確認されている。

### (9) 前田遺跡

始良市街地の北西側、平野部の端に位置し、遺跡のすぐ北側には住吉池があり、遺跡南側の別府川へと流れている。地形が谷状となっている低温地部から縄文時代中期後半(約4,500~5,000年前)の土坑72基と、堅果類や編組製品・加工木などの植物質遺物が出土している。中期該当層(IV層)から、人の指の骨が出土しており、骨になった後に火を受けていると報告されている。

#### (10) 枝原貝塚

大隅半島の垂水市にあり、マンロー氏が大正3(1914)年に、大隅肝属地区のクノギハラ近くで貝を発見したとされている。遺跡は市街地から南東側に約5km離れた、台地間の扇状地状に広がる沖積平野と海岸線の間にある標高約7mの小微高地上に立地している。遺跡周辺には約1.6kmにわたって遺跡が広範囲に所在する枝原遺跡群として知られており、現在は、海岸線から約300mほど離れている。個人住宅の建設に伴って、垂水市教育委員会が平成7年度に確認調査で土坑墓2基と、それに伴う人骨2体、平成9年度・10年度には垂水市教育委員会が農免農道整備事業に伴う本調査を実施し、土坑墓2基と、それに伴う人骨2体、さらに保存状態が不良の人骨2体が確認されている(註2)。また、遺跡の範囲確認調査が平成12(2000)~14(2002)年に実施され、人骨1体が確認されている。

#### ① 1号土坑墓(1995-1号人骨)

土坑墓は、長径100cm、短径78cm、深さ20cmで楕円形を呈している。土坑は北西端に人骨(頭蓋骨・下顎骨一部)が出土している。男性の可能性があり、年齢は壮年としている。上加世田式土器期の土坑墓とされている。

#### ② 2号土坑墓(1995-2号人骨)

長径160cm・短径95cm・深さ30cmで、頭部が北西方向を向く、ほぼ完全な状態の左右の膝と股関節を強く曲げた仰臥屈葬人骨が出土している。壮年の男性とされ、左右外耳道に外耳道骨腫が認められ、上下顎4本の抜歯が確認されている。推定身長はピアソン式163.7cm、藤井式161.2cmである。上加世田式土器期の土坑墓・人骨とされている。

#### ③ 1997-1号人骨

保存状態は不良で、頭蓋と体股骨の破片が残るだけで、骨の形態はほとんど不明とされる。性別不明で、壮年前半とみられ、抜歯は確認されていない。

#### ④ 3号土坑墓(1997-2号人骨)

長径150cm・短径80cm・深さ20cmの楕円形を呈している。ほぼ全身の人骨が残っている。人骨の出土状況は、右の体側を下にした側臥で、肘・股・膝を半屈曲した状態で出土している。性別は女性、年齢は壮年前半と推定されている。上顎左右犬歯が抜歯されている。推定身長は149.5cmである。縄文時代後期末~晩期初頭



され、黒色磨研土器（三万田式・御領式）と推定している（註3）。

#### ⑤ 4号土坑墓（1997-3号人骨）

長径約150cm・短径約80cm・深さ約20cmの楕円形を呈している。ほぼ全身の人骨が残っている。人骨の出土状況は、仰臥屈葬である。性別は男性で、年齢は壮年初期（20歳～21歳）で、抜歯はない。下顎骨に3か所の治癒骨折痕が報告されている。推定身長は161.0cmである。縄文時代後期の市来式土器の時期とされている（註4）。

#### ⑥ 2002-1号人骨

27トレンチから出土しており、頭蓋骨のみで、保存状態は余りよくないといわれる。上顎の犬歯は存在しており、風習的な抜歯は行われなかった可能性が高いとしている。外耳道骨腫が左右の外耳道に認められている。縄文時代後期の市来式土器がトレンチ内から出土しており、概ね市来式土器の時期としている。

#### (11) 大泊貝塚

肝属郡大岡町に所在し、貝塚のある大泊湾は大岡海峡に面している。湾奥から南側にかけて砂丘が発達し、その南側一角に貝塚が形成されている。

昭和28年（1953年）国分直一氏が発掘調査を行い、縄文時代後期の貝塚として知られている。昭和57年（1982年）に鹿児島県教育委員会が実施した大岡地区埋蔵文化財分布調査で、現状の確認を行っている。貝塚を伴う遺跡は外之浦を結ぶ県道に沿い、南側の砂丘、北は大泊集落の後背地まで広範囲に及んでいることが判明している。

人骨は、昭和28（1953）年の調査時に出土しており、表土から81cmの層に、南から北に伸展したと考えられる下肢・胸骨の一部が発見されている。胸骨の上方には、20cmの砂層を挟んで、74×25×10cmの石が出土しており、埋葬した上で胸部に石をのせたものと推定されている。

#### (12) 一陣長崎鼻遺跡

種子島の南部に位置する南種子町に位置する。遺跡は、種子島南部、太平洋側の海岸砂丘上に立地する貝塚遺跡である。人骨は、昭和31（1956）年に1体、平成21（2009）年に頭蓋骨5片が出土している。

#### ① 昭和31（1956）年人骨

昭和29（1954）年に地元の人川添憲枝氏により、出土品が駐在所に報告されている。その後、分布調査が盛岡尚孝氏により実施されている。8月には、盛岡氏・三友国五郎氏によって試掘調査が実施され、縄文時代晩期の黒川式土器期の貝塚であることが判明している。昭和31（1956）年に露出している人骨を川枝氏が採集し、盛岡氏に人骨の出土地点を案内している。その際に記録に、出土状況については、地表より1.5メートル位の深さのところから出土したらしい（盛岡1956）。

手は前でくみ、あしを曲げて埋まっていたということから、恐らく屈葬であることは間違いないと思う（盛岡1968）、と報告している。また、骨の特徴については、成人男性で上顎左側中切歯に人為的抜歯が認められ、かつ下顎左側中切歯に、人為的な水平研磨が認められることが指摘されている（金岡1958）。この人骨は、現在、九州大学に保管されている。以上の報告から、地表から1.5m下層で、屈葬位で埋葬された人骨で、周辺からは獣骨や貝製品、黒川式土器が出土していることから、縄文時代晩期（黒川式土器期）のものと考えられる。

なお、昭和31（1956）年人骨は、南種子町教育委員会2011で再検証されている。それによると、全体的に頑丈で恥骨、大坐骨切痕等の骨盤形態から男性で、歯の嚙耗の程度が強いことなどから、熟年、もしくは老年（60歳以上）達した高齢と報告している。推定身長は、2つされており、162.1cmと160.4cmで、当時としては高身長であったことを指摘している。また、風習的な抜歯の可能性が指摘されていたが（金岡1958）、抜歯の風習は、上顎の側切歯と犬歯を対象とした抜歯が多く確認されており、一陣長崎遺跡出土人骨の上顎左側中切歯を対象とした頻例がないことから、事故などの非意図的な要因で脱落する可能性もあることを指摘している。さらに、下顎左中切歯に人為的水平研磨の可能性が報告されているが（金岡1958・盛岡1968）、再検証では明確な確認ができなかったことを報告している。

#### ② 平成21（2009）年人骨

平成21年調査は、2つの調査区を設定している。貝塚南端の遺跡の範囲を確認する第1調査区から、人骨が出土している。出土した人骨は、乳幼児の頭蓋骨片と成人の頭蓋骨片で、貝・獣骨などの自然遺物と混在して、いずれもⅡ層（暗褐色砂層）から出土している。この調査により、黒川式土器の単純期の貝塚であることが、再確認されている。

#### ・乳幼児の頭蓋骨

頭蓋骨5片が出土しており、最大のものは5cm程度の破片のようである。最大のものは、遺構に伴う可能性があったため、検出した段階で精査・サブトレンチでの調査を実施しているが、明瞭なプランは確認されていない。

頭蓋骨片は同一個体の可能性が高く、骨の厚さから乳幼児の脳蓋骨片で、性別不明と報告されている。

#### ・成人の頭蓋骨片

2.5cm程度の頭蓋骨片が1片出土している。脳蓋骨の一部で、縫合が含まれており、骨の厚さから成人に達しており、性別は不明と報告されている。

#### (13) 下山田Ⅱ遺跡

奄美市笠利町所在し、海岸から内陸へ300mほど入った砂丘に形成されている。昭和59（1984）年新奄美空港建設に伴って実施された発掘調査で、人骨4点と遊離

歯1本が出土している。いずれも嘉徳系土器を伴っていたことから、縄文時代後期とされている。

#### ① 下顎骨A

ほぼ完全な形の下顎骨である。壮年の女性とされ、下顎前側中切歯がなく抜歯と推定されている。なお、遊離歯1本は、この下顎骨Aと同一個体とされている。

#### ② 下顎骨B

下顎体だけ残存する。壮年の男性とされる。

#### ③ 上腕骨

左上腕骨の約15cmのみが残存している。成人の女性とされている。

#### ④ 大腿骨

右大腿骨の約18cmのみが残存している。成人の男性とされている。

### (14) 長浜金久遺跡

奄美市笠利町に位置し、地形は後背地標高15m～50mの丘陵の前面に砂丘が発達している。砂丘は南北に長く形成されている。その距離は約1kmになる。標高は約13mである。鹿児島県教育委員会が発掘調査を昭和58(1983)年1月に第1次調査、同年10月に第2次調査、昭和59(1984)年4月から7月まで第3次調査を実施しており、昭和58年の調査時に人骨が3体発掘されている。そのうち1体が縄文時代のものでされているが、形質人類学的には、弥生時代以降の可能性も指摘されている。

#### ① 2号人骨

散乱状態で発掘されており、頭蓋骨のごく一部と、下顎骨の右半分が残存していた。性別は女性の可能性があり、壮年と推定されている。縄文時代とされているが、詳細は不明である。

### (15) 下原洞穴遺跡

大島郡天城町にあり、海岸から約500m内陸に位置し、開口部は標高約90m、幅約27m、高さ1～5mで西に向かって開口している。洞穴前面には、直径約60mの陥没ドリーネが広がる。平成28(2016)年に、先史時代人骨の発見を目的として、天城町教育委員会と鹿児島女子短期大学と共同での学術調査が実施されている。その後、平成29(2017)年～平成30(2018)年に、天城町教育委員会が主体となり鹿児島女子短期大学の協力を得て、発掘調査を実施している。縄文時代後期(貝塚時代前3期)頃の墓跡2基が検出されている。墓跡ごとに人骨の概要を記載する。

#### ① 1トレンチ墓跡02

洞窟奥壁に接するように石灰岩礫をコ字状に配置し、内部にいくつかの石を配置し、その上部に人骨が治められている。墓域スペースがあり、左右の下腿骨が解剖学的位置関係をほぼ保ったままの状態でも出土しており、1次葬を想定している。奥壁側に散乱状態の人骨があり、2次葬の際に奥壁側に押し込まれたとされている。焼か

れた人骨と焼かれていない人骨が存在している。焼かれた人骨は白骨化した骨を焼いたものとされている。貝製小玉やゴカイ類椀管製首飾り2個などが出土している。少なくとも成人3体分の人骨が報告されている。

#### ② 2トレンチ墓跡01

2トレンチ範囲内に2体の人骨が検出されている。2体とも、腰・臀部から下の下半身は解剖学的位置を保っている。洞穴奥壁側に1号人骨、入口側に2号人骨とされている。トレンチ内からは、ハリセンボン頸付加工の首飾り2個や貝玉、面縄前庭式土器などが出土している。2体とは別に少なくとも性別不明成人3体、未成年1体とされる人骨が散乱状態で出土している。焼かれた人骨と焼かれていない人骨が存在している。焼かれた人骨は白骨化した骨を焼いたものとされている。遺構などの堀込は確認できなかったが、人骨の出土状況から、土坑墓もしくは、遺体に土をかける形の埋葬を想定している。

#### ア 1号人骨

伸長葬である壮年の女性で、上半身は埋葬後(白骨化後)に改めて人為的に動かされた可能性を指摘している。

#### イ 2号人骨

伸長葬で壮年の男性で、上半身は埋葬後(白骨化後)に改めて人為的に動かされた可能性を指摘している。

### (16) 中甫洞穴

大島郡知名町にある。ドリーネの1つで、標高約100mで、森林に覆われた径約70mの窪地であり、南東と北西の2か所に地下の鍾乳洞に通じる洞穴が開口しており、規模の大きい北西側の洞穴が中甫洞穴である。知名町教育委員会は中甫洞穴の重要性から、昭和58(1983)年に国や県の補助を受け、第二次の発掘調査を実施しており、その際に縄文時代及び縄文時代以降とされる人骨2体が出土している。本稿では、縄文時代とされる1体のみを記載する。

#### 1983年1号人骨

土坑は隅丸の三角形で、頭部を南東方向にむけ、顔面や折り曲げた手足を東向きにした横臥屈葬の人骨1体が埋葬されていた。土坑土輪両端に各3個と2個の石灰岩礫が人骨を挟むような形で検出され、意図的に配置したものと考えられる。人骨は、後頭骨の一部を欠損している以外はほぼ完全である。壮年の女性とされ、外耳道骨腫は両側とも認められない。推定身長値は、ピアソン式147.08cm、藤井式142.48cmと推定されている。抜歯は認められていない。縄文時代とされ詳細な時期は不明である。

### (17) 神野貝塚

沖永良部島知名町大津勘の太平洋に面した臨海砂丘地に立地している。昭和57(1982)年に沖縄国際大学、昭和58(1983)年沖縄国際大学と鹿児島大学が発掘調査を行っている。鹿児島大学が調査を行ったCトレンチ

から人骨が出土している。

#### 神野貝塚出土人骨

直径1mの範囲に散乱した状態で出土しており、破片は60個以上とされている。破片の大きさは最大径8cm、小さなものは1cm程度あり、四肢骨片と思われる1個を除き、すべて頭蓋骨破片と報告されている。一定程度接合・復元できており、その特徴から壮年の男性の可能性が高いとされ、外耳道骨腫は見られない。縄文時代後期に相当する層から出土しており、後期の可能性が高い。

### 3 集成的まとめ

鹿児島県内の縄文時代人骨出土遺跡は、17遺跡53の人骨が出土している。遺跡立地の内訳は、貝塚10、洞穴3、砂丘2、台地1、低湿地1となっている。人骨が残りやすい貝塚が多い。

時期別には、中期9体、後期32体、晩期8体、不明4体である。後期が全体の60%と占めている。従来から後期の貝塚数が多いのが要因と考えられている。鹿児島県の貝塚数は、鹿児島県埋蔵文化財情報データベースによると縄文時代とされる貝塚は46遺跡、そのうち時期の記載があるものが31遺跡、時期の内訳は早期3、前期6、中期2、後期15、晩期5である。全体の48%が後期の貝塚となっている。後期に属する貝塚の発掘調査が多く実施され、併せて貝塚の規模が比較的大きく、人骨の残りやすい条件を備えていることが、出土人骨が多いことに結びついていると考えられる。

ここからは、性別や年齢、平均身長、埋葬の形などを考察したい。

性別は男性18体、女性17体、不明18体である。埋葬における男女別の区別については、特に見当たらない。

年齢層は、表1のようにになっている。

表1

	男性	女性	性別不明
老年	1	—	—
熟年	3	4	—
壮年	8	10	1
成人	3	2	7
未成年	—	—	1
乳幼児	—	—	1
年齢不明	3	1	8

骨の残存では、全身骨格に近い物が14体報告されている。そこから、鹿児島県の縄文時代の平均身長は、ピアンソン式から算出されたものを主に使用して計算すると男性158.04cm、女性145.82cmである。抜歯は男性2体、女性2体で見られ、抜歯なしと判断されている人骨は12体である。その他は、歯そのものがない場合が多く不明である。

素潜り等によるとされる外耳道骨腫は垂水市の柘原貝

塚の3体のみが報告されている。

埋葬の形は、表2のようにになる。

表2

	時期			
	中期	後期	晩期	不明
伸展葬	0	3	—	—
仰臥伸展葬	1	1	—	—
屈葬	—	2	1	—
仰臥屈葬	4	4	2	—
側臥屈葬	—	—	1	—
横臥屈葬	—	—	—	1

一般的に縄文時代は屈葬が主とされているが、今回の集成的でも75%は屈葬である。仰臥（仰向け）か、側臥・横位に関しては、分類できる報告では仰臥12体、側臥・横位2体で、86%が仰臥となっている。時期で偏りがある傾向はないので、鹿児島県内では縄文時代中期以降の人骨の埋葬の形は、仰臥屈葬が主であった可能性が高い。

ほとんどの場合は土坑墓と考えられるが、明確な土坑墓と報告のあるものは5例、埋葬人骨と報告されているものは1例である。これは、トレンチ調査が多いこと、貝塚という特殊な環境のため構構検出が困難を極めるためだと推測される。

散乱と報告されている人骨が3体（後期1、晩期1、不明1）あり、意図的なものか、後世の掘削によるものか明確でない。

なお、九州縄文研究会の資料集等では、霧島市国分の平橋貝塚で、人骨1体の報告がある（前追2002、2006）が今回は資料等を確認することができなかったため、記載していない。

また、伊仙町面縄文貝塚では面縄第1貝塚1トレンチから貝塚時代前5期（晩期末から弥生時代前期）の箱式石棺墓に、仰臥伸展葬で老年女性の人骨が出土している。仲原式後統土器が供献品されているため、弥生時代早期・前期併行と考えられる。また、Cトレンチ東側IV層から、頭蓋骨が出土している。壮年の男性とされ、B P.2700前後の放射性炭素年代が出ており、弥生時代早期・前期併行と考えられる。そのため、面縄貝塚出土の人骨は本稿では記載していない。

以上、鹿児島県内縄文時代人骨の調査状況を概観してきたが、先行研究等とほぼ同様の結果となっている。県内の事例を集成した本稿が様々な方々に読まれ、活用されれば幸いである。

本稿の資料をまとめるにあたり、前追亮一氏・上床真氏には助言や資料提供をいただいた、感謝いたします。

註1：人骨が何処に保管されているかという事を主な目的として作成しているが、保管場所が不明の資料が多いとしている。

註2：垂水市教育委員会2005に平成9・10年度の調査

で、保存状態不良の人物2体を確認とあり。保存状態不良の2体のうち、1体は③1997-1号人骨として本稿に記載した。もう1体は、記載は不明のため、本稿では記載していない。

註3・4：土坑墓計測値は、重水市教育委員会1999に記載はなく、重水市教育委員会2005の総括に記載があり。

#### 【引用・参考文献】

研究史・遺跡ごとに引用・参考文献を記載する。

##### ○ 研究史

九州縄文研究会2002「九州の縄文墓制」第12回九州縄文研究会長崎県島原大会資料集

河口貞徳先生古稀記念著作集刊行会1981『河口貞徳先生古稀記念著作集』

大保秀樹2020「出水貝塚」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(201)

内藤芳篤1984「南西諸島における古代人骨の人類学的調査研究-市来縄文人骨よりの考察-」『鹿大考古』第2号

内藤芳篤・石田肇・小片丘彦1984「鹿児島県出土人骨一覧」『鹿大考古』第2号

中橋孝博2011「鹿児島県種子島・一陸長崎島遺跡出土の縄文時代晩期人骨」『一陸長崎島遺跡』南種町埋蔵文化財発掘調査報告書(17)

藤尾慎一郎・木下尚子・坂本聡・瀧上舞・篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・竹中正巳2021「九州南部へ奄美群島出土人骨の年代調査とDNA分析」『鹿児島考古』第50号鹿児島県考古学会

前迫亮一2002「鹿児島県の縄文墓制」『第12回九州縄文研究会長崎県島原大会資料集』

2006「先史古代の鹿児島-通史編-」鹿児島県教育委員会

##### ○ 江内貝塚

出水市郷土史1968出水市郷土誌編集委員会 p65～p68  
池水寛治1965「鹿児島県出水郡江内貝塚」『日本考古学年報』14日本考古学協会

小片保1965「鹿児島県出水郡江内貝塚人骨概要」『日本考古学年報』14日本考古学協会

##### ○ 出水貝塚

出水市郷土史1968出水市郷土誌編集委員会 p58～p64  
出水市教育委員会2000「出水貝塚」出水市埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2020「出水貝塚」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(201)

大森浅吉・松野茂・大森勲・甲原築磨・竹之下克己・林治茂1960「薩摩国出水貝塚(昭和29年)の人骨について」『鹿児島医学雑誌』第33巻第3号鹿児島県医学学会

河口貞徳1963「鹿児島県出水市出水貝塚」『日本考古学年報』6日本考古学協会

1986「出水貝塚あれこれ」『鹿児島考古』第20号鹿児島県考古学会

長谷部言人1921「出水貝塚の貝殻散骨及び人骨」『京都帝國大學文學部考古學研究所報告』第六冊

##### ○ 麦之浦貝塚

川内市教育委員会1987「麦之浦貝塚」川内市土地開発公社

小片丘彦・川路朋友・佐熊正史・峰和治・山本美代子・岡元満子1987「川内市麦之浦貝塚出土の人骨」『麦之浦貝塚』川内市土地開発公社 p293～p309

##### ○ 市来貝塚

市来町教育委員会1991「川上(市来)貝塚」市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2023「市来貝塚(川上貝塚)」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(218)

河口貞徳1988「薩摩半島西岸域の遺跡 市来貝塚」『日本の古代遺跡38鹿児島』保育社  
2005「出水貝塚」『先史古代の鹿児島』鹿児島県教育委員会

清野賢次1928「薩摩國日置郡西市来村大字川上字宮の後貝塚」『日本旧石器時代人研究』岡書院

小片丘彦・竹中正巳・佐藤正史1991「鹿児島県市来町川上貝塚出土の人骨」『川上(市来)貝塚』市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) p115～p117

田嶋丈夫1930「薩摩國日置郡西市来村大字川上字宮の後貝塚人骨の人類学的研究」『人類学雑誌』45日本人類学会

##### ○ 黒川洞穴

河口貞徳1952「黒川洞穴発掘報告」『鹿児島県考古学会紀要』第2号 鹿児島県考古学会

1967「鹿児島県黒川洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡特別委員会 平凡社

1967「黒川洞穴」『考古学ジャーナル』第13号ニュー・サイエンス社

##### ○ 草野貝塚

鹿児島市教育委員会1983「草野貝塚」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

1988「草野貝塚」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

小片丘彦・峰和治1988「草野貝塚出土の前頭骨片」『草野貝塚』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

##### ○ 上焼田遺跡

鹿児島県教育委員会1977「指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(5)

内藤芳篤・坂田邦洋1977「上焼田遺跡出土の人骨所見」『指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

##### ○ 大渡遺跡

指宿市誌1985指宿市役所総務課市誌編さん室  
国分直一1955「指宿市大渡遺跡試掘報告」『鹿児島県考古学会紀要』第4号鹿児島県考古学会  
国分直一・河口貞徳・河野治雄・重久十郎1958「鹿児島県指宿市大渡遺跡」『日本考古学年報10』日本考古学協会  
○ 前田遺跡  
始良市教育委員会2023『前田遺跡』始良市埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集  
○ 終原貝塚  
垂水市教育委員会1996『終原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)  
1999『終原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)  
2005『終原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)  
峰和治・竹中正巳・小片丘彦1996「垂水市終原貝塚出土の縄文時代人骨」『終原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 第V章  
峰和治・竹中正巳・小片丘彦1999「垂水市終原貝塚出土の縄文時代人骨-平成9年度調査」『終原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)  
竹中正巳2005「垂水市終原貝塚出土の縄文時代人骨-2002-1号人骨」『終原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)  
○ 大泊貝塚  
鹿児島県教育委員会1983「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』(25)  
国分直一1963「鹿児島県肝属郡佐多町大泊遺跡」『日本考古学年報』6 日本考古学協会  
○ 一陣長崎鼻遺跡  
南種子町教育委員会2011「一陣長崎鼻遺跡」『南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書』(17)  
金岡丈夫1958「種子島長崎鼻遺跡出土人骨に見られる下顎中切歯の水平研削例」『九州考古学』第3・4号九州考古学会  
竹中正巳2011「種子島一陣長崎鼻遺跡出土の人骨-2009年出土人骨-「一陣長崎鼻遺跡」南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(17)p60  
中橋孝博2011「鹿児島県種子島・一陣長崎鼻遺跡出土の縄文時代晩期人骨」『一陣長崎鼻遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(17)p50~p59  
盛園篤孝 1956「人骨を出土せる長崎鼻(南種子村中之下)遺跡について」『ちくら』第12号 ちくら編集部  
1968「種子島における古代の埋葬(その一)」『種子島民俗』第18号 種子島科学同好会  
※盛園氏1956・1968は1次資料を確認できなかったため、盛園氏の引用・参考箇所は、南種子町教育委員会2011による。

○ 下山田Ⅱ遺跡

鹿児島県教育委員会1988『下山田Ⅱ遺跡・和野トフル

墓』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(45)  
小片丘彦・峰和治・川路則友・山本美代子「鹿児島県奄美大島下山田Ⅱ遺跡出土の縄文時代人骨」『下山田Ⅱ遺跡』和野トフル墓。鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(45)

○ 長浜金久遺跡

鹿児島県教育委員会1984『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書31  
1985『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書32  
1987『長浜金久遺跡(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡)』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書42  
松下孝幸1985「4.鹿児島県笠利町長浜金久遺跡出土の人骨」『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(32)

○ 下原洞穴遺跡

天城町教育委員会2020『下原洞穴遺跡・コムロイヨー遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)  
竹中正巳2020「徳之島下原洞穴遺跡出土人骨概報」『下原洞穴遺跡・コムロイヨー遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 第3節  
竹中正巳・坂本稔・瀧上舞2021「鹿児島県徳之島所在遺跡出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集

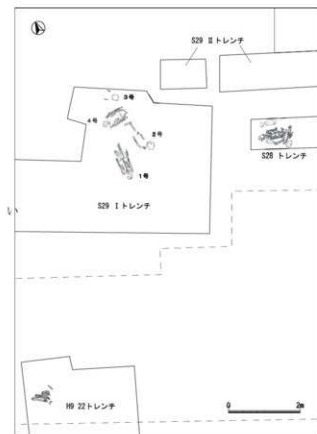
○ 中甫洞穴

知名町教育委員会1984『中甫洞穴(1)』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書  
松下孝幸1984『中甫洞穴出土の人骨』『中甫洞穴』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書

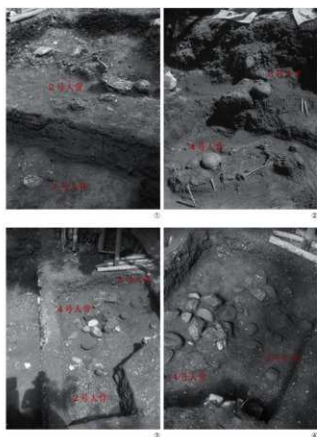
○ 神野貝塚

鹿児島大学法文学部考古学研究室1984『南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究』  
小片丘彦・川路則友1984「神野貝塚出土人骨」『南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究』

(2) 出水貝塚



出水貝塚出土人骨位置図(スケール任意)  
(鹿児島県立埋蔵文化財センター2020から引用)

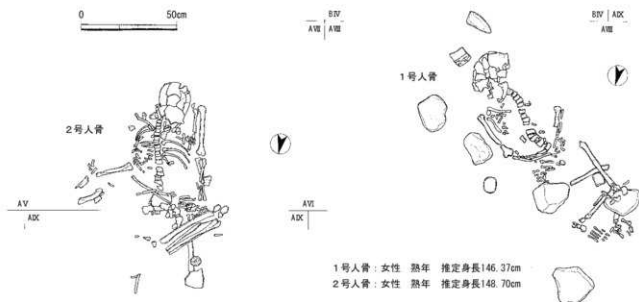


1954年人骨出土状況  
(鹿児島県立埋蔵文化財センター2020から引用)



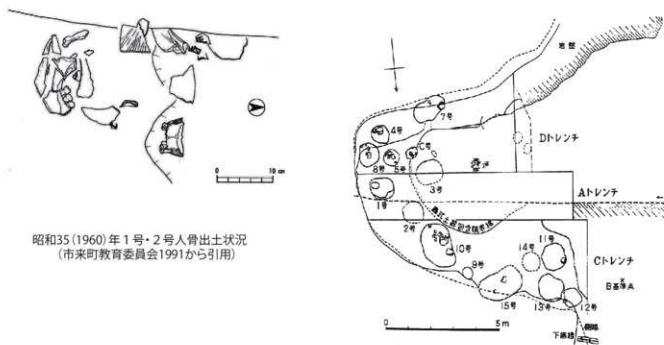
1953年人骨出土状況  
(鹿児島県立埋蔵文化財センター2020から引用)

(4) 市来貝塚



昭和35(1960)年1号・2号人骨出土状況  
(鹿児島県立埋蔵文化財センター2023から引用)

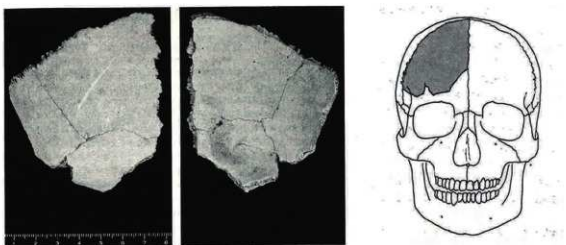
(5) 黒川洞穴



昭和35(1960)年1号・2号人骨出土状況  
(市来町教育委員会1991から引用)

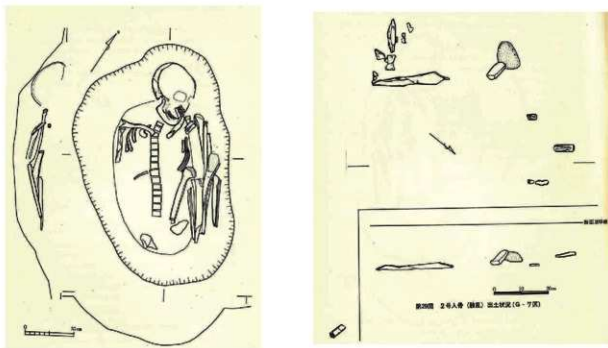
東洞穴平面図と断面図  
(河口貞徳先生古希記念著作集刊行会1981から引用)

(6) 草野貝塚



草野貝塚前頭骨片と残存部位  
(鹿児島市教育委員会1988から引用)

(7) 上焼田遺跡



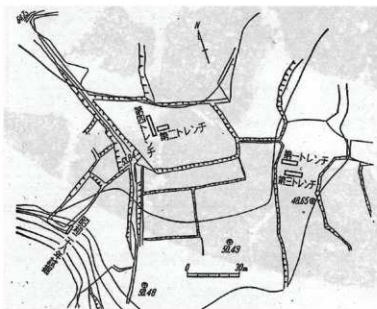
左:土坑墓1号人骨 右:2号人骨  
(鹿児島県教育委員会1977から引用)



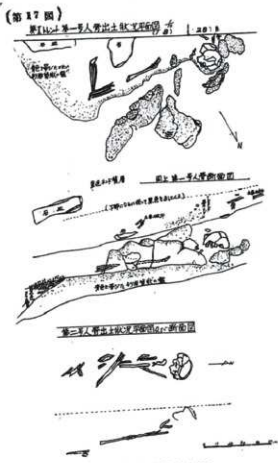
(8) 大渡遺跡



大渡遺跡第一トレンチ出土状況  
(指宿市誌1958から引用)



大渡遺跡 トレンチ位置図  
(国分直一・河口貞徳・河野治雄・重久十郎1958から引用)



上: 第一人骨出土状況図  
下: 第二人骨出土状況図  
(指宿市誌1958から引用)

(8) 大渡遺跡



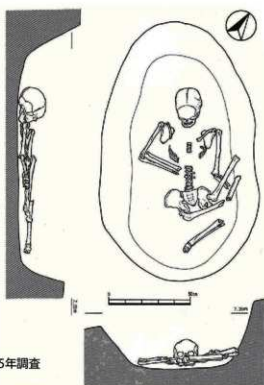
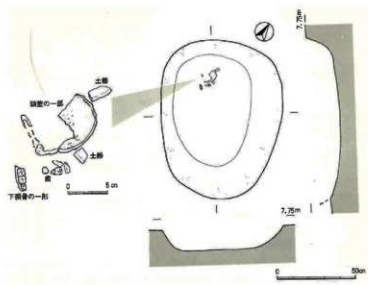
6 第一号人骨



5 第二号人骨

左：第一人骨出土状況 右：第二人骨出土状況  
(指宿市誌1958から引用)

(10) 柘原貝塚



左：1号土抗墓1995年調査 右：2号土抗墓1995年調査  
(重水市教育委員会1996から引用)

(10) 柘原貝塚



左: 3号土坑墓(1997-2号人骨)  
 右: 4号土坑墓(1997-3号人骨)  
 (垂水市教育委員会1999から引用)

(12) 一陣長崎鼻遺跡





図1 人骨の構造

-52-

一障長崎遺跡昭和31年人骨残存状況  
(南種子町教育委員会2011引用・一部改変)

(13) 下山田II遺跡



下山田人上顎骨



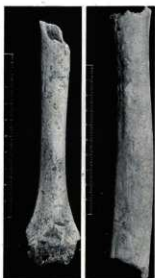
下山田人上顎骨



下山田人上顎骨



下山田人同族中切歯の歯牙線歯冠位

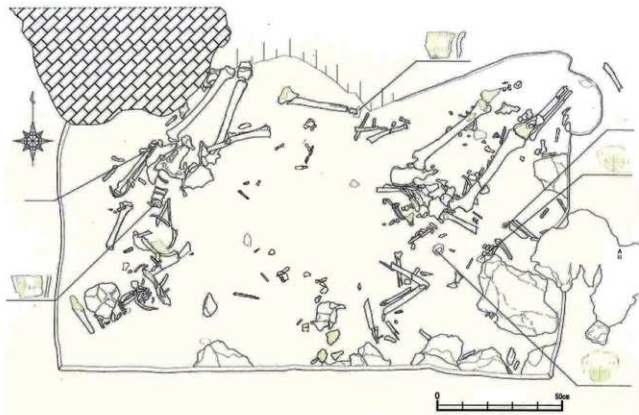


左: 上肢骨片 (女性・成人)

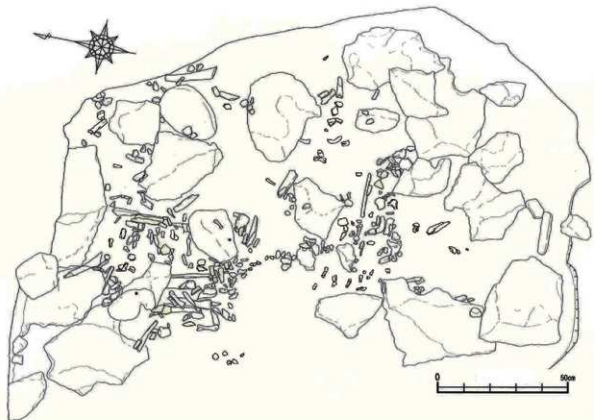
右: 大腿骨片 (男性・成人)

下山田II遺跡  
(鹿児島県教育委員会1988から引用)

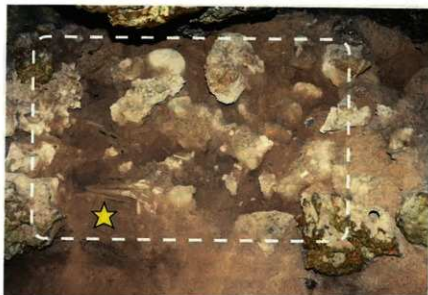
(15) 下原洞穴遺跡



下原洞穴遺跡 トレンチ 2 墓跡01  
(天城町教育委員会2020から引用一部改変)



下原洞穴遺跡 トレンチ 1 墓跡02  
(天城町教育委員会2020から引用一部改変)



下原洞穴遺跡 トレンチ1墓跡02  
埋葬跡:点線内 ★:下腿骨  
(天城町教育委員会2020から引用一部改変)



下原洞穴遺跡 トレンチ2墓跡01  
左:2号壮年男性人骨 右:1号壮年女性人骨  
(天城町教育委員会2020から引用一部改変)

(16) 中甫洞穴



中甫洞穴 人骨出土状況  
(知名町教育委員会1984から引用一部改変)

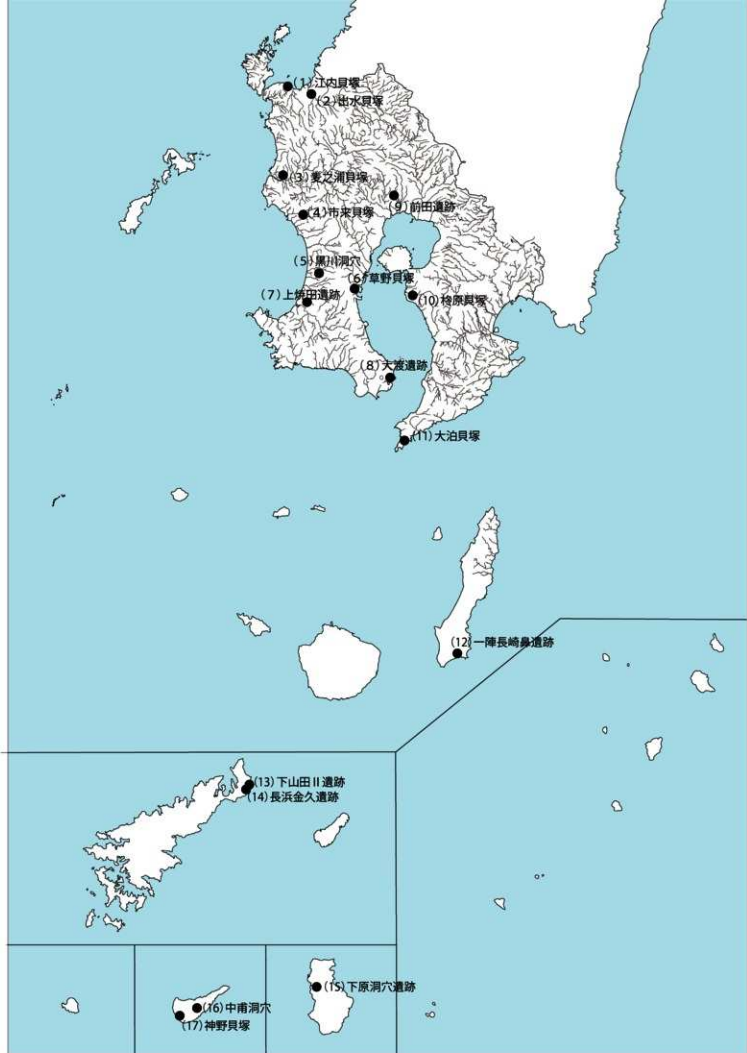
オMトレンチ 土 痕 墓



鹿児島県 縄文時代の人骨出土遺跡 一覧表

No	遺跡名	所在地	人骨名	性別	年齢	出土部位	骨身長等(cm)	調査年	時期			出土状況	位置	土葬形式	備考		
									縄文前期	縄文中期	縄文後期						
9	朝田遺跡	知良町	人骨 1人(1992年、死者) 2骨土器(1992年、死者) (1992年、死者) (1992年、死者)	—	—	指骨	—	平成13(2001) 平成16(2004)	○		付埋	—	—				
10	輪師遺跡	樋水市	1997-1号人骨	—	壮年	鎖骨・下腿一部	—	平成7(1995)年	○		北西	—	—				
			1997-2号人骨	男性	成人	全身骨格	ピアノ式183.7cm 肩胛式18.2cm	平成7(1995)年	○		東西	あり	外互置葬				
			1997-3号人骨	女性	壮年	鎖骨・左股骨	—	平成8(1996)年	○		土坑	不明	なし				
11	大泊貝塚	南大隅町	2002-1号人骨	女性	成人	全身骨格	ピアノ式161.0cm	平成8(1996)年	○		不明	あり	両平→溝田貝塚→穴・瓦器遺跡 →(左方埋蔵式)火葬	外互置葬			
			2002-2号人骨	—	成人	指骨	—	平成14(2002)年	○		不明	なし	不明	外互置葬			
			2002-3号人骨	—	成人	下腿・胸骨の一部	—	平成28(1916)年	○		不明	なし	不明	不明	外互置葬		
			昭和21(1946)年骨	男性	<6は享年(66歳以上)遺した	全身骨格	ピアノ式182.1cm 肩胛式18.4cm	昭和28(1953)年	○		不明	あり	不明	不明	不明	不明	
			平成21(2009)年 長崎県人骨	—	乳幼児	—	—	—	昭和31(1986)年	○		不明	△	不明	不明	不明	不明
12	一俣長崎島遺跡	南種子町	長崎県人骨	—	成人	指骨	—	平成21(2009)	○		不明	—	—	不明			
13	下山田土遺跡	奄美市	下腿骨A	女性	成人	下腿骨	—	平成21(2009)	○		不明	不明	—	—			
			上腿骨B	男性	成人	上腿骨	—	平成21(2009)	○		不明	不明	不明	不明			
14	長浜赤久遺跡	奄美市	上腿骨	女性	成人	上腿骨	—	平成29(1984)年	○		—	—	—	—			
			大腿骨	男性	成人	大腿骨	—	平成29(1984)年	○		—	—	—	—			
			2号人骨	女性	成人	指骨骨格の一部 下腿骨の一部	—	平成29(1984)年	○		不明	不明	不明	不明	不明		
15	下瀬部穴遺跡	大島郡大島町	1号人骨	女性	成人	全身骨格	—	昭和58(1983)年	○		不明	あり	—	—			
			2号人骨	—	成人	指骨骨格の一部 下腿骨の一部	—	平成27(2015)年 平成28(2016)年 平成29(2017)年 平成30(2018)年	○		不明	不明	不明	不明	不明		
			3号人骨	—	成人	指骨骨格	—	平成29(2017)年 平成31(2019)年	○		不明	不明	不明	不明	不明		
16	中瀬部穴遺跡	知良町	4号人骨	男性	成人	全身骨格	—	平成23(2011)年 平成24(2012)年 平成25(2013)年 平成26(2014)年 平成27(2015)年	○		不明	不明	不明	不明	不明		
			5号人骨	—	成人	石火燧骨の骨格部	—	平成23(2011)年 平成24(2012)年 平成25(2013)年	○		不明	不明	不明	不明	不明		
17	神野貝塚	知良町	6号人骨	女性	成人	全身骨格	ピアノ式147.65cm 肩胛式48.45cm	平成28(1986)年	○		不明	不明	不明	不明	不明		
			7号人骨	男性	成人	全身骨格	—	平成29(1984)年	○		不明	不明	不明	不明	不明		





鹿兒島県 縄文時代人骨出土遺跡位置図

# 始良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介(1)

鹿児島県立埋蔵文化財センター

Introduction of excavated materials at the Hoshizako site, Kajiki-cho, Aira City (1)

Kagoshima Prefectural Archaeological Center

## 要旨

始良市加治木町に所在する干迫遺跡の発掘調査では、遺物ケース約3,000箱にも達する大量の遺物が出土した。報告書での掲載は限定的にならざるを得なかったことから、遺跡の実態解明に資するさらなる基礎資料とするため、未発表の遺物についての補足情報を少しずつ整理・紹介していくこととした。今回はその第一弾として縄文時代後期中葉の丸尾式土器を取り上げる。

キーワード 干迫遺跡, 丸尾式土器, 縄文時代後期中葉

## はじめに

鹿児島県始良市加治木町日本山に所在する干迫遺跡は、九州自動車道と東九州自動車道に繋がる単人道路の連結点である加治木ジャンクション建設に伴い発掘調査された遺跡である。

縄文時代後期中葉の遺構・遺物を中心とした出土品の情報については、本報告をはじめ何回か整理・公開してきたが、遺物ケース約3,000箱にも達する膨大な量を適切に裁き切れていない現状があるのも事実である。記録保存の精度を高めるために、少しずつ干迫遺跡の補足情報を整理・紹介していくこととした。

## 1 発掘調査の経緯と経過

日本道路公団と建設省(現国土交通省)鹿児島国道事務所は、加治木町(現始良市)と単人町(現霧島市)住吉との間に「単人道路」の建設を計画し、工事予定路線内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化課(現文化財課)に照会した。

これを受けて、県文化課は1988(昭和63)年度に分布調査を実施した。いわゆる「単人道路」全体では、石塚遺跡・坂ノ下遺跡・春田遺跡の3遺跡の存在が確認され、発掘調査への流れが出来上がっていったが、加治木町の加治木ジャンクション一帯は、水田地帯ということもあり、遺跡の所在が確認されなかったことから、工事へのゴーサインが出ることとなった。

そのような中、1990(平成2)年9月、高架橋工事などによる排土の中に、「多量の土器が含まれている」という一町民からの情報が加治木町教育委員会に入った。連絡を受けた県文化課は、遺跡の有無や範囲を把握・確認するための発掘調査を同年9月25日から10月8日に実施し、発掘調査を必要とする範囲が約14,000㎡に及ぶことを確認した。

これを受け、単人道路の完成が1992(平成4)年3月に迫っていることから、1991(平成3)年2月には全面

調査に着手することとなった。

結果的に発掘調査は、1992(平成4)年3月1日まで実施され、当初の予定通り、同年3月25日の「単人道路」開通の日を迎えることとなった。

## 2 整理作業及び報告書作成について

報告書作成に係る整理作業は、発掘調査終了からほぼ1年経過した1993(平成5)年4月から1996(平成7)年3月まで実施、報告書はさらに1年後の1997(平成9)年3月に刊行された(文献3)。総数800ページを超える報告書となったが、圧倒的な物量の多さから、代表のまた代表選手しか掲載できなかったというのが実態で、最低限の記録保存にとどまっている状態であることは前述したとおりである。

それらもあって、単人道路と同じ国道10号バイパス建設関係で発掘調査した始良町(現始良市)中原遺跡の報告書(第3分冊)の中で付録を設け、縄文時代後期中葉の土器450点を掲載し紹介した(文献5)。本稿は、干迫遺跡の調査報告第3弾にあたるもので、172点の丸尾式土器を追加資料として掲載する。

## 3 紹介資料の概要

今回取り上げる丸尾式土器は、曾於市末吉町に所在する丸尾遺跡の出土資料を標式とする土器である。市来式土器の後半の土器として意識されていた「丸尾タイプ」が、後に「丸尾式土器」と独立一型式として設定・提唱して今日に至っている(文献1)。

丸尾式土器には、台付皿形土器も存在するが、器種の多くは深鉢である。ただ、深鉢にも山形口縁や平縁口縁、「く」字状口縁や外反口縁等があり、その組み合わせで大きく4種の形態からなっている(表1)。

表1 丸尾式土器の深鉢分類

口縁部形態	屈曲口縁 (A)	外反口縁 (B)
山形 (a)	Aaタイプ	Baタイプ
平縁 (b)	Abタイプ	Bbタイプ

文献5では、丸尾式土器を第Ⅲ群第5類土器として紹介した(図1)。

図1はその文献5で紹介した丸尾式土器の中から、完形ないし関係に近い資料を抽出して掲載したものである。表1にある4つのタイプが揃って出土していることがわかる。文献5の中では、A aタイプとA bタイプがそれぞれが35点、B aタイプが27点、B bタイプが20点紹介されている。

図1を見ればわかるように、器形による違いのほかは貝殻縁部による連続刺突文が施されているという共通項が特徴的である。口縁部下に斜位の貝殻縁部を1段ないし2段めぐらすものや、それに同じ貝殻縁部ではあるが、刺突の強弱や大きさ・方向など、若干アレンジを加えた連続刺突文が主たる文様となっている。

そのような中、1と3には、貝殻刺突文の間に多重の沈線を組み合わせた文様が施されるという、丸尾式土器の中では複雑で、ある意味華麗な文様が施されている。これは、前段階の土器型式と考えられる市来式土器の特徴を踏襲したもので、丸尾式土器の中では最も古い段階のものと考えられるタイプである。ちなみにBタイプに同様な沈線文様は見られない。

今回紹介する丸尾式土器も表1にある4つのタイプに大別することができる。A aタイプから順に紹介していくこととする。

#### (1) A aタイプ (図2~14: 1~104)

口縁部に4か所の山形頂部をもち、口縁部断面形が「く」字状を呈しながら外側に開く深鉢形土器である。1~104の計104点あり、紹介する4つのタイプの中では最も多い資料数となっている。これらはさらに口縁部下に多重沈線が入るか否かでさらに二分することができる。

1~33が沈線と貝殻刺突文の組み合わせたものである。

貝殻刺突文は「く」字状を呈する口縁部屈曲の上下に施されているが、沈線文は屈曲の上位のみでみられ、横位の連続貝殻刺突文に挟まれるように施文されている。丸尾式土器に先行する市来式土器の口縁部文様に施される横走する凹線が、丸尾式土器の段階になると細線化し多重化するという傾向がある。凹線から沈線へという流れを具体的に示すと、線の幅が5~10mmから3~5mmとなる。また本数は2.3本から4~8本が主流となる。

34~104は貝殻刺突文のみの口縁部片である。

#### (2) A bタイプ (図15~19: 105~143)

口縁部の断面形が「く」字状を呈するのは、A aタイプ

と同じであるが、口縁部が平縁を呈する土器の一群である。文様は貝殻を主とする横位の連続刺突文で沈線は施されない。口縁部屈曲部分の上下を文様帯とする。39点紹介する。

105~111のように単純な文様から、116~121のように口唇部直下の連続刺突文が加わるもの、さらには斜位の刺突文の下部に横長の凹点状に連続刺突文を加える125~143のようなものもあり、バリエーションは豊富である。

#### (3) B aタイプ (図19, 20: 144~152)

山形口縁を呈し、口縁部は屈曲せずに大きく外反する一群である。量的には4タイプの中では9点と最も少ない。文様は斜位の貝殻刺突文を横位に連続して施すもので、1段と2段のものがある。沈線もなくシンプルな文様構成である。

#### (4) B bタイプ (図21, 22: 153~172)

口縁部は外反し平縁を呈する一群である。文様は斜位を基本とする貝殻による横位の連続刺突文が主である。多くは1段であるが2段のものも存在する。20点紹介する。

以上の4タイプの多くの施文具がサルボウやハイガイなどのアカガイ属の二枚貝で、波状を呈する貝殻縁部を利用した連続刺突文が基本となっている。

なかには、56・140~142のように、貝殻縁部状の曲線を若干呈しつつもハイガイなどのような波状の痕跡を示さないものもある。ハマグリやアサリなどの貝殻利用も考えられるよう。55も貝殻縁部状のカーブを若干描く刺突文であるが、刺突文の一端に深い刺突痕が残ることから、貝殻ではない細い棒状(笹の茎様)の施文具で1本1本曲線を描いたと考えられる資料である。「く」字の屈曲部がやや肥厚気味なので、市来式土器段階の範疇として捉えられる可能性もある。

また、108は細い竹管状施文具による連続刺突文が施されている。

55や108~111などは、他の器形や文様とは若干違和感があることから、丸尾式土器の参考資料として把握しておきたい。

#### 4 出土分布状況から

図23は干迫遺跡の遺構配置図である。発掘調査では縄文時代後期中葉の竪穴住居(建物)跡や集石遺構・土坑などの遺構が多く検出されたが、調査区の中央部をほぼ東西に横切るように検出された自然河川(流路)跡(R1と略称)は特徴的であった。

R1は幅15m、長さ約100mに渡ってゆるやかに蛇行するような形状で検出された。実際には高架橋の橋脚建設工事によって調査区内のおおよそ半分は削平されていた。このR1では多くの遺物が検出され、図24右にあるように、今回紹介する丸尾式土器もF20区やH12区等のR1内で多く出土した。図24左では市来式土器の

出土状況も示したが、一部重なりながらも出土エリアに若干のずれが見られる結果となっている。

丸尾式土器の分布は幸川式土器や北久根山式土器、市来式土器は鐘崎式土器と同様な傾向を見せている。型式ごとの分布状況については、稿を改めて紹介したい。

#### おわりに

以上、干迫遺跡の第Ⅲ群第5類土器：丸尾式土器の追加資料を紹介した。

前述のように、干迫遺跡出土遺物については、今後も機会を作り、順次紹介していきたいと考えている。なお、これまで公開されている干迫遺跡関連の文献について文末に整理したので参照していただきたい。

#### 【干迫遺跡関連文献】

- 1 前迫亮一 1992「異系統土器の一接点—南九州における縄文時代後期中葉の様相：丸尾式土器の提唱—」『南九州縄文通信』8 南九州縄文研究会
- 2 前迫亮一 1993「鹿児島県始良郡加治木町干迫遺跡」『日本考古学年報』44 日本考古学協会
- 3 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997『干迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(22)
- 4 前迫亮一 2002「南の磨消縄文土器—干迫遺跡出土土器に見る磨消縄文土器の変遷に関する覚書」『犬飼徹夫先生古稀記念論集』犬飼徹夫先生古稀記念論集刊行会
- 5 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『中原遺跡』第3分冊 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(54)
- 6 前迫亮一 2004「南の北久根山式土器—干迫遺跡出土資料の位置づけ—」『鹿児島考古』38 鹿児島県考古学会
- 7 前迫亮一 2005「遺跡概説：干迫遺跡」『先史・古代の鹿児島 資料編』鹿児島県教育委員会
- 8 前迫亮一 2007「干迫遺跡からのメッセージ」『加治木史談—八十周年記念誌—』加治木史談会
- 9 九州縄文研究会・南九州縄文研究会 2012「鹿児島県」『縄文時代における九州の精神文化』第22回九州縄文研究会鹿児島大会発表要旨・資料集（石冠と軽石加工品の実測原図写し掲載）
- 10 前迫亮一 2017「南九州における縄文時代後期中葉土器の様相—干迫遺跡出土土器を中心に—」『九州の縄文時代後期中葉土器—北久根山第二型式～西平式土器を中心に—』第27回九州縄文研究会長崎大会発表要旨・資料集 九州縄文研究会

（文責：前迫亮一）

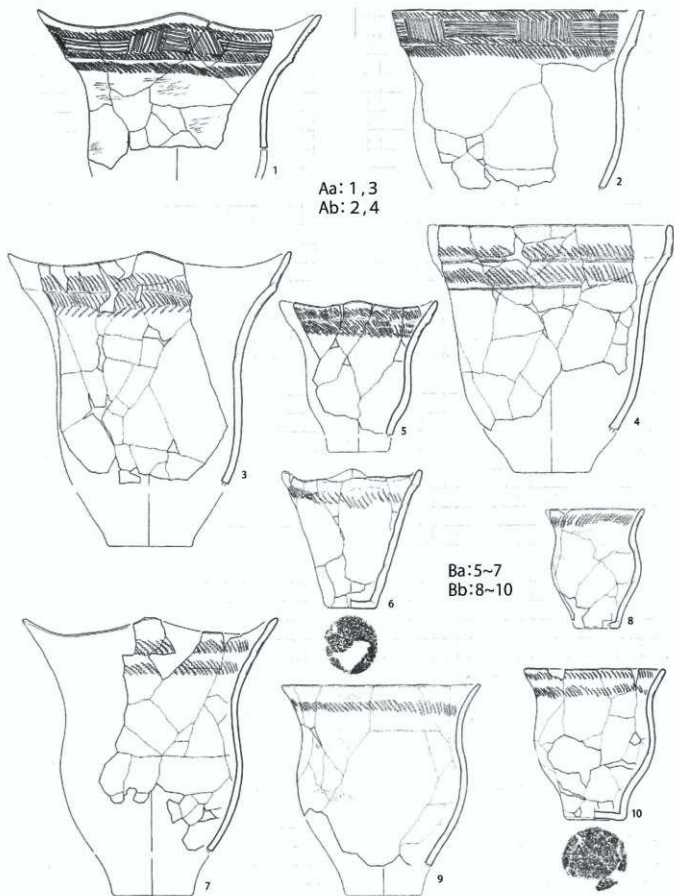
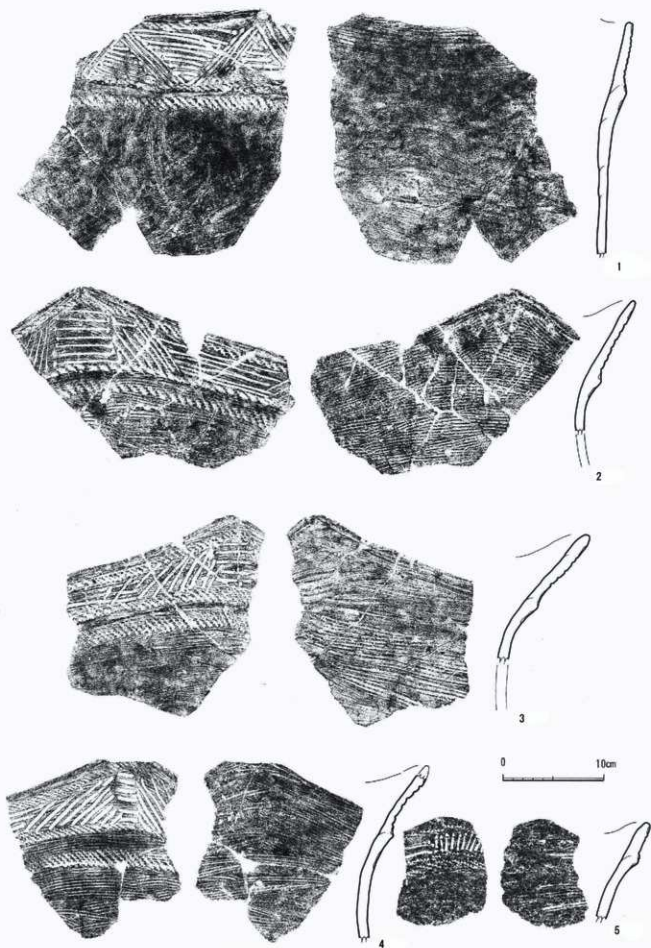
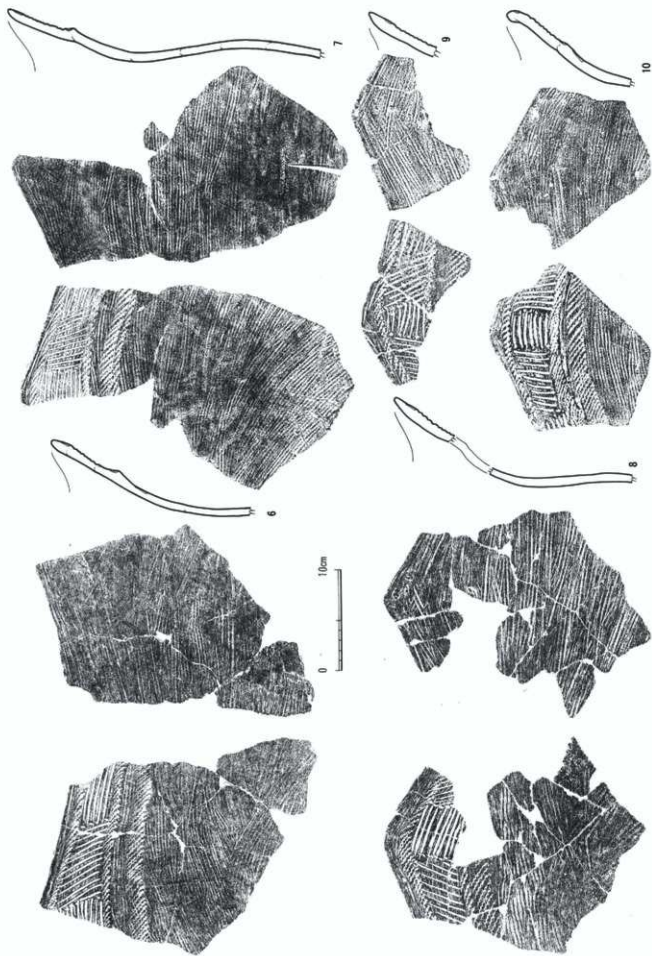


図1 千迫遺跡出土の丸尾式土器 (文献5より)

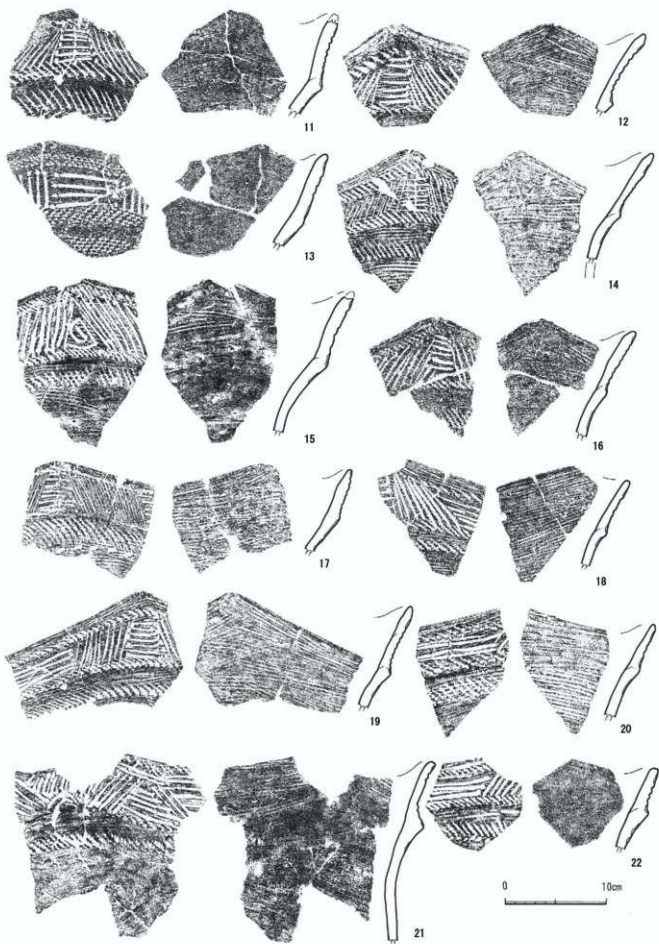


第2図 繩文土器 (1)



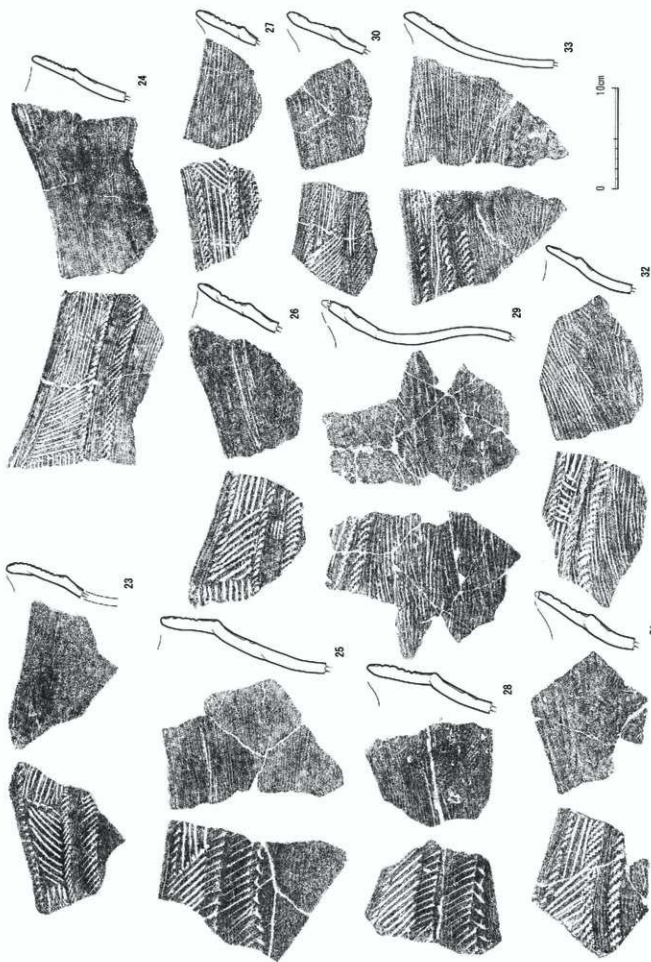
第3図 縄文土器 (2)

鹿児島県立歴史民俗学館文化財センター

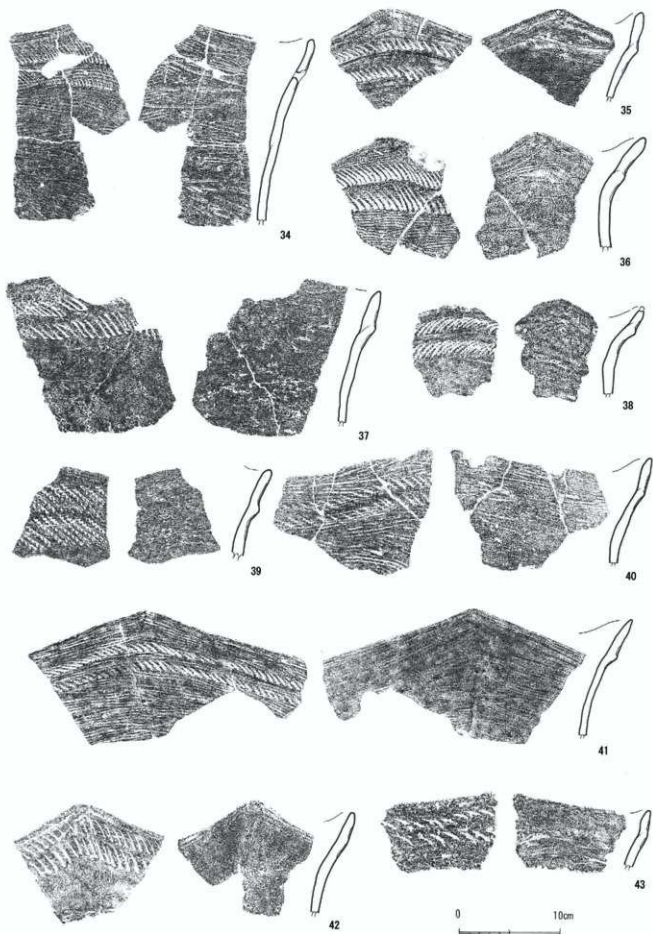


第4図 縄文土器 (3)

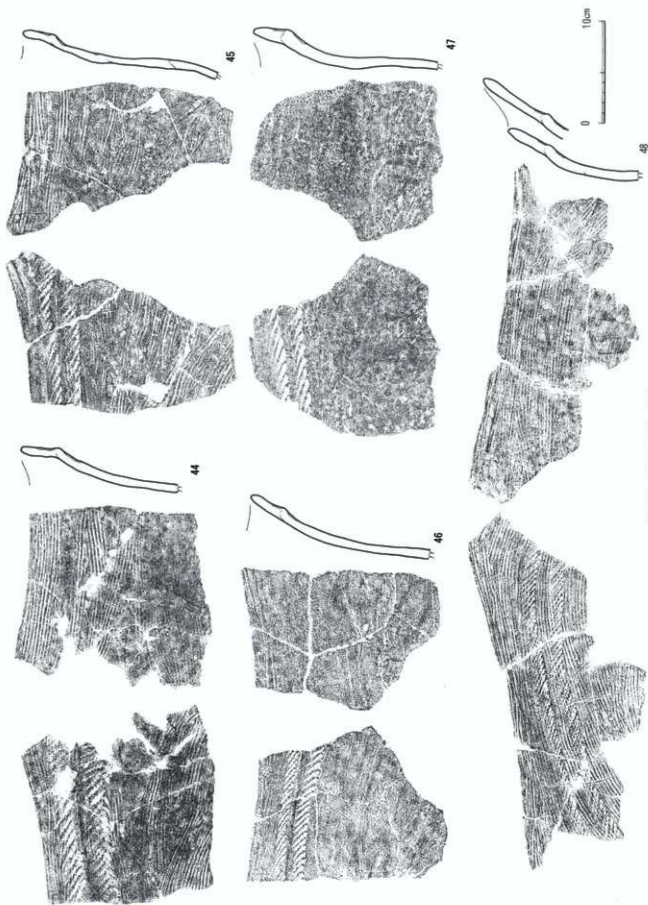




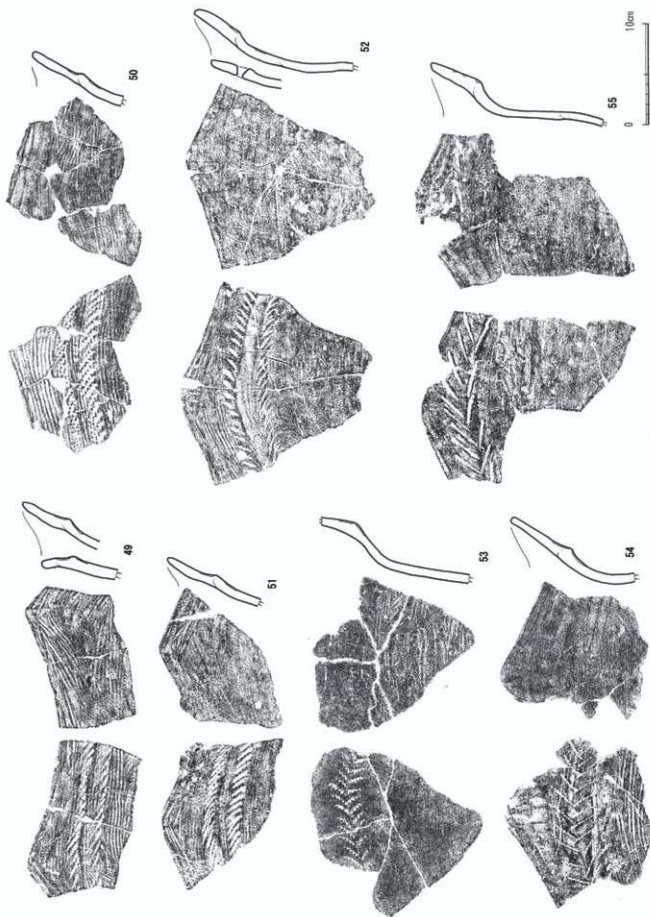
第4図 縄文土器 (4)



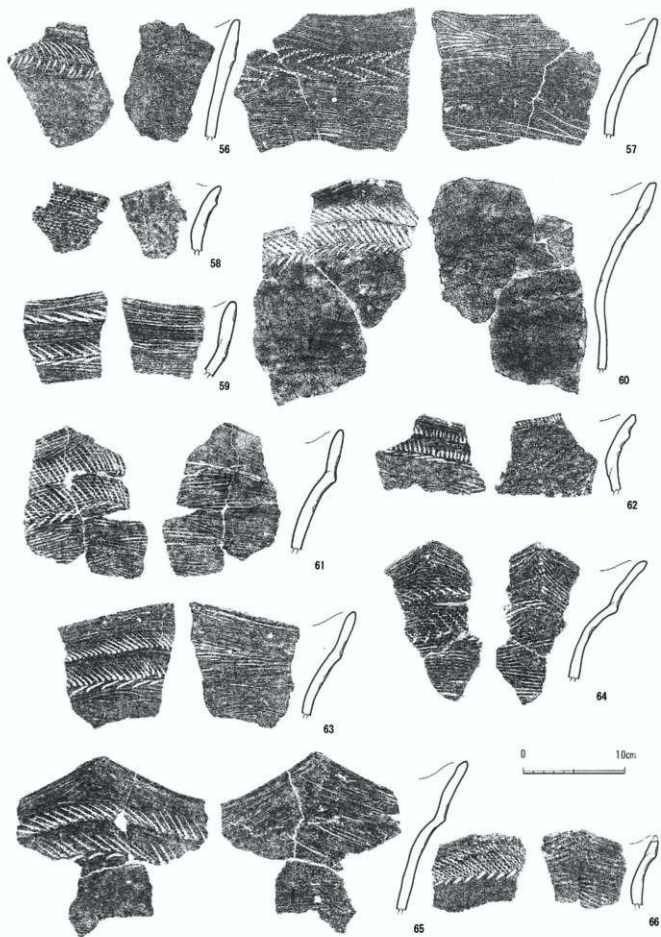
第6図 繡文土器 (5)



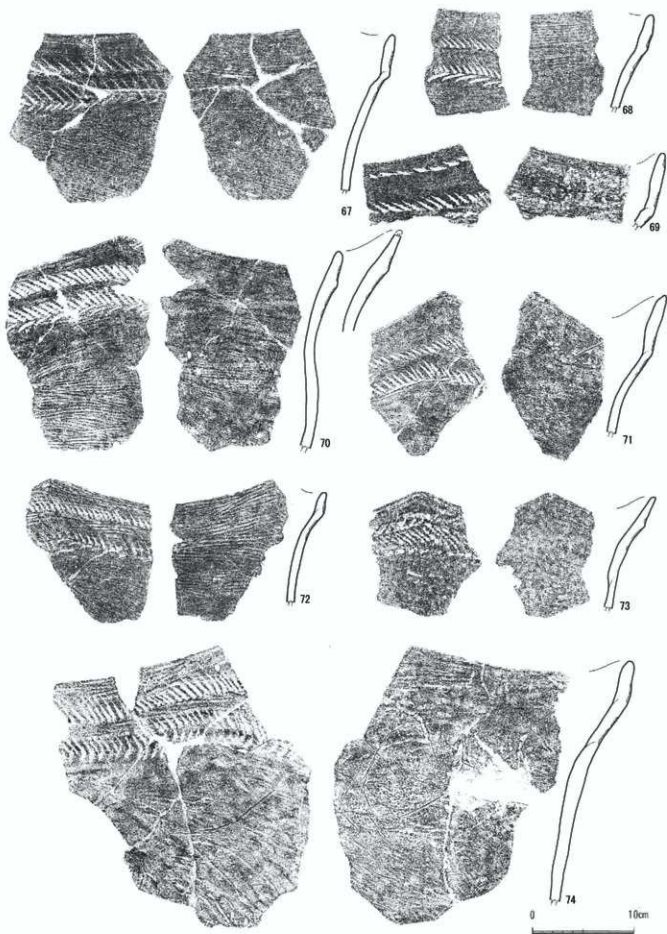
第7図 縄文土器 (6)



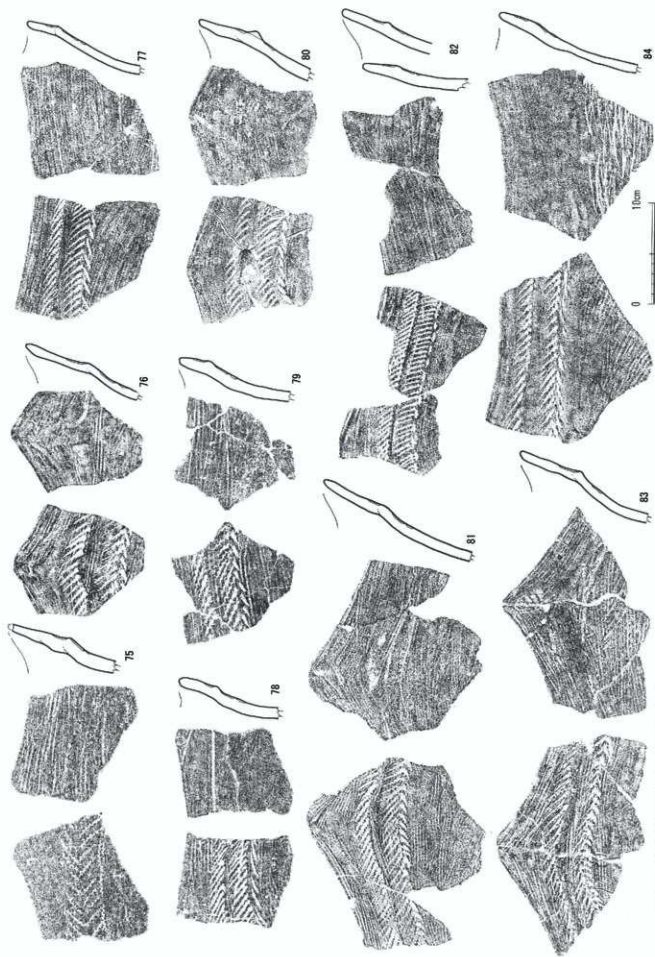
第8図 縄文土器 (7)



第9図 縄文土器 (8)

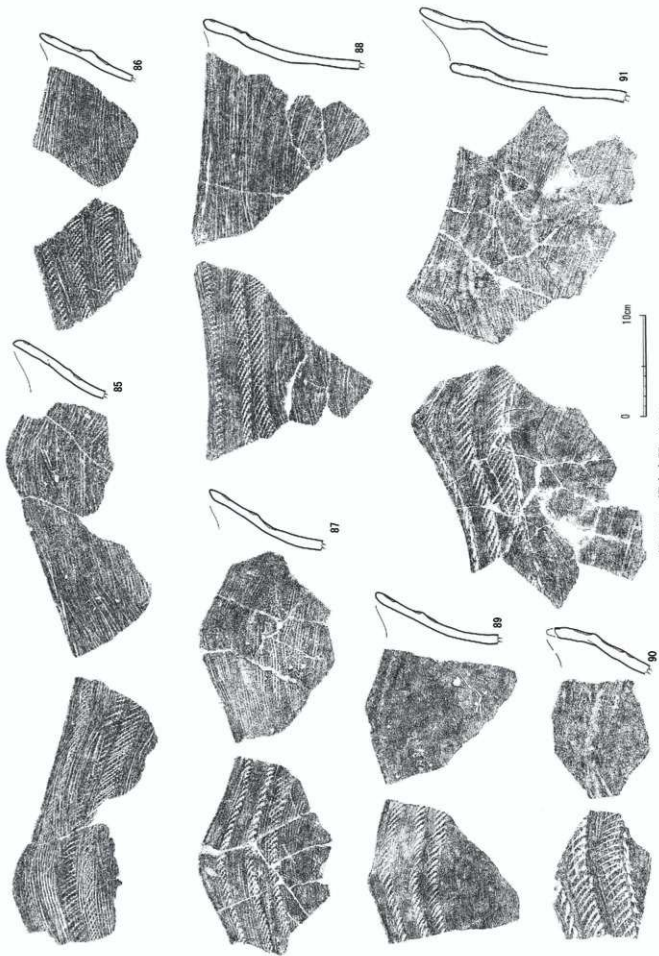


第10図 縄文土器 (9)



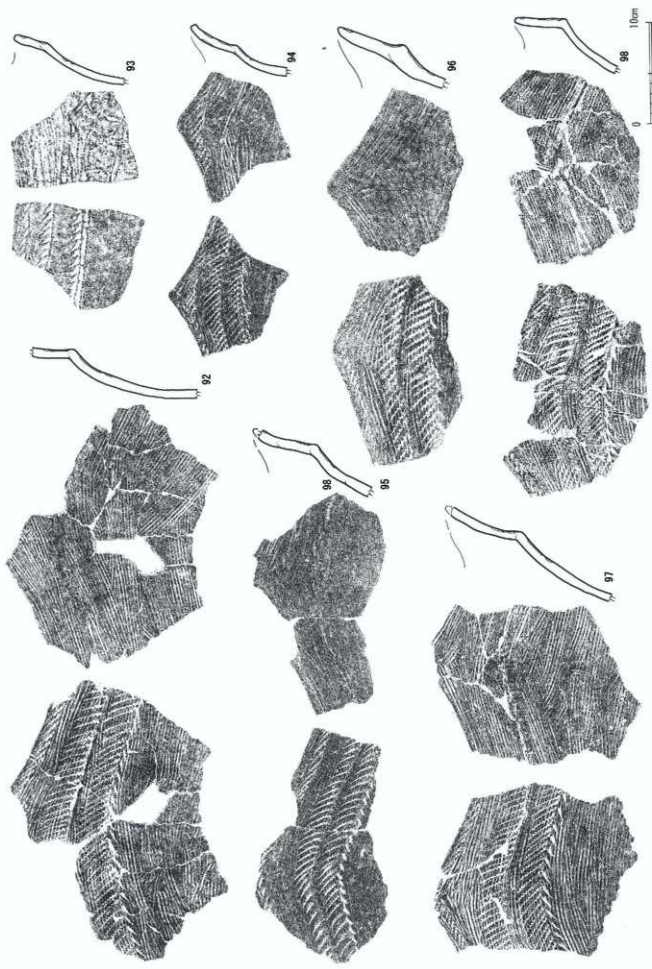
第11図 縄文土器 (10)

縄文文化センター

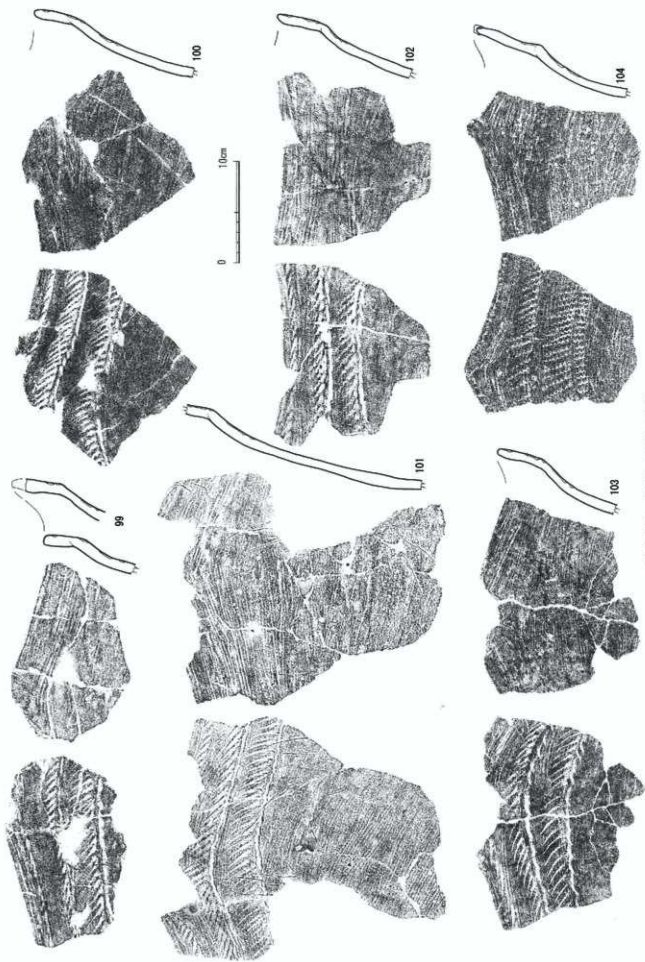


第12図 縄文土器 (11)

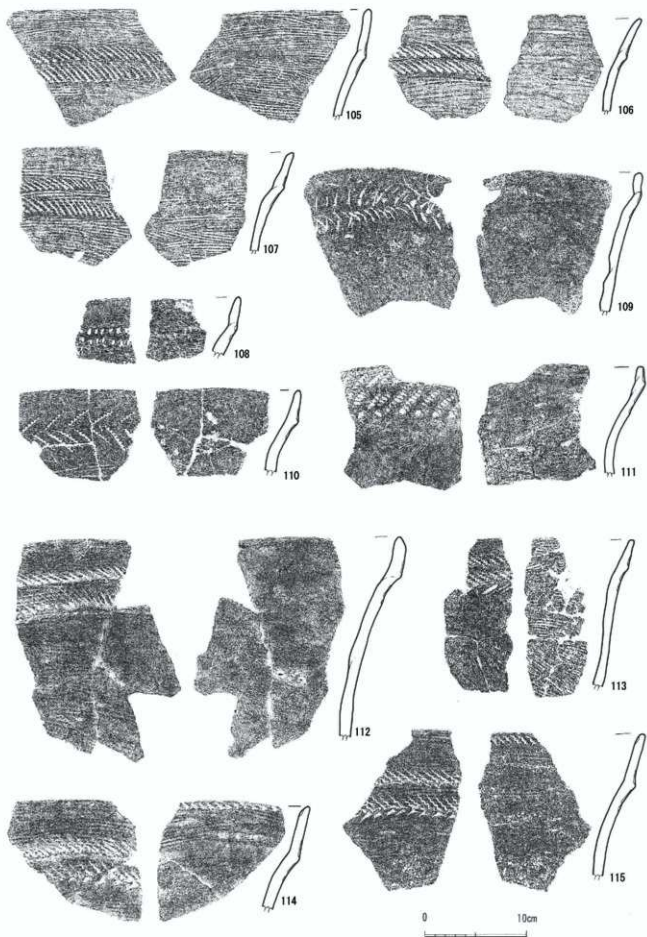




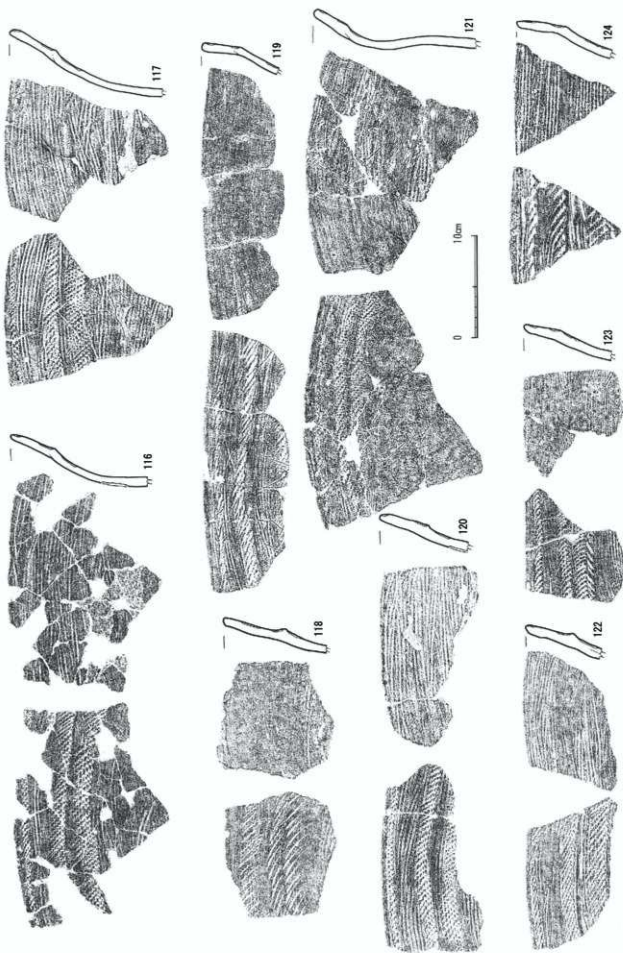
第13回 縄文土器 (12)



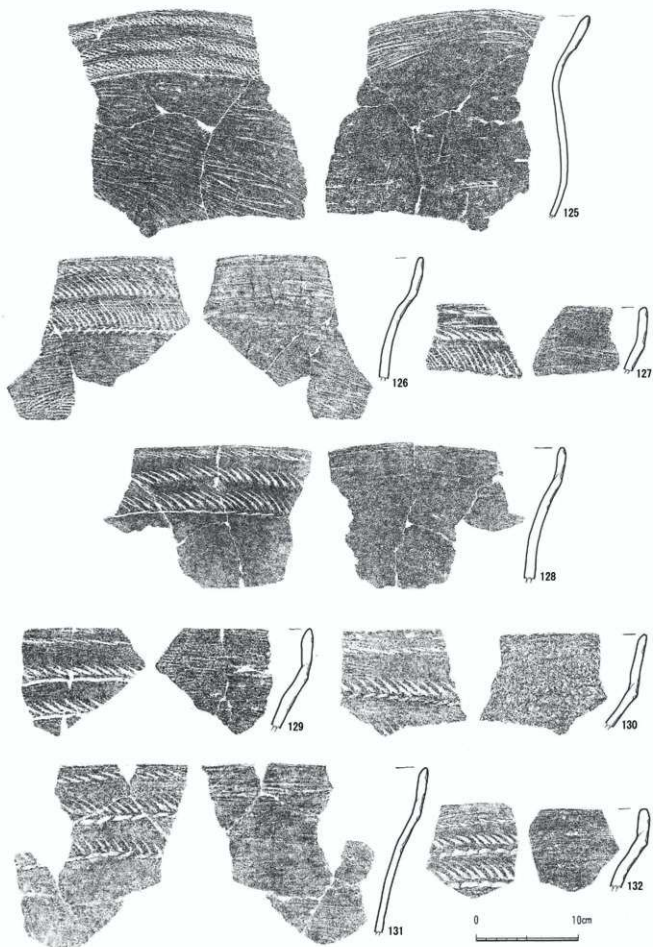
第14図 縄文土器 (13)



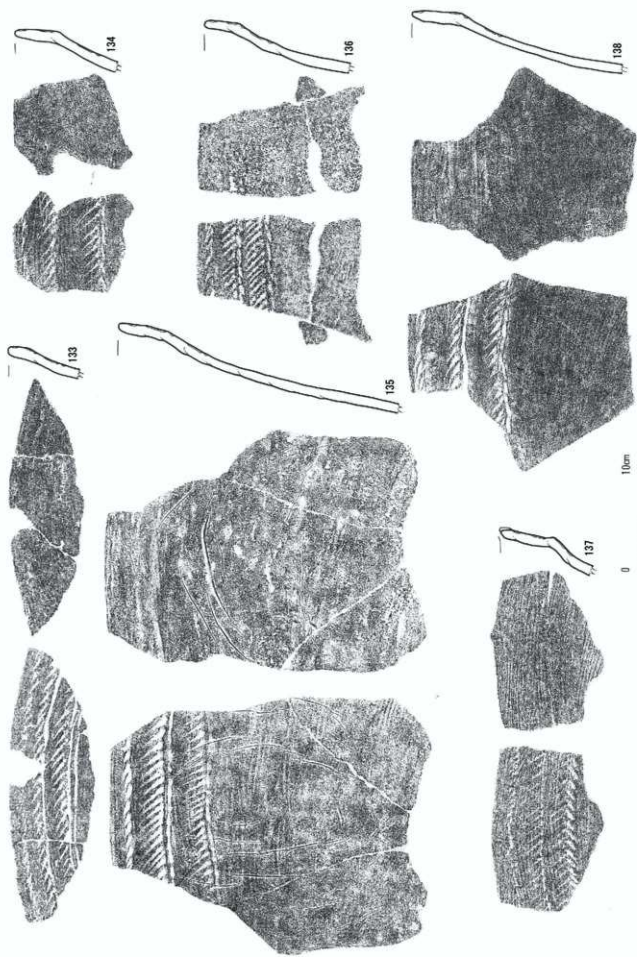
第15図 繩文土器 (14)



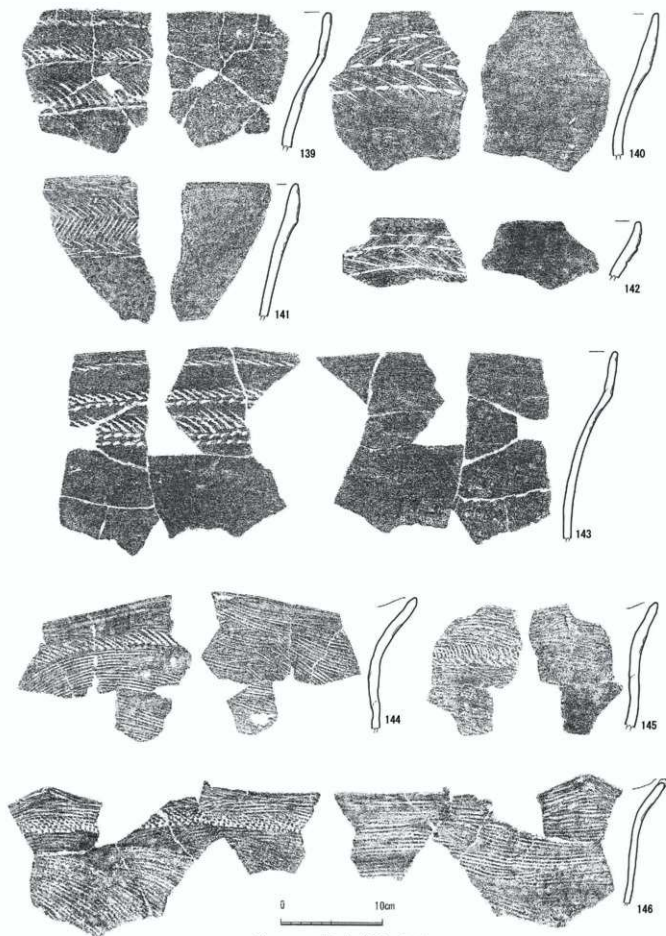
第16図 縄文土器 (15)



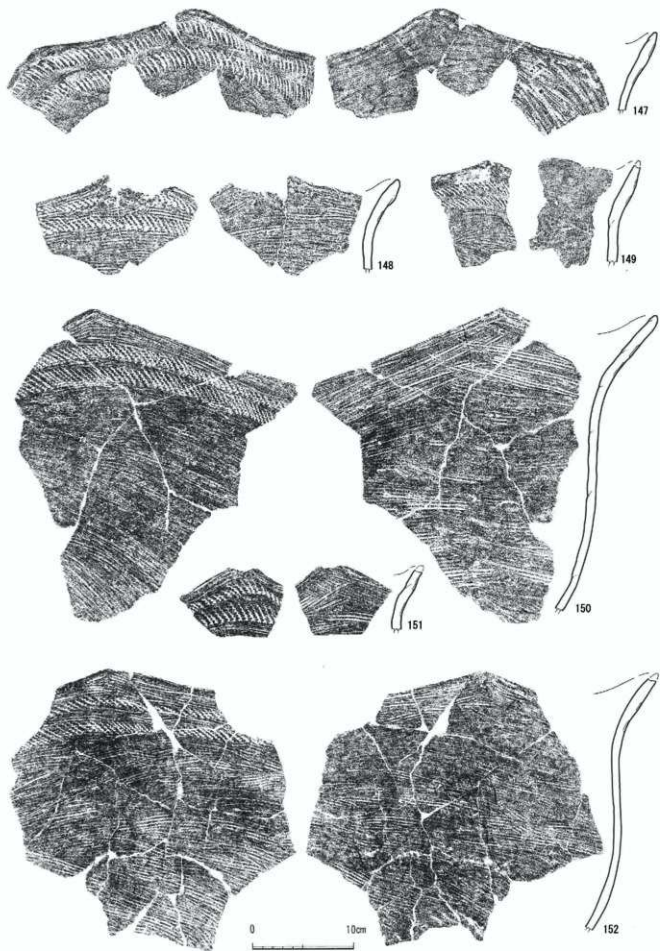
第17図 縄文土器 (16)



第18図 縄文土器 (17)

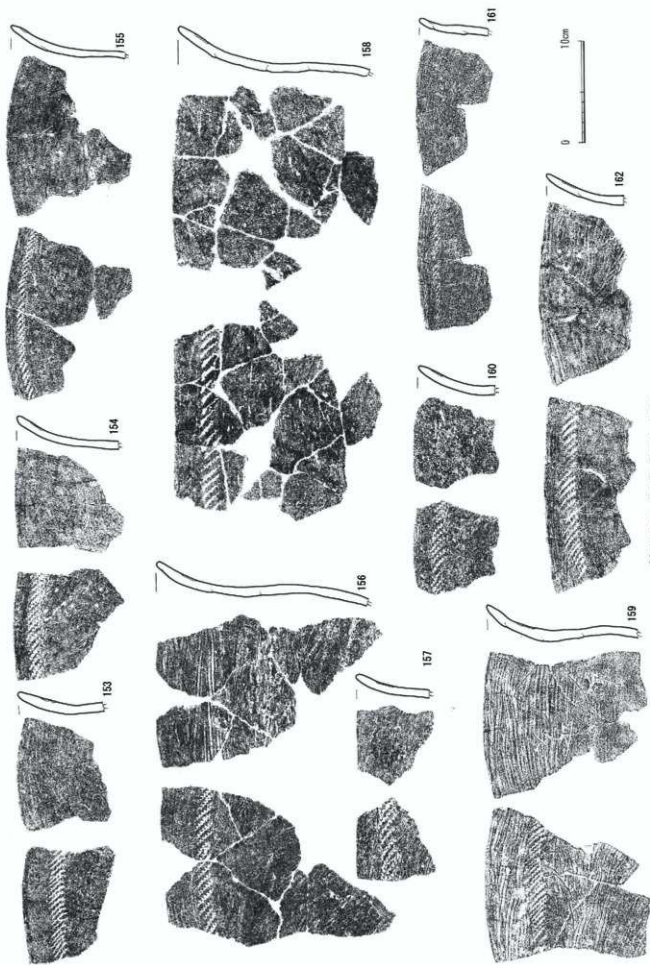


第19図 縄文土器 (18)

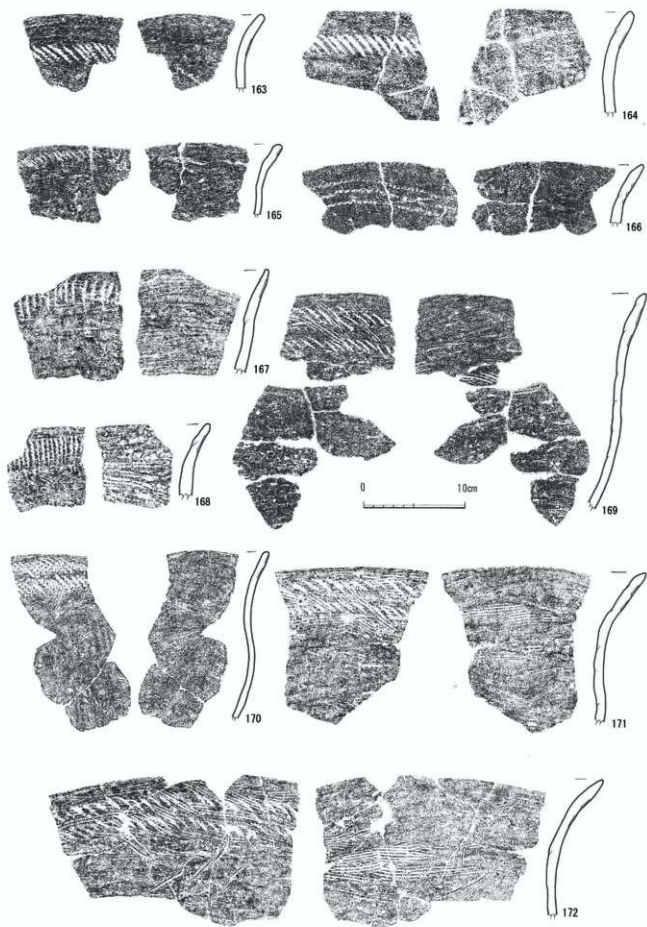


第20図 縄文土器 (19)





第21図 縄文土器 (20)



第22図 繩文土器 (21)



表2 出土遺物観察表 (1)

品目番号	種類	規格	型式	器種	部位	出土区	層	発掘番号	深さ (m)	色調		胎土							備考							
										内面	外面	状態	石灰	長石	角閃	雲母	白粉	茶粉		火山灰	値					
1	縄文土器	皿	丸底	鉢形	口縁部	20F29R1	40657			明茶褐色	密	○	○									良	内 Mn			
2	"	"	"	"	"	22N57R2	38240			明茶褐色	密	○	○	○								B	良	外-Fe, Mn少		
3	"	"	"	"	"	21E93R1	39011			明茶褐色	暗茶褐色	密	○										○	良		
4	"	"	"	"	"	14HR1	—			暗茶褐色	密	○	○										W	良		
5	"	"	"	"	"	—	—			淡茶褐色	砂粒	○											○	良		
6	"	"	"	"	"	20F73R1	38993			明茶褐色	密	○	○												良	
7	"	"	"	"	"	20F76R1	40990			明茶褐色	密	○	○												良	
8	"	"	"	"	"	20F36R1	40871			明茶褐色	密	○	○												良	内 Mn
9	"	"	"	"	"	12H76R1	26883			明茶褐色	淡茶褐色	密	○												良	内 Mn
10	"	"	"	"	"	12H76R1	27302			明茶褐色	淡茶褐色	密	○												良	内 Mn
11	"	"	"	"	"	12HR1	—			明茶褐色	暗茶褐色	細粒	○												良	内 Mn
12	"	"	"	"	"	19E	Ⅶ	41472	13.63	明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○											良	内 Mn, 外 Fe
13	"	"	"	"	"	11HR1	—			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○												良	
14	"	"	"	"	"	21F2R1	37247			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○											良	
15	"	"	"	"	"	12H	Ⅱ	—		淡茶褐色	密	○	○										W		良	内外 Mn, Fe少
16	"	"	"	"	"	20F	Ⅱ	—		明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○									W		良	
17	"	"	"	"	"	15O73R1	26642			明茶褐色	砂粒	○	○	○											良	内 Mn
18	"	"	"	"	"	14G	V	16533	13.03	暗茶褐色	暗褐色	砂粒													良	内 Fe
19	"	"	"	"	"	15O43R1	26231			明茶褐色	黒茶褐色	砂粒	○	○	○	○									良	外 Mn
20	"	"	"	"	"	20F38R1	40872			明茶褐色	密	○	○	○											良	内 Mn
21	"	"	"	"	"	20F	Ⅱ	—		明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○											良	
22	"	"	"	"	"	21E93R1	37222			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○											良	内 Fe, 外 Mn
23	"	"	"	"	"	20F29R1	40857			明茶褐色	砂粒	○	○												良	内 Mn
24	"	"	"	"	"	12HR1	—			明茶褐色	砂粒	○													良	
25	"	"	"	"	"	16G12R1	28481			明茶褐色	密	○	○												良	
26	"	"	"	"	"	20F97R1	40923			明茶褐色	淡茶褐色	密	○	○											良	
27	"	"	"	"	"	15G	V	21993	13.01	暗茶褐色	淡茶褐色	細粒	○	○											良	内 Fe
28	"	"	"	"	"	20F36R1	43196			暗茶褐色	黒褐色	砂粒	○												良	
29	"	"	"	"	"	15G18R1	28246			明茶褐色	密	○													良	外 Mn
30	"	"	"	"	"	15G	V	21992	13.01	明茶褐色	暗茶褐色	密	○												良	外 Fe
31	"	"	"	"	"	12H96R1	28715			明茶褐色	暗茶褐色	細粒	○	○											良	外 Fe
32	"	"	"	"	"	GL	—			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○											良	
33	"	"	"	"	"	20F96R1	33830			明茶褐色	暗茶褐色	密	○										W		良	内 Mn
34	"	"	"	"	"	12H57R1	26526			淡茶褐色	明茶褐色	砂粒	○	○	○										良	外 Mn
35	"	"	"	"	"	20F77R1	38990			明茶褐色	淡茶褐色	密	○	○										B	良	内 Mn
36	"	"	"	"	"	12H68R1	26565			明茶褐色	暗茶褐色	密	○												良	内 Fe, 外 Mn, Fe
37	"	"	"	"	"	12HR1	—			暗茶褐色	黒茶褐色	砂粒	○	○	○	○									良	
38	"	"	"	"	"	23KR2	—			淡茶褐色	暗茶褐色	密	○	○											良	
39	"	"	"	"	"	12H86R1	28711			暗褐色	黒褐色	細粒	○												良	外 Fe, 付着, 9Mn
40	"	"	"	"	"	23K	Ⅱ	—		明茶褐色	細粒	○	○	○	○										良	
41	"	"	"	"	"	12H99R1	28714			明茶褐色	暗茶褐色	細粒	○	○											良	内 Mn
42	"	"	"	"	"	16F	V	23138	12.944	明淡茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	○									良	
43	"	"	"	"	"	20F79R1	38980			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○											良	
44	"	"	"	"	"	20F79R1	39200			黒茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○												良	内 スス付着
45	"	"	"	"	"	20FR1	—			明茶褐色	砂粒	○													良	
46	"	"	"	"	"	15G	V	24430	12.69	明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○											良	外 Fe
47	"	"	"	"	"	12H34R1	28040			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○										W		良	内 Mn
48	"	"	"	"	"	12H99R1	26568			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○										B	良	外 Fe
49	"	"	"	"	"	2059R1	39162			暗茶褐色	砂粒	○	○	○											良	内外 Fe
50	"	"	"	"	"	12H80R1	26564			明茶褐色	暗茶褐色	細粒	○	○											良	外 Mn
51	"	"	"	"	"	12H77R1	28705			暗茶褐色	密	○												W	良	内 Mn, 外 Fe
52	"	"	"	"	"	13H62R1	26476			暗茶褐色	明茶褐色	密	○												良	内 Mn
53	"	"	"	"	"	14G	V	22254	12.98	明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○											良	内 Mn
54	"	"	"	"	"	12HR1	—			淡茶褐色	密	○	○												良	口唇突起
55	"	"	"	"	"	15G	V	23377	12.909	淡茶褐色	暗茶褐色	細粒	○												良	口唇突起
56	"	"	"	"	"	20F96R1	39162			暗茶褐色	明茶褐色	砂粒	○	○											良	補綴孔
57	"	"	"	"	"	15O28R1	26015			暗茶褐色	砂粒	○													良	外 Fe, Mn
58	"	"	"	"	"	16F	V	23106	12.924	黒茶褐色	暗茶褐色	細粒	○	○										W	良	内 Mn
59	"	"	"	"	"	16O32R1	24894			明茶褐色	砂粒	○													良	内面に沈線文様, 内 Mn
60	"	"	"	"	"	20K	V	—		明茶褐色	密	○	○	○											良	イレキユラー
61	"	"	"	"	"	21F54R1	35941			明茶褐色	密	○	○												良	外 Mn
62	"	"	"	"	"	12H87R1	28728			暗茶褐色	密	○	○	○											良	内外 Mn, 外 スス付着
63	"	"	"	"	"	15G	V	24511	12.82	明茶褐色	密	○	○											W	良	内 Fe
64	"	"	"	"	"	12H77R1	26882			暗茶褐色	密	○	○												良	口唇部にスス, 外 スス付着, Mn
65	"	"	"	"	"	12HR1	—			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○											良	内 Mn, Mn少
66	"	"	"	"	"	16F	V	23138	12.944	明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○											良	内 Mn
67	"	"	"	"	"	15G	V	21998	13	明茶褐色	暗茶褐色	細粒	○	○											良	内 スス付着, 外 Mn
68	"	"	"	"	"	21FR1	39971			黒褐色	暗茶褐色	細粒	○	○	○										良	外 Fe

表3 出土遺物觀察表(2)

掛 號	種類	類別	型式	器種	部位	出土区	種	器物番号	深 (m)	色調		胎土							備考					
										内面	外面	状態	石灰	黄土	角閃	雲母	白粉	茶粉		火山灰	値			
9	67					15F90R1	28270			明茶褐色	黒茶褐色	密	○	○	○						良	内外-Fe		
9	68					11G89R1	28743			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○						W	良	内	
9	69					15F V	20231	12.98		明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎						良	外-Fe
9	70					12H4R1	—			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎							良	
9	71					21FR1	30974			淡茶褐色	暗茶褐色	細粒	○	○	○	◎							良	外-Mn
9	72					20F78R1	39199			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○	◎	◎				W		良	内-Mn若干
9	73					15G31R1	26221			明茶褐色	黒茶褐色	砂粒	○	○	○	◎							良	外-Fe-Mn
9	74					16F V	21229	13.019		明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎						良	内-Mn
10	75					20D VI	—	13.64		暗茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎						善	内-Fe
10	76					G/L	—			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○	◎							良	
10	77					21F11R1	36649			明淡茶褐色	黒茶褐色	砂粒	○	○	○	◎							良	外-Mn
10	78					15F98R1	27985			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○						W		良	内-Mn
10	79					21F32R1	35700			明茶褐色	黒褐色	砂粒	○	○	○	◎							善	外-Mn
10	80					21F61R1	32424			明茶褐色	淡茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎						良	外胎面起有
10	81					23K IV	—			明茶褐色	淡茶褐色	細粒	○	○									良	
10	82					23KR2	26111			明茶褐色	淡茶褐色	細粒	○	○							W		良	
10	83					G/L	—			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎							良	外-Mn
10	84					16G23R1	24881			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎					W		良	外-Mn
11	85					12H57R1	26528			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○	◎							良	内-Mn
11	86					21F4R1	37237			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○						W		良	内-Mn
11	87					20F69R1	38869			淡褐色	暗茶褐色	細粒	○	○	○	◎						B	良	
11	88					20F58R1	38823			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○								良	
11	89					21F41r1	37326			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎				W		良	
11	90					21F 博士	—			暗茶褐色	暗茶褐色	細粒	○	○	○	◎	◎						良	
11	91					21F15R1	35655			暗茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎							良	外-Mn
12	92					12H44R1	28681			明茶褐色	淡茶褐色	密	○	○	○								良	内-Mn
12	93					21F53R1	36829			暗茶褐色	暗茶褐色	細粒	○	○	○	◎	◎						良	
12	94					16F V	21332	13.034		淡茶褐色	密	○	○	○									良	内面部分呈层状剥文, 内 Mn少
12	95					16F75R1	26181			明茶褐色	密	○	○	○									良	内-Mn
12	96					15O7R1	26202			淡黄褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎							良	内-Mn
12	97					12H44R1	27371			明茶褐色	暗茶褐色	細粒	○	○	○	◎							良	外-Mn
12	98					12H44R1	27371			淡茶褐色	明茶褐色	細粒	○	○	○	◎							善	内-Mn
12	99					12G91R1	27339			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎						良	外-Mn少
13	100					18D VI	30834	13.69		明茶褐色	砂粒	○	○	○							WB		善	内-Mn
13	101					21F3R1	35711			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	◎	○	○	◎							良	外-Mn
13	102					13H79R1	27236			明茶褐色	淡黄褐色	砂粒	○	○	○								良	外-Mn
13	103					21F43R1	35825			暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎								良	内外-Mn
14	104					16F84R1	26170			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎							良	内面に貼付, 外 Mn
14	105					20F37R1	40986			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○						WB		良	
14	106					12H57R1	26528			暗茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○								良	内外-Mn少
14	107					20FR1	—			淡茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○								良	外-Mn
14	108					15F98R1	28536			暗茶褐色	淡茶褐色	密	○	○	○								良	
14	109					11H28R1	28765			黒褐色	暗茶褐色	細粒	○	○	○								善	内-Mn
14	110					21F33R1	36753			暗茶褐色	明茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎						善	内-Mn
14	111					21F62R1	32425			黒褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎							善	
14	112					12H21R1	28037			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎							善	
14	113					12H4R1	—			黒褐色	黒茶褐色	砂粒	○	○	○	◎							善	
14	114					15G V	24467	12.845		明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎						良	内面に剥文, 115と同一器体
14	115					15G V	24467	12.845		暗茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎						良	内面に剥文, 114と同一器体
15	116					G/L	—			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○								善	外-Mn
15	117					21F32R1	36748			淡茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○								良	外-Mn少
15	118					21F14R1	37259			暗茶褐色	密	○	○	○	◎								良	
15	119					20F41R1	38804			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○								良	
15	120					21F33R1	37307			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○								良	外-Mn
15	121					21F34R1	37314			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○								良	外-Mn
15	121					20F70R1	40972			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎						良	
15	121					20F60R1	38818			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎						良	
15	122					20F75R1	39192			明茶褐色	密	○	○	○									良	外-Mn少
15	123					12H4R1	—			明茶褐色	密	○	○	○									良	内外-Mn少
15	124					21F44R1	36147			明茶褐色	密	○	○	○									良	内-Mn
16	125					20F69R1	38870			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○								良	内-Mn
16	126					21F54R1	36830			明茶褐色	密	○	○	○									良	内-Mn
16	127					23K IV	—			淡黄茶褐色	密	◎	◎										良	
16	128					22H60R2	38666			暗褐色	暗茶褐色	細粒	○	○	○						W		良	外-Fe
16	129					11H40R1	28770			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎						良	外-Mn
16	130					14F V	12706	13.154		明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎						良	外-Fe
16	131					14E V	12391	13.28		淡褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎							良	外-Fe-Mn

表4 出土遺物観察表 (3)

品目番号	種類	種別	型式	器種	部位	出土区	層	発掘番号	深さ (m)	色調		胎土								備考	
										内面	外面	状態	石灰	黄土	角閃	雲母	白粉	茶粉	火山灰		値
16132						11GR1	—			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	◎	◎					良 外-Mn
17133						21F	埴土	—		明茶褐色	暗茶褐色	細粒	○	○	◎	◎					良 外-Fe-Mn少、露母大量
17134						21F	埴土	—		明茶褐色	淡茶褐色	砂粒	○	○	◎	◎					良 外-Fe
17135						GL	—			明茶褐色	暗茶褐色	細粒	○	○	◎	◎					良 外-Mn若干
17136						14E	V	10946	13.25	明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	◎	◎	◎					良 外-Fe
17137						20F26R1	—	40845		明茶褐色	暗茶褐色	泥	◎	○					W		良 口唇に微突起有、内-Mn少
17138						11HR1	—			明茶褐色	暗茶褐色	泥	◎	○							良 外-Fe
18139						19E	VI	40303	13.69	明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	◎	◎					良 外-Fe
18140						21F36R1	—	36764		明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	○	○	W			良 内-Mn
18141						15F	V	20517	13.045	暗茶褐色	淡茶褐色	砂粒	○	○	○	○			W		良 内-Fe
18142						21FR1	—			暗茶褐色	黒褐色	泥	○	○					B		良 内-Fe-Mn
18143						16G	V	17542	13.019	淡茶褐色	淡褐色	砂粒	○	○	○	○					良 内-Fe-Mn
18144						15G	V	24745	12.59	暗茶褐色	淡茶褐色	泥	○	○	○						良 内-Fe
18145						20FR1	—			黒茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○		◎	◎					良 内-スス少
18146						20F39R1	—	38797		黒茶褐色	暗茶褐色	細粒	○	○		◎	○				善 口唇唇間に突起有、内-スス、Fe少
19147						12HR1	—			淡茶褐色	泥	○	○	○							良 内外-Mn極少
19148						15G36R1	—	26608		明茶褐色	暗茶褐色	泥	◎	○					W		良 口唇微凸-微突起部有、内-Mn
19149						12H97R1	—	28736		暗茶褐色	泥	○	○								良 内-スス少、外-Fe
19150						20F57R1	—	38944		明茶褐色	泥	◎	○	○							良 内外-Mn極少
19151						16G51R1	—	26129		淡茶褐色	暗茶褐色	泥	◎	○	○						良 内-スス少、外-Fe
19152						20F59R1	—	38820		暗茶褐色	明茶褐色	泥	○	○	○		○				良 内外-Mn極少
20153						GL	—			明茶褐色	砂粒	○	○	○	○						良 内-Mn
20154						12H76R1	—	28706		黒茶褐色	暗茶褐色	細粒	○	○	○	○					良 内-スス極少
20155						21F56R1	—	36847		黒茶褐色	暗茶褐色	泥	○	○	○	○					良 内-Mn極少、外-Fe極少
20156						20F58R1	—	39159		黒茶褐色	暗茶褐色	泥	○	○	○	○					良 内-Mn極少、外-Fe極少
20156						20F76R1	—	38886		暗茶褐色	砂粒	○	○	◎	◎						良
20156						20F76R1	—	38887		暗茶褐色	明茶褐色	砂粒	○	○	◎	◎					良
20157						14G	V	23680	12.81	暗茶褐色	淡茶褐色	細粒	○	○	◎	◎					良 内-Fe少、外-Fe-Mn
20158						16F91R1	—	26713		明黄茶褐色	細粒	○	○	○	◎			B			善
20159						22N48R2	—	38664		暗茶褐色	暗褐色	泥	○	○	○	○					良 内-Mn
20160						15G	V	5864	12.974	暗茶褐色	明茶褐色	砂粒	○	○	◎	◎					良 内外-Fe少
20161						21F43R1	—	37338		黒褐色	暗褐色	泥	○	○	◎						良 内-スス若干
20162						15G25R1	—	26217		明茶褐色	黒茶褐色	泥	◎	○	○						良 外-Fe-Mn
21163						12HR1	—			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	◎	◎					良 内外-Mn
21164						16G6R1	—	26166		明茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	○					善
21165						12HR1	—			黒褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	○					良
21166						16F	V	21385	13.024	淡茶褐色	細粒	○	○	○		○					良 内-Mn
21167						16G33R1	—	21124		淡茶褐色	細粒	○	○	○	○						良 口唇R17、内-Mn
21168						20F76R1	—	39196		暗褐色	砂粒	○	○	○	◎	◎					良 内外-Mn
21169						20F58R1	—	39159		淡茶褐色	明茶褐色	砂粒	○	○	○	○			W		善 内外-Mn
21170						21F31R1	—	37295		暗茶褐色	細粒	◎	○	○	◎	○					良
21171						20F36R1	—	38797		暗褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	◎					良 内-Mn少、外-Mn
21172						20F52R1	—	38843		明茶褐色	砂粒	○	○	○	◎						良 内-Mn少、外-Mn
21172						20F75R1	—	39192		明茶褐色	砂粒	○	○	○	◎						良 内-Mn少、外-Mn

# 鹿児島県出土中世須恵器の若干の検討 ～特に貯蔵具に着目して～

上床 真

Some consideration about of sue ware in the Middle Ages in Kagoshima Prefecture

Uwatoko Sin

## 要旨

本県出土の中世須恵器の一部について集成・分類を行ったうえで整理・検討し、中世前期に属するもの以外に中世後半のものも存在することを確認した。また、県内の産地を探る必要があることも指摘し、今後の課題とした。

キーワード 中世須恵器、裏・壺、亀山、樺番城（樺万丈）、格子目タタキ、山形状タタキ、窯跡の探索

## 1 はじめに

須恵器は、『日本考古学用語辞典』によれば、「土師器に対比して用いられる。古墳時代やその後奈良・平安時代に存続した容器。土師器が素焼であることと異なり、穴窯により還元焙で焼成され灰色や黒灰色青鼠色などを呈し質も比較的堅緻である」（斎藤2004）とされている。

しかしながら、遺跡を調査すると、中世遺物の中に、須恵器の特徴（還元焙焼成・灰色系の色調・外面に叩きが施される等）を有するものの、異なる特徴（比較的軟質・粗雑な胎土・内面に調整なしあるいは刷毛目のみ等）も併せて有するものが含まれることがある。

これらの特徴を有するものを「中世須恵器」と呼称し分類しているが、ここ数年の資料増加と研究の進展などによって、再検討が必要となってきている。本稿では、本県における「中世須恵器」を一旦整理し、今後の調査研究の際のたつき台とすることを目的とする。

## 2 研究略史

本県におけるこれまでの「中世須恵器」の研究史を全国的な視点も交えながら整理したい。

橋崎彰一氏は、中世遺物について整理し、中世のやきもの全体について、土師器系・須恵器系・甕器系の3種類に分類した。特に、須恵器系については、(1)酸化焙焼成に転じる須恵器系第1類陶器と(2)須恵器の生産技術をそのまま継承した須恵器系第2類陶器（須恵器）があることを明らかにした（橋崎1965）。

宇野隆夫氏は、9世紀から14世紀の須恵器を「後半の須恵器」として、さらに「12世紀の窯業生産地における中世的転換以前に、その変化が生じる原動力の一つとなった都市（畿内）における需要と流通体制の変革があったこと」を示し、古代から中世への変化を述べた。この段階でも、須恵器は古代から中世へと続くものという理解がなされていたことになる（宇野1984）。

吉岡康輔氏はこの点について、『中世須恵器の研究』

表1 中世土器・陶器分類表(樺崎案)

系列	類別	窯跡	器種	焼成	釉
甕器系中世陶器	一類	瀬戸・美濃	茶瓶・香炉・合子・茶入 壺・盤・鉢、片口鉢、埴山ほか	還元焙	有
	二類	東海各地	埴山	還元焙	無
	三類	常滑・濃美・湖西 ・中津川・東山ほか	壺・壺・片口鉢	酸化焙 還元焙	無 (一部有)
	四類	越前・加賀・北越・飯坂赤川 ・伊豆沼・三本木・白石ほか	壺・壺・片口鉢	酸化焙	無
須恵器系中世陶器	一類	備前・丹波・信楽・伊賀ほか	壺・壺・片口鉢	還元焙 →酸化焙	無
	二類	珠洲・飯坂里沙門平・亀山ほか	壺・壺・片口鉢	還元焙	無
土師器系土器	一類（土師器）	各地	埴山、鍋釜	酸化焙	無
	二類（瓦器）	各地（西日本中心）	埴山、鍋釜	低還元焙	無

表2 中世土器・陶器分類表(吉岡案)

系列	類別	窯跡	器種	焼成	胎	
須恵器系	一類	A 東播系(神出・三木・魚住ほか)	甕・壺瓶・片口鉢、埴皿、甍瓦	還元焼	無	
		B 十瓶山系(十瓶山、花園)	甕・壺瓶・片口鉢、埴皿、甍瓦	還元焼	無	
		C 亀山系(亀山、榑、別所ほか)	甕・壺瓶・片口鉢、鍋蓋、甍瓦	還元焼	無	
		D その他の西日本型(膳岡田、鎌山、下り山ほか)	甕・壺瓶・片口鉢、埴皿	還元焼	無	
	二類	備前	甕・壺瓶・片口鉢、埴皿、甍瓦	還元焼 一部酸化焼	無	
	三類	A 珠洲系(珠洲、北越Ⅰ、物形、大坂ほか)	甕・壺瓶・片口鉢	還元焼 (一部酸化焼)	無	
		B その他の東日本型(大戸Ⅰ、飯坂ほか)	甕・壺瓶・片口鉢	還元焼 (一部酸化焼)	無	
	愛器系	一類	瀬戸・美濃系(瀬戸・美濃、初山ほか)	香罎・香伊、合子・茶入、壺・鉢、片口鉢、埴皿ほか	還元焼	有
		二類	A 常滑・猿投系(常滑、猿投、中津川、粟山、丹波、徳楽、越前、加賀、北越Ⅱ、大戸Ⅱ、梁川、伊豆沼、三本木、白石ほか)	甕・壺瓶・片口鉢、甍瓦、鍋蓋ほか	酸化焼	無
			B 濃美系(濃美、湖西、遠東諸家、水沼ほか)	甕・壺瓶・片口鉢、埴皿、甍瓦、 鍋蓋ほか	還元焼	有
C その他の愛器系(岡山ほか)		埴皿主体	還元焼	無		
土器	土師器	各地	埴皿、鍋蓋(一部片口鉢ほか)	酸化焼	無	
	瓦器	各地(西日本中心)	埴皿、鍋蓋、火鉢ほか(一部壺甕)	低還元焼	無	

(吉岡1994)の中で、珠洲焼を中心とした検討を行い、中世の須恵器系陶器について書名にもあるように改めて「中世須恵器」という名称を用いた。

本県においては、持鉢松遺跡の調査など1990年代に至るまで良好な中世遺跡が多くなかったこともあってか、中世の遺構・遺物の調査研究は進んでいる状況ではなかった。

例えば、『大原・宮園遺跡』(下瀬村教委1974)では、東播系須恵器鉢が掲載されている。本県において中世の須恵器が取り扱われた初例である。その後、『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』(県教委1983)で、須恵器の中に「亀山焼の甕」として掲載されている(注1)。『薩摩国分寺跡 環境整備事業報告書』(川内市教委1985)では、中世の須恵器甕が1点報告される。松本建郎氏の指摘として、竜泉窯系青磁との供伴例があることが付記される・他にも破片はあるが実見していないため不明である。

以上のように、1980年代には須恵器の中に中世のものが含まれることは認識され区別されていた。しかし、中世単独時期の遺跡が少なく、同一遺跡から古代の須恵器も出土することがほとんどであったため、あくまでも「須恵器の中に中世のものも含まれる」もしくは「中世陶器のひとつ」という扱いであった。

その後、『新平田遺跡』(大口市教委1997)『山ノ脇遺跡・石坂遺跡・西原遺跡』(2003)などでも、中世に該当する遺物として、須恵器の分類を設けて扱われ、中世の須恵器という認識は明確となっている。

1993年、荻野繁春氏は、西日本の中世貯蔵容器について幅広く調査し、検討している。その中で、薩摩国内の『成岡遺跡』、『薩摩国分寺跡』などでみられる格子目印き文痕をもつ甕と、肥後地域でみられる特徴的なタタキ(山形文痕)を有する甕について「肥後新型」とした(荻野1993)。

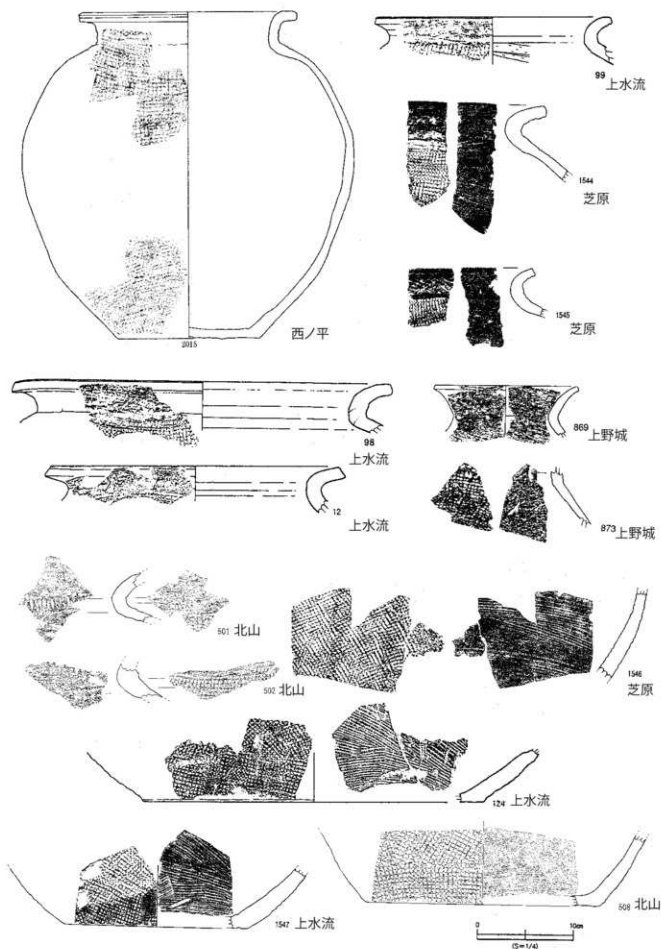
1997年には、『肥後考古』第10号にて「歴史時代各論」小特集が組まれ、美濃口雅朗氏が樺番城窯須恵器(美濃口1997)を、出合宏光氏が下り山産須恵器(出合1997)を論じている。特に、注目すべきは、美濃口氏がそれまで樺万丈とされてきたものについて「樺番城」としたことであり、須恵器の実情も含めて大きな成果となった。

本県において、明確に「中世須恵器」という名称を用いたのは、2004年刊行の『上野城跡』(鹿県埋文2004)が初例である。その後は、『向柵城跡』(鹿県埋文2008)・『上水流遺跡2』(鹿県埋文2008)・『芝原遺跡3』(鹿県埋文2012)などでも中世須恵器という名称が使用されるようになり、現在に至る。

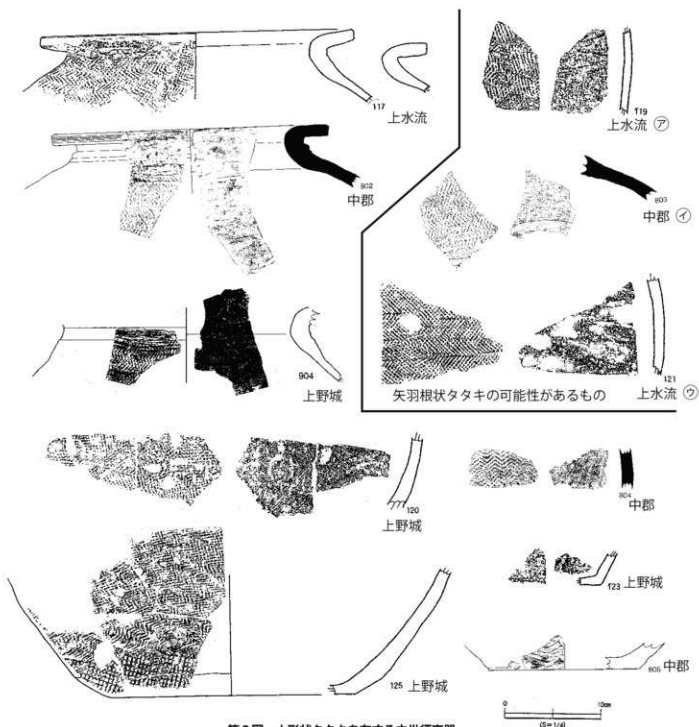
また、中世須恵器の中に、樺番城(この際には樺万丈としていた)産中世須恵器が明確に指摘されたのは、持鉢松遺跡第1次調査報告(金峰町教委1998)が初例である。ただし、美濃口雅朗氏は、肥後地域における樺番

城産須恵器にはない「壺」が薩摩地域で確認されていることから、樺番城産ではない可能性が高いとし、近くに生産地があった可能性を指摘している(美濃口2007)





第1図 格子目タキを有する中世須恵器



第2図 山形状タキを有する中世須恵器  
2023)。

(注2)。

2014年に、梅崎竜司氏(梅崎2014)と出合宏光氏(出合2014)は、穴生古屋敷遺跡第3次調査地点(北九州市)が、「大日窯」であり、九州で3番目に確認された中世須恵器窯であるとした。

2023年には、川口雅之氏・肥後弘章氏が『北山遺跡1』(鹿泉財団2023)の報告書総括中にて、北山遺跡で出土した「榊番城」とされる須恵器と熊本市博物館所蔵の榊番城産須恵器とを比較した結果、別のもの

であるという結論を導いている。

また、下高大輔氏と鬼塚勇斗氏は、この際のことも含めて榊番城産須恵器の再検討を行った(下高・鬼塚

美濃口雅朗氏は、『菊池川河床採集遺物報告書』にて、中世須恵器について新たな見解を指摘し、年代観も与えている(菊池川河床採集遺物研究会2023)。

### 3 県内出土中世須恵器に関する検討

#### (1) 榊番城・亀山類似須恵器(第1図)

2023年頃まで榊番城並びに亀山とされてきたものについて集めたものが第1図である。これらの特徴として、

- ① 頸部外面以下には基本的に格子目タキが、内面はナデもしくはハケメが施される
- ② 口縁部は、ア、頸部で屈曲しそのまま反するものと、イ、頸部と口唇付近で外部へと2度屈曲するもの

の2種類がある

- ③ 口縁部には凹みがあり、ゆるやかな溝状となって巡るものがある

- ④ 器種は基本的には甕が主であるが、壺もみられる(現状では上野城跡のみ)

といったことがあげられる。

以上の特徴の中で、①については、樺番城の特徴でもあるが、亀山でも確認されるもので、西日本で確認される中世須恵器には多くみられる特徴といえるものである。次に、②については、アは樺番城および亀山の両者で、イは亀山において、14世紀頃とされるものにみられる特徴である(岡田1988)。③も亀山において14世紀頃とされる特徴である。④は樺番城ではみられず、亀山では少数存在する。

特に②イと③の特徴を有するものについては、上述したように、本県の報告中で「亀山系」とされたこともあった。荻野繁春氏が指摘するように、「消費地遺跡出土資料の中には、地元産と考えられるものもある」(荻野1985)という意見もあり、工人の移動や技術共有などの可能性もある。美濃口氏によれば、「樺番城窯製品については岡山県倉敷市亀山焼との近似性から、亀山焼からの工人招請などの技術導入が想定されている。」また、その背景については「樺番城窯の創業や亀山焼からの技術導入については小代氏が倉敷市域の地頭であった庄氏と関係があったことによって遠隔地ながらも行うことができた」とした(菊池川研究会(美濃口)2023)。時期については、本県においては明確に示すことができるような事例が存在しないが、荻野氏や美濃口氏が指摘されてきたように、中世前半期の可能性があることを指摘しておきたい。なお、美濃口氏は、樺番城産須恵器については、13世紀中～後半に位置付けており、当該資料も同様の時期のものと考えられる。

## (2)「肥後新型」とされる山形状タキを施す須恵器(第2図)

第2図には、荻野氏が「肥後新型」としたものの(荻野1993)の中で、特徴的なタキである山形状タキを



第25図 肥後型分布図

第3図 肥後型分布図(荻野1993)

施すものを集めた。これらの特徴として、

- ① 頸部外面以下には基本的に山形状タキが、内面はナデもしくはハケメが施される。

- ② 口縁部は、頸部と口唇付近で外部へと2度屈曲する

- ③ 口縁部には凹みがあり、ゆるやかな溝状となって巡るものがある

といったことがあげられる。

概ね、第1図の樺番城・亀山類似須恵器と共通する特徴が目立つが、特に注目されるのは、外面のタキである。本県における類例として、薩摩地方では、上水流遺跡・中部遺跡群・北山遺跡などで確認することができたが、大隅地方では確認できていない。

美濃口氏によれば、「基本的な技法は樺番城窯製品と同じ一連打成形で、本稿で新たに指摘するが、樺番城と同じく外面格子目タキによる二次成形の後、山形状タキを裝飾的に施すものである。このため、外面頸部など部分的に格子のタキ目が残り、山形状タキ目の方向は縦方向に整っている」

熊本県では、高橋南貝塚(熊本県教委1978)や二本木遺跡第27次調査区S D 107(熊本市教委2007)、山田城跡(熊本県教委1989)で出土しており、少なくとも熊本平野から球磨盆地までは確認されていることから、窯跡は不明ながらも肥後国内での生産が推定されている。

また、美濃口氏は、これらの遺跡における出土属性や、頸部が樺番城窯製品よりも強く屈曲する型式的要素などから、概ね13世紀後半～14世紀初頭に位置付ける(樺番城は13世紀中～後半に位置付けている)。

なお、②③に関しては類似するもののためここで取り上げが、矢羽根状タキである可能性が高いモノである。

当該資料については、現状では産地不明であるものの、今後さらに増加する資料であると考えられるため、引き続き注視していきたい。

## (3)格子目タキに特徴を有する須恵器(第4図)

次に、第4図には、これまで樺番城や亀山とされてきたものとも若干異なるものを集めた。これらの特徴として、

- ① 口縁部の屈曲が頸部から直接行われる。頸部から口縁部までが短く、頸部における折り返しの角度が比較的急である。ただし、折り返し部分には、稜(もしくは角)がつくほどではない。

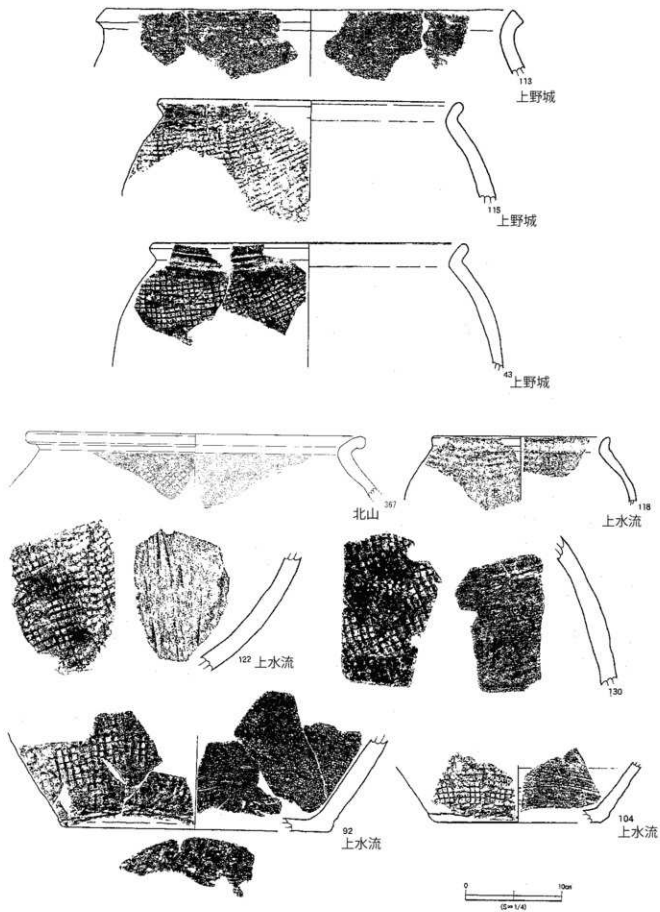
- ② 口縁端部(口唇部)の調整はほとんど行わない。

- ③ 外面の格子目タキの格子の大きさが比較的大きい。

- ④ つくりは比較的丁寧であるが、胎土が堅緻なものはほとんどなく、砂っぽく、軟質である。瓦質土器といっても差し支えないもの

といったことがあげられる。

以上の特徴の中で、①・②については、伊藤晃氏は14世紀前半頃(伊藤1978)とし、亀山焼の報告書では12世紀後半以前とされたもの(岡山県教委1988)に類



第4図 大きめの格子目タキを有する中世須恵器



似する(第5図)。ただし、①～④まで含めた場合には、  
 夙野氏がⅦ～Ⅸ期(Ⅶ期:14世紀後半～15世紀前葉、  
 Ⅷ期:15世紀中葉～後葉、Ⅸ期:16世紀前半)としたもの  
 (夙野1991)、鈴木康之氏がⅣ期としたもの(鈴木  
 2006)が該当する可能性がある(第6図・第7図)。

美濃口氏は、本資料に類似するものについて、「瓦質  
 土器の甕」とし、肥後における事例として「中世の瓦質  
 土器甕・壺は、外面に大きい格子目のタキを粗く施す  
 ものが一般的で、15・16世紀代に位置付けられる。ち  
 なみに、瓦質土器甕・壺は近代まで存続しており、17  
 世紀代前半には無頸・平胴の大形甕が出現する」とした  
 (美濃口2023)。

本県における事例では、年代観を特定できるものは確  
 認されていない。ただし、中世後半期の資料が豊富な上  
 水流遺跡(南さつま市)で多く確認され、中世前半の資料  
 が中心の芝原遺跡(南さつま市)で確認されていない  
 ことから、美濃口氏の指摘を支持し、中世後半期の可能  
 性を指摘しておきたい。

なお、当該資料も窯は不明であるが、肥後国内での生  
 産が推定されており、今後の調査・検討及び資料増加も  
 見込まれる資料であるため、引き続き注視していきたく  
 い。

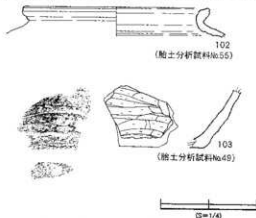
#### (4)その他(第8図・第9図)

ここでは、特に筆者が関わった遺跡について、中世須  
 恵器としてきたもので実は誤りであったものも紹介した  
 い。

上水流遺跡出土の102と103は、報告の時点では、国  
 産のものと考えて掲載したものである。再検討の結果、  
 国産のものではなく、中国華南周辺で生産された輸入陶  
 器であることが確認された。タキやあて貝などの痕跡  
 が確認できず、堅緻な胎土のものであるのが特徴である。

以上の2点は、報告書作成時点では、須恵器としては  
 違和感があったものの、消去法で須恵器としていたもの  
 である。

永吉天神段遺跡(大崎町)では、瓦質土器の壺が確認



第8図 中世須恵器ではなく輸入陶器であったもの

されている。県内においても類例のないものである。今  
 回は薩摩地方における資料が中心となったが、今後は上  
 記資料などと併せて大隅地方における中世の須恵器・瓦  
 質土器なども検討していく必要がある。

また、本資料以外にも、これまでの分類の誤りやその  
 後の研究の進展などによって、当時は正当な評価を与え  
 られずに眠ってしまっていた資料があるかもしれない。  
 引き続き今後も再検討を続けていきたい。

#### 4 分布について

本県における出土遺跡については、表3にまとめた。  
 また、第10図では、県内の出土遺跡について地図上に  
 示した。

本図からは、中世前半期の中世須恵器が薩摩地域に偏  
 在することが理解される。確認されている範囲での南端  
 は万之瀬川流域であり、鹿児島湾奥と志布志湾沿岸でも  
 わずかに確認されている。

ただし、山形状タキについては、鹿児島湾奥では現  
 状では1遺跡のみでの確認であり、やはり西海岸地域で  
 の分布が顕著であることが確認される。

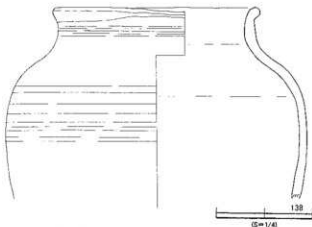
これはあくまでも現状における理解であり、遺漏や今  
 後の調査・研究による見直しが進む可能性があるが、大  
 方の傾向はつかむことができたのではないかと考える。

#### 5 おわりに

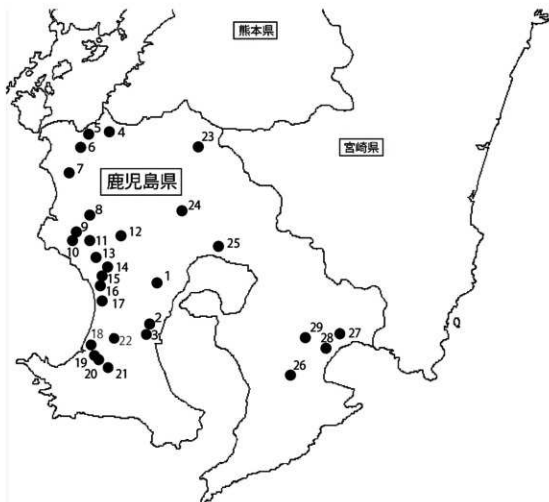
本稿は、令和5(2023)年7月8日に熊本市博物館  
 で行われた「樺番城窯出土品の検討会」に出席して得ら  
 れた知見を一部含んでいる。

結論として、①これまで本県で樺番城とされてきたも  
 のは全て違う可能性が高い ②中世前半のみと考えてい  
 た中世須恵器の中には、15・16世紀頃と考えられるも  
 のが含まれている ③産地については今後も検討が必要

であり、少なくとも九州内で確認されている窯跡(樺番  
 城・下り山・大日)やその他の類似する窯跡(亀山など)  
 との比較検討や理科学的分析などを進める必要があ



第9図 永吉天神段出土の15世紀頃とみられる瓦質土器壺



第10図 鹿児島県内出土の中世須恵器分布図

る。特に、山形状の叩きがみられる資料については要検討である。また、本県における生産が行われた可能性の検討や探索も引き続き進めていきたい。

【註】

(註1) 編者の一人である池畑耕一氏によれば、報告書刊行後に、岡山の知人に現物を確認してもらったところ、「亀山焼に類似してはいるが、亀山焼そのものではない」との指摘を受けたという。ただし、類似していることに違いはなく、西日本で出土する中世須恵器の窯跡について、技術の共有や工人の往来などがあった可能性も指摘されている。

(註2) 熊本県内での出土状況から、榊番城須恵器は、広範囲に流通するものではないとされる。実際、熊本市内でも確認例はわずかであるという。そんな中で、鹿児島県内（特に薩摩地方）で多く流通していたとは考えにくく、これらの事例は特殊な事例であるのか、もしくは別物である可能性が指摘された。

また、本県では、それまで榊万丈（かばのばんじょう）

う）としていたが、美濃口氏の論考以降、氏の説を支持し、本来の地名（小字名）から榊番城（かばばんじょう）とし、表記も改めている。

亀山焼については、伊藤氏によるもの、岡山県教育委員会（岡田氏）によるもの、鈴木康之氏によるもの、永田千織・藤野次史の両氏によるものなどがある。これらの研究では、中世前半期（14世紀後半頃）までは編年・様相などがほぼ明らかになっているが、中世後半については伊藤氏が触れた以外は資料の少なさもあって編年・様相は不明な部分が多い。また、中世後半になると、「亀山焼系」とされて異なる生産地のもので、互質になるという指摘もみられる。

【引用・参考文献】

- 伊藤賢1978「窯業」近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川弘文館
- 宇野隆夫1984「後半期の須恵器」『史林』67-6
- 梅崎恵司2014「麻生氏と中世須恵器“大日窯”」『研究紀要』第28号 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
- 岡山県教育委員会1988『亀山遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(69)

萩野繁春1985「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌』第3号 福井考古学会

第3表 鹿児島県内出土の中世須恵器一覧

No.	遺跡名	所在地	①	②	③	備考
1	善卒城跡	鹿児島市皇徳寺台一丁目			○	
2	北麓遺跡	鹿児島市谷山中央1丁目	○	○		
3	不動寺遺跡	鹿児島市上福元町	○	○		
4	老神・市家遺跡	出水市武本字老神・市家		○		
5	放光寺跡	出水市高尾野町下高尾野字放光寺	○			
6	中部遺跡群	出水市野田町下名	○	○		
7	北山遺跡	阿久根市山下字北山	○	○		樽巻城とは異なることを指摘
8	薩摩国分寺跡	薩摩川内市国分寺町字大都・下台	○			
9	西ノ平遺跡	薩摩川内市中福良町西ノ平	○			報告書では亀山とされた
10	山口遺跡	薩摩川内市都町字山口	○			
11	上野城跡	薩摩川内市百次町字上野	○	○		報告書では樽万丈とされた。巻あり
12	五社遺跡	薩摩川内市東郷町五社字久留須	○			
13	府城跡	いちき串木野市川上字門前・椿島・大堂庵	○			報告書では樽万丈とされた
14	安茶ヶ原遺跡	いちき串木野市川上字安茶ヶ原	○	○		
15	市ノ原遺跡3	日置市東市来町湯田	○	○		
16	向栢城跡	日置市東市来町伊作田字上栢・中栢・下栢	○			報告書では樽万丈とされた
17	伊作城跡	日置市吹上町中原	○	○		
18	白糸原遺跡	南さつま市金峰町富崎字白糸原		○		
19	持鉢松遺跡	南さつま市金峰町富崎字持鉢松	○			報告書(一次報告)では樽万丈とされた
20	芝原遺跡	南さつま市金峰町富崎字芝原	○			
21	上水流遺跡	南さつま市金峰町花瀬字上水流・森山	○	○	○	報告書では樽万丈とされた
22	小瀬遺跡	南さつま市金峰町	○	○		
23	新平田遺跡	伊佐市平出字新平田	○			
24	水天向遺跡	薩摩郡さつま町柏原字水天向	○			
25	市頭C遺跡	始良市加治木町木田字市頭	○	○		
26	益徳遺跡	鹿児島市東町福山田字益徳	○			3号竪穴遺構からの出土
27	安良遺跡	志布志市志布志町安楽字勢園	?			報告書では東播系とされた
28	後迫遺跡	曾於郡大崎町横瀬字後迫	?			報告書では樽万丈とされた
29	永吉天神段遺跡	曾於郡大崎町永吉天神				瓦質土器の巻

狭野繁春1992「壺・甕ほどのように利用されてきたか」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集 中・近世における東国と西国 国立歴史民俗博物館

『中世窯業の諸相 生産技術の展開と編年 発表資料集・資料集』同シンポジウム実行委員会

鹿児島県教育委員会1983『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』鹿児島県教育委員会発掘調査報告書(28)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2004『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター(68)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2005『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター(86)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2007『持鉢松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2008『上水流遺跡2』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(121)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2008『向栢城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(129)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2009『上水流遺跡3』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(136)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2010『向栢城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(155)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2012『芝原遺跡3』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(170)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(170)

川口雅之・肥後弘幸2023「中世須恵器の産地調査について」『北山遺跡1』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(51)

菊池川河床採集遺物研究会(美濃口 雅剛)2023『菊池川河床採集遺物調査報告書—中世の国産陶器・土器類 中世の石造物 銭貨—』

熊本県教育委員会1978『高橋南貝塚』熊本県文化財調査報告第28集

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2014『中部遺跡群』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(1)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2019『永吉天神段4 第3地点』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(22)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2020『安良遺跡』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(34)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2023『北山遺跡1』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(51)

金峰町教育委員会1998『持鉢松遺跡』金峰町教育委員会発掘調査報告書(10)



- 斎藤忠2004『改定新版 日本考古学用語辞典』学生社
- 川内市教育委員会1985『国指定史跡 薩摩国分寺跡 環境整備事業報告書』
- 柴田亮・上床真・横手伸太郎2022「九州」『新版 中世 荻野繁春1993「中世西日本における国産貯蔵容器の分布」『福井考古学会誌』第11号 福井考古学会
- 荻野繁春2005「須恵器系陶器の編年と生産技術の展開」の土器・陶磁器』真陽社
- 下高大輔・鬼塚勇斗2023「〈資料紹介〉熊本博物館収蔵品 榊番城窯跡出土品について—資料の現状把握と今後の展望—」『熊本博物館館報』No.35(2022年度報告)
- 鈴木康之2006「土器・陶磁器の組成変化」『中世集落における消費活動の研究』（初出は、鈴木康之1996「土器・陶磁器の出土傾向」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告 V』広島県教育委員会)
- 出合宏光1997「下り山研究ノート - 下り山1号窯跡出土品の製作工程を復元する -」『肥後考古』10 肥後考古学会
- 出合宏光2014「九州の中世須恵器窯」『肥後考古』19 肥後考古学会
- 出合宏光2007「下り山窯（熊本県）」『中世窯業の諸相 生産技術の展開と編年 補遺編』同シンポジウム実行委員会
- 出合宏光2014「九州の中世須恵器窯 北九州市発見の中世須恵器窯関連資料を中心に」『肥後考古』19 肥後考古学会
- 出合宏光2024「熊本県における15～16世紀の土器」『琉球大学考古学研究室開設30周年記念論文集』琉球大学考古学研究室
- 中村和美2007「南九州の土器・陶磁器」『中世窯業の諸相』補遺編
- 永田千織・藤野次史2012「安芸地方における中世須恵器の研究—西条盆地の出土資料を中心として—」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』3号
- 榎崎彰一1965「古代末期の窯業生産」『日本史研究』79 日本史研究会
- 日本中世土器研究会 編2022『新版 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 美濃口雅朗1997「榊番城窯跡の中世須恵器（1）」『肥後考古』10 肥後考古学会
- 美濃口雅朗2007「榊番城窯（熊本県）」『中世窯業の諸相 生産技術の展開と編年 補遺編』同シンポジウム実行委員会
- 美濃口雅朗2010「榊番城窯（須恵器系）・下り山窯（須恵器系）」『古陶の譜 中世のやきもの - 六古窯とその周辺 -』

# イスノキの特長と出土資料および民俗資料例

東 和幸

Characteristics of *Distylium racemoum* and excavated materials and folklor materials

Higashi Kazuyuki

## 要旨

鹿児島県出水市六反ヶ丸遺跡で出土した弥生時代中期前半の弓がイスノキ製であったことから、イスノキの使用例を考古資料や民俗資料例などから抽出した。縄文時代以降、イスノキの特長を活かし、立ち木の状態から、加工して様々な道具をつくり、最後は燃料とし、燃えた後の灰まで余すことなく利用していることが判った。イスノキ製弓が実用なのか儀器的なのか明らかに出来なかったが、古代には畿内を中心に全国でイスノキ製横櫛が出土しており、その重要性が問われる。また、イスノキが南島の特産品として知られる「赤木」の一部を占めているのではないかと推察した。

キーワード イスノキ 植物学的特長 出土資料 民俗資料 弓 古代の横櫛 赤木

## 1 はじめに

令和4（2022）年度に発掘調査された鹿児島県出水市六反ヶ丸遺跡では、標高約2.5mの地点で加工痕のある9mを超すイチガシの大木をはじめとして、自然木と共に木製品が出土した。その中には、弥生時代中期前半の黒髪式土器に伴うイスノキ製の弓や装飾付木製品などが出土しており、『六反ヶ丸遺跡4』に報告されている（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2024）。

本稿は、紙数の関係で報告書に反映することができなかった民俗事例に加え、出土資料にみられるイスノキの使用例について紹介することとする。

## 2 イスノキの植物学的特長

### (1) イスノキの性質と特長

イスノキはマンサク科イスノキ属 (*Hamamelidaceae Distylium* Sieb. et Zucc.) の常緑高木で、通常樹高10~15m、胸高直径40~50mである（牧野1982, 林1969 第1図）。林業試験場監修の『木材工業ハンドブック』（1982年 丸善）によるイスノキの性質は、「光沢あり、肌目精、比重0.89、加工難」とある。

堅いことは、①頑丈、②傷が付きにくい、③変形しにくい、④虫に食われにくい、⑤叩くと良い音がする、⑥朽ちににくい、⑦色艶が良い、などの利点があるが、②加工しにくい、④弾力性が少ない、⑥使えるまで時間を要する、などの欠点にもつながっている。また、化学的組成を含めイスノキの性質などが調べられている（平井1996）。これらの性質は生活で使用する際にも大きく関わっており、それを熟知した上で利用されたと考えられる。



562. イスノキ (*Distylium*) ※原図はカラー  
第1図 イスノキ図（牧野1982）

### (2) イスノキの分布域

国内におけるイスノキの分布範囲は本州西南部から琉球の山地であり、暖地に産する樹木であることが分かる（林1969 第2図）。

鹿児島県内でも各地で、子どもの頃からイスノキに親しんでいる話を聞くことができる。湯本貴和氏は「屋久島の照葉樹林は下部平坦地ではタブノキ、斜面ではイスノキが、また上部ではスダジイが優先した林である」と紹介し、家屋や諸道具類をつくるのに、近くの林から必要な樹種を選択したことを指摘している（湯本2012）。

### (3) 身近なイスノキ

イスノキは鹿児島では「ユキノツ（柞木）」と呼ばれており、地名（南九州市川辺町田部田柞木、鹿児島市由須木町）や姓にもみられる。旧高山町の町木でもあり、日置市伊集院町の町名由来も同地に多く生えていたイス

ノキであると言われている。伊集院の「院」は中世における領域のことであるので、「いじゅう」が「イス」から変化したものと考えられる。鹿児島ではイスノキは身近な植物であり、下記のような大木が知られている。

#### 鹿児島県内における大木

- (1) 出水市立下水流小学校にはイスノキの大木があり、植物学会で注目されていたようである（『南日本新聞』昭和29年4月9日）。同校に電話で問い合わせたが、イスノキの大木を確認することは出来なかった。
- (2) 曾於市大隅町恒吉の「長江のイスノキ」2本は、平成16年に市指定文化財（天然記念物）となっている。胸高幹周りは4.4mと3.2mである。曾於市では他に、財部町北俣上大峯、末吉町諏訪方椿、末吉町南之郷上高岡、大隅町恒吉龍長田神社などで、イスノキの大木が把握されている（曾於市教育委員会2019）。
- (3) 伊集院町恋之原の稲荷神社に、市指定保存樹としてのイスノキがある。
- (4) 薩摩川内市入来町浦之名山王諏訪神社境内の例は市指定重要文化財「天然記念物イスノキ」であり、定樹齢600年とある。元々は山王神社があり、17世紀中葉に諏訪神社が合祀されている。約10mの間隔を置いて2本が樹立している。
- (5) 大隅半島の稲尾岳や薩摩半島の金峰山にはイスノキの群落があることを、文化庁非常勤調査員の寺田仁志氏に教示いただいた。
- (6) 環境省は幹周囲300cm以上を巨木としており、鹿児島には24本のイスノキ巨木が把握されていたが、大隅半島高野園有林で新たに14本が報告されている（鈴木・中国2010）。

### (4) イスノキの加工実験

六反ヶ丸遺跡出土の木製品を、鹿児島県工業技術センターのご厚意により、精密計測した上で3Dプリントしたものを参考に再現したのが写真1である。左から、樹脂による3Dコピー、出土時の復元色、製作時の復元色、右がイスノキによる再現品である。

再現に利用したのは、令和5年8月に阿久根市で伐採した直径5cmほどのイスノキであり、弓の復元に使用しない30cm程を切って木製品の再現用とした。まだ生木の状態であり、芯材もない細い木であったので、ノコギリでの切断は比較的容易であったが、縦割りにして厚さ1cm程に割くと、瞬く間に約15°の捻れが生じた。

なお、弓の再現については、示現流で使用する木刀と同様に、3～4年寝かせておかなければ使えないと言うことで、復元製作は中断している。

### 3 イスノキの出土事例

管見に触れたイスノキの出土事例は700点近くにおよび、表1～3に示した。実態としては、さらに増えていると考えられる。また、鹿児島市郡山町榎ヶ丸遺跡などのように古墳時代の層を花粉分析した結果、イスノキ属もみられることから、当時もイスノキが茂っていた環境であったことがわかる（鹿児島市教育委員会2021）。今回は土壌分析結果までは把握していないが、遺跡周辺に自生もしくは意識してイスノキを植樹していたかどうかの判断基準ともなり重要である。

#### (1) イスノキ製品の出土例

伊東隆夫氏と山田昌久氏は、2012年に全国で出土した木製品の樹種について網羅しており（伊藤・山田2012）、各植物を各時代の人々はどうのように利用していたかを考える上で、基礎となる資料である。現時点で



第2図 イスノキ分布図（林1969）



写真1 イスノキ製木製品の3Dコピー

の、イスノキの出土件数は691件であり、山形県、栃木県、和歌山県、愛媛県の4県を除く、全国の都道府県から出土している。

現状で把握できた資料を示したが、横櫛については奈良県で75点を提示したが、平城宮跡だけでも250点余りが出土していることから(和田2023)、日々新たな資料が発見されていることになる。ただし、全体的なイスノキ製品の出土傾向は変わらないと考えられ、本稿での分析等には大きな影響を与えることはないと推察される。

これまでの出土事例で明らかなのは、現在のところ縄文時代のイスノキ製品出土例は沖縄県以外にないことと、櫛以外ではイスノキの植生分布域と重なるような出土の仕方である。このことは、イスノキの利用は南の沖縄から広まったことが明らかであるとともに、イスノキ製の横櫛は人が意識的に全国に流通させたことが窺える。(註1)

九州の古代以前の木製品についてまとめた山口謙治氏による、イスノキ製品は下記のようなものがある。曲柄鎌身、紡錘車の紡輪と軸、漁具として鮑オコシヤスおよび鉤、武具の木鍔と槍杖製品、それに横櫛、容器、縦柄杓子、陶物の形代である(山口2012)。

弥生時代から古墳時代の木製鎌について、川口雅之氏は以下のように指摘している。「一般的な鎌身の樹種には、アカガシ亜属が選択されているが、曲柄平鎌Ⅱb類はイスノキの板目材を使用しており、両者の樹種、製材方法は異なる。」と言う(川口2008)。曲柄平鎌Ⅱ類は短い軸部と2か所の穿孔を有することを特徴とし、こ

#### イスノキの用途

##### 1 生活用具

###### (1) 衣類

ア 樹皮の内側に菌糸がはびこった暖皮状のもので、琴の袋をつくった例が知られる(内藤1964)。布をつくるのに、どれぐらいの量を集めたのか、あるいは叩く道具が必要だったのかなど、伝承者がいければ聞きたいところである。

イ 櫛としてはツゲ(黄楊)が知られるが、イスノキ製も折れにくく高級だったようで、「クシノキ」ともいう。古代においては、黄楊よりもイスノキが使われており、後述する。喜多つげ製作所社長によると、黄楊やイスノキ製の櫛は「四季に強い」とのことである。すなわち、高温にも低温にも、湿潤にも乾燥にも丈夫であるとのことである。

ウ 肝属部ではイスノキの灰を紺染にしていた。

エ 林弥栄氏は綿打櫛を挙げている(林1969)。

オ 出土例では紡錘車がある。

###### (2) 食生活用具

ア 鹿児島では、木灰で郷土菓子のアクマキをつくる時にユス灰が利用される。木綿袋で濾過したアク汁に米を一晩浸け、竹皮に包んで蒸すことで食える。現在は黄粉や黒砂糖にまぶして食べるが、以前は保存が効くことから携帯用の食料としたとも言われている。イスノキの灰だけを集めるため、決められた産などに他種の薪をくべないよう厳しく諷められたものである。

イ 餅を搗く白や杵をつくった例が伊集院町、高山町、大根古町で報告されている(内藤1964)。

ウ 飯島の里村では、「イスノキからアクをとって茶碗の上塗薬とする」と報告されている(内藤1962)、どのような効果があったのか追究する必要がある。

エ 林弥栄氏は樽や桶を挙げている、特に砂糖樽を指摘している(林1969)。

###### (3) 住居用具

のタイプ自体が南九州特有のものであるらしい。今後、調査事例が増えることによって、南島に源流が求められれば一層興味深い。台湾や中国大陸にも目を配る必要がある。

本稿を書く契機となった六反ケ丸遺跡出土のイスノキ製弓については、横櫛とともに後述することとする。

#### 4 鹿児島県におけるイスノキの利用事例

本県を中心とするイスノキの利用例を下記にまとめた。県内でのイスノキの利用例について網羅したのは内藤尚氏であり、昭和39(1964)年に刊行された『鹿児島県民俗植物記(遺稿)』から多くを引用した。また、元大工棟梁で90歳を超える南九州市川辺町在住の田中勝芳氏、薩摩弓師の桑幡道長氏、文化庁非常勤調査員の寺田仁志氏からは、特に多くのご教示を得た。

前述したような性質を応用して、幹、枝、葉、実などがそれぞれの季節で使われ、捨てるところがないほどイスノキは生活に密接な関わりをもっている。なお、「ユシノキ」、「ヒョンノキ」とも呼ばれ、漢字で表すと、「蚊母樹」・「蚊子木」・「狐樹」などがあり、生活に絡めた意味の漢字が使われていると考えられる。以下、生活における場面ごとに紹介する。

なお、記載順は福島県只見町の民俗資料分類例による(只見町史編さん委員会1992)。用途としてイスノキが使われにくかったことを示すために、利用例のない項目も残しておくこととする。

- ア 立ち木としては、生垣などに利用され、觀賞用、境界用、目隠し、木陰用、防火、空気循環、土砂流出防止などの用途がある。特に丈夫なことから、台風対策用としても防風林として植栽されている。
- イ 床柱として、色や艶が好まれた。子孫に残す財産の一つでもある。大工棟梁であった田中勝芳氏によると、伐採して20～30年は山中に放置して「シロタ（辺材）」を腐らせてから使ったとのことである。
- ウ 歪みが少なく、傷が付きにくいので、床材や敷居として使用されている。
- エ 家具として、加工しにくく重いものの、舟箒箒など衝撃に堪えられる必要があるものに利用されている。
- オ 陶製の戸車の軸にイスノキが使われていた（田中勝芳氏談）。
- カ 屋久島の民家の構造材には、シロアリがつきにくいイスノキも使われており、「こみ栓」と呼ばれる木片を部材の結合部に打ち込んで固定している（湯本2012）。この話については、田中勝芳氏にも確認していただいた。
- キ 熊島では新築の時、火事が起こらないようにイスの葉にシトギ（葉：神前に供える糯米やダゴ）を載せて来会者に振る舞ったとのことである（内藤1962）。
- ク 「たっぼん（薪）」としてカマドや風呂の燃料や明かりなどに利用される。高熱で火持ちがよいとのことである。桑橋道長氏の父元象氏は、「イスノキを薪に使う家は、分限者どん（ぶげんしゃ：富豪）」と言う話をしていたという。煙があまり出なかったようである。

## 2 生産用具

### (1) 農耕用具

- ア 鎌や鋸の柄として使われている。出土品にもある。
- イ 股鍬用のメグイボ（唐竿）にイスノキの若木が使われている（水流1991）。

### (2) 山樵用具

- ア シバ（薪）などを両端に突き刺し、イノ（担いで）運搬するオコ（担い棒）用として紹介されている（森田1991）。

### (3) 漁労用具

- ア 出土品にヤスやアワビオコシがある。
- イ 舟材の一部に使われている。

### (4) 狩猟用具

- ア 樹皮からトリモチを作ったことが知られている（林1969）。
- イ 出土品の弓が狩猟具から武器として用いられるようになったのは明らかである。イスノキ製の弓が実用的だったどうかは、今後の研究に委ねたい。また、木鏝も同様である。

### (5) 畜産用具

### (6) 蓋蓋用具

### (7) 染色用具

- ア 虫こぶを染料とすることによって、布を黒みがかった薄茶色や垂麻色に染められるとのこと。

### (8) 手工用具

- ア 九州陶磁文化館の徳永貞紹氏によると、「いすばい」を肥前系磁器の軸葉にしているとのことである（徳永氏談）。
- イ 小枝に産み付けて育ったヒモワタカイガラムシ雌成虫を乾燥させ、砕いた粉を集めて布に包み、竹細工の艶出しに使う。「いばた」と呼んでいたと記憶するが、鹿児島市竹振興センターに問い合わせると、販売元も製造中止になっており、現在は在庫分を使っているとのことである。

### (8) 諸職用具

- ア ドンジ（掛け矢）の本体に使われている（田中勝芳氏）。

## 3 交通・交易用具

### (1) 運搬用具

### (2) 旅行用具

### (3) 通信用具

### (4) 商業用具

### (5) 計算・計量用具

- ア 常に弾かれるソロバン珠として、芯に近い黒っぽい部分が使用されている。また、ソロバン枠に使用されており、「大隅算盤」として知られている。肝付町前田には大隅算盤製作所があり、材料のイスノキを求めて島根

県から来られたとのことである（近藤氏談）。

- (6) 看板・広告用具
- (7) 手形・貨幣用具

#### 4 社会生活用具

##### (1) 共有道具

ア 虫こぶ（虫癭）を硯の水入れにした例もある（内藤1964）。加世田では虫癭のことを、「タッポ」や「サッポ」と呼んでいた（内藤1964）。

- (2) 防災・避難用具
- (3) 家印・印判
- (4) 武家具具

ア 示現流・自顕流で使用される樹皮を残したままの木刀・長木刀（ながぼくと）に利用されている。伐採してから2～3年以上のものでなければ、使えないとのことである。ただし、イスノキが手に入りくいため練習用としては、他の樹種を利用するとのことである。

また、立木や横木の方も他の樹種よりイスノキの方が反発力が少なく好まれる。イスノキの木刀でたたくけれども、折れることはないとのことである。硬い者同士であるが、細くて長い点に力を受け流す効果があると推定される。

イ 薩摩弓の閥板に使われている。弾かれた弦は、閥板を強く打ち付けるため、傷つきにくい素材が好まれる。また、弓道場に響く弦音の中の音は、素材による音の違いの中位の位置が観衆を魅了する。薩摩弓師の榮幡道長氏のところには先々代からのイスノキ材が保管されている。なお、イスノキの製材については、鋸歯の消耗が激しく好まれないとのことである。

##### (5) 戦時用具

#### 5 信仰・年中行事用具

- (1) 神体・偶像類
- (2) 神事・仏事用具
- (3) 奉納・祈願・縁起物類
- (4) 年中行事用具
- (5) 信仰関連用具

#### 6 芸能・娯楽用具

- (1) 芸能用具・衣裳類
  - ア 太鼓踊りの撥
  - イ 棒踊りの棒
- (2) 仮面
- (3) 人形
- (4) 楽器

ア 薩摩琵琶の撥として、叩くように弾いても頑丈である。

イ 沖繩や奄美では三線の棒として利用されている。

##### (5) 遊戯具

ア 子どもの頃、葉っぱを丸めてプープー笛にしていた。

イ 虫が出ていった後の虫こぶを笛にする。その音色から「ひよんのき」とも呼ばれる。また、種子島ではその音がアオバズクの鳴き声に似ることから、ケシコノミ（ケシコはアオバズクの意）と呼んだ（寺田氏談）。志布志や霧島では「トッコの木」と呼んでいたとのことである（阿多利昭氏、東悦子氏教示）。

ウ 鹿児島で焼酎を飲みながら遊ぶ「ナンコンたま（珠）」に使われる。

エ 薩摩藩の伝統的な遊びである破魔投げの棒は、「裏コケ」が最良とのことである（内藤1964）。『広辞苑』「うらごけ【抹殺・梢殺】」には、「樹幹の太さが梢（こずえ）の方に行くに従って急に細くなることとある。



写真2 保管されたイスノキ材

#### 7 人の一生用具

- (1) 育児用具
- (2) 成長の祝い用具

## 5 若干の考察

以上、イスノキの植物学的特長とともに、出土資料および民俗資料の利用例をみてきた。各時代の人々がイスノキの特性を活かしながら、生活の中で利用してきたことが窺えた。しかも、立木の状態から、加工して様々な道具に利用し、最後は薪として使い、その灰までも利用し尽くしている。今後とも時代に合った使い方が出てきて、鹿児島島のイスノキや山林が見直されることを期待したい。

では、「弓」、「横櫛」、「赤木」の3つの項目について詳しくみていきたい。

### (1) イスノキ製弓

#### ア 六反ヶ丸遺跡（鹿児島県出水市）

第3図1～5の5点が出土している。完全な形のものはないが、1m近い例や先端の弦をつがえる部分が残っており、全形を推定復元することは可能である。1～3は楕が入る丸木弓であり、4は平弓である。5の弓は片側を加工していることから、輪っかにした弦を掛けていたことが分かり、2と4は弦を縛っていたことが窺える。

5点ともAMS法で年代測定されており、541CalBC～204CalBCに取まる。共存した土器は熊本市に標式遺跡のある黒髪式土器であり、弥生時代中期前半に位置づけられる。

#### イ 下部遺跡群（大分県大分市）

報告書では棒状製品とあるが、弓の可能性もあるとのことである（註2）。下城式土器に伴うもので弥生時代前期末に該当する（大分市教育委員会1992）。機会があれば実見したい。

#### ウ 八日市地方遺跡（石川県小松市）

八日市地方（ようかいちじかた）遺跡のイスノキ製品については、刺突具として報告されている（註3）。平面図には表現されていないが、断面図をみるとわずかに平坦な凹みのようにも見える。幅が30mm弱であること、弥生時代中期前半に位置づけられることなど、六反ヶ丸遺跡出土弓3との共通性がある。弓を転用したことも考えられるので、機会があれば実見して確認したい。

### エ 小結

六反ヶ丸遺跡でイスノキ製弓の形状が明らかになったことで、これまで棒状や刺突具などとして報告されてきた破片の一部についても、再確認することによって弓の類例が増えることを期待したい。六反ヶ丸遺跡以外の出土遺物を実見していないので、断定することは出来ないものの、共通点は窺える。

最大径3cm前後に加工されており、弥生時代前期末～中期前半に位置づけられることが共通する。楕は両端の少なくとも12～27cmほどには入らないことから、下部遺跡群例については、楕が施されていないのは明らかである。また、弓が実用的だったのか、それとも儀器だったのかも、イスノキで復元して実

験していないので、課題として残っている。

六反ヶ丸遺跡出土弓について指導して下さった岡安彦氏によると、「定型化した原初的和弓が日本列島に登場し、次第に普及し始める直前の段階において、九州南部でこうした弓が特異かつ特徴的な素材を用いて製作されたことは興味深い。保存状態の良好さとともに、日本列島における弓の発達を考察する上で、極めて貴重な資料であることは言うを待たない。」と評価している（岡安2023）。

弥生時代中期は北部九州に起源のある弥生文化が全国に定着する時期であり、各地方でクニがつくられるようになる。領域を明確にするには争いが起き武器を必要とし、人々を掌握するには祭りに使う儀器も必要であったと考えられる。重くて「引けない（強い）弓」に驚きを求めた可能性もある。

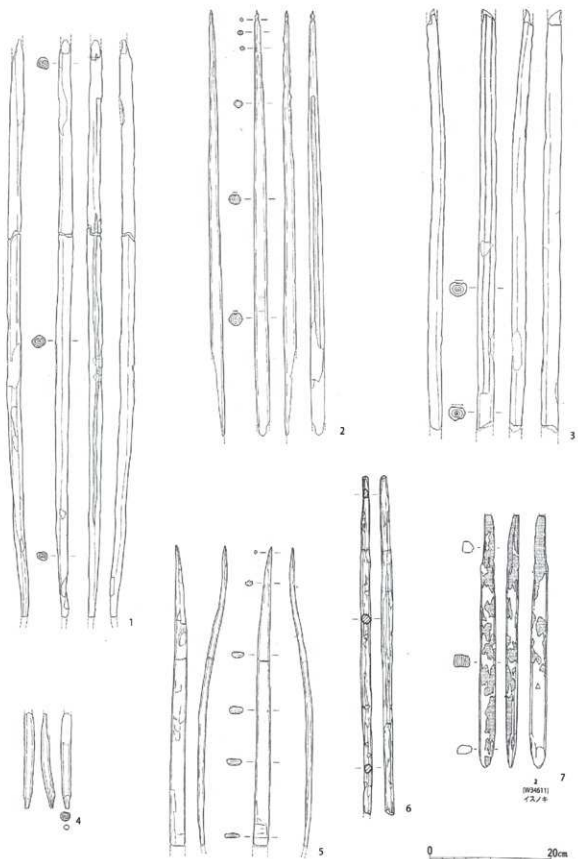
### (2) 古代の櫛

イスノキが古代における国家中枢部で使われていることは、南島や南九州にとっても重要なことである。和田一之輔氏は「平安時代に編纂された『延喜式（えんぎしき）』によれば、納職人2名が年間366枚の櫛を内蔵寮（くらりょう）に納めたようである。おもな内蔵は天皇に200枚、皇后に100枚、皇太子に60枚あり、そのすべてが「由志木（ゆのき）」つまりイスノキという樹木を素材とすることが定められています。」「イスノキもツゲも南九州でよく生育する樹木で、緻密で堅く適度な弾力性もあるので、櫛の製作に適しているのです。」「平城宮跡からは250枚余りの横櫛が出土しており、実にその9割がイスノキ製です。文献資料と出土資料の実態とが見事に合致します。」と述べており（和田2023）、イスノキ材が植生分布の濃い南九州から調達されたことを想定している。

古代の史・資料が少なく遠く離れた南九州地域にとって、平城京および平安京との関わりは重要なことであり、「華人」と呼ばれていた人々（682～793年）の一面を明らかにする契機にもなり得る。ましてや、天皇家にイスノキ製横櫛を納めていたことや、全国で使用されていることを考えると、追究すべき課題は多い。

### (3) 「赤木」とイスノキ

古代の都城（藤原京・平城京）における原材料の調達から消費を解明するためにイスノキ製の横櫛に注目した木沢直子氏は、正倉院文書や『延喜式』に記された「由志木」がイスノキであると指摘した（木沢2015）。沖繩には、イスノキを表す言葉として、ユシ（永良部/沖繩/伊是名/西表）・ユシキ（西表）・ユシギ（永良部・沖繩/久米）・ユシギギ（沖繩安田）・ユシンギ（沖繩諸志）の方言が残っている（天野1989）。平井信二氏はイスノキの語源は不明としながら、「櫛を作ることからクシノキ→ユシノキ→ユスノキ→イスノキ」と変化したことを示唆している（平井1996）。木沢氏は「由志木」が「輪端」に利用されていることにも触れており、輪の用材として南島の「赤木」が思い浮かぶ。



1~5 六反ヶ丸遺跡  
6 下郡遺跡群  
7 八日市地方遺跡

第3図 イスノキ製弓



南島の赤木については山里純一氏の研究があり、その中で、満久崇麿氏が「赤木梳二百七十」の赤木をイスノキと推定していることを記している(山里1995)。

なお、正倉院宝物の木材についても調べられており、次の5点がイスノキおよび可能性もあるものである(成瀬2012)。「紫檀木函狭杖」の脚と脚座、「櫃双六局」の天板中央、軸端がイスノキと同定され、「楓蘇芳染螺鈿神琵琶」の鹿頭、「檳榔木函箱」の脚が可能性のあるものとされる。紫檀、螺鈿の素材である夜光貝、牛車に織物を葺いていたという檳榔は南島以南に関わりがあり、軸端も「赤木」が使用されると指摘されており、イスノキ材が使われた道具には南島以南の素材が同居している。

天野鉄夫氏は、「イスノキは紫檀黒檀の模倣材等として、九州紫檀の名がある」と指摘している(天野1989)。「赤木」は神縄のアカギであるとともに、紫檀やイスノキなどのように南方に産する重くて堅い材の木を総称している可能性も考えられる。このことについては、改めて追究する必要がある。

## 6 おわりに

六反ヶ丸遺跡出土のイスノキ製品を契機として、イスノキに興味をもちはじめたところ、最初の頃は民俗事例の収集ばかりでなく、イスノキの大木巡りも楽しくなった。しかし、木沢論文や山里論文にたどり着いた時には、イスノキの重要性を全く理解していない自分に気づいた。特に古代においては「赤木」との関わりもあり、朝廷周辺における横櫛として重宝されたことや(註4)、正倉院宝物にも使われていたことを知り、「単人」との関わりを含め課題が多いことを実感した。

また、出土品については状態の良い資料が発掘されると、報告時点で想定されていた用途の評価が変わってきくこともある。なるべく、出土資料を実現し、再実測することによって再評価していくことが求められる。

さらに、民俗資料についても、文献や聞き書きの二次資料が多く、実現していないものばかりである。宿題ばかりが残ったが、本稿を出発点として今後ともイスノキに興味をもっていきたい。ご批判、ご教示いただければ幸いである。

最後になりましたが、話を伺った喜多つげ製作所社長、桑橋道長氏、近藤津代志氏、田中勝芳氏、坪根伸也氏、寺田仁志氏、徳永貞紹氏、鹿児島市竹振興センター、示現流兵法所、都城市歴史館前庭で示現流の稽古に励んでおられたみなさん方に感謝申し上げます。また、鹿児島県民具学会(2024/9/08)の参加者および服部芳明氏からは、有益な情報をいただきました。

## 参考文献等

天野鉄夫 1989 『図鑑 琉球列島有用樹木誌』 沖縄出版  
伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学』 海青社  
伊藤正人 2023 『箸台ノート』『物質文化』103 物質文

化研究会

岡安光彦 2024 「六反ヶ丸遺跡出土弓について」『六反ヶ丸遺跡4 - E地点-』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(55) 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター  
川口雅之 2008 『南部九州 特集一弥生・古墳時代の木製農耕具一』『季刊考古学』第104号 雄山閣  
木沢直子 2015 「奈良時代における木材の調達と加工 - 遺跡出土イスノキ材と正倉院にみられる「由志木」-』『古代学』7 奈良女子大学  
鈴木英治・中国遼平 2010 「鹿児島県の巨木 一特に大隅半島高野国有林で新たに発見された巨木群について-」『Nature Kagoshima』Vol.36 鹿児島県自然環境保全協会  
水流郁郎 1991 「メグイボ 嫁を泣かせた四人打ち」『かごしまの民具 鹿児島民具博物誌』慶友社  
内藤喬 1964 『鹿児島民俗植物記(遺稿)』慶友社  
鹿児島民俗植物記刊行会 青瀬社  
成瀬正和 2012 「32章 正倉院宝物の木材樹種同定・竹材調査」『木の考古学』海青社  
林弥栄 1969 『有用樹木図説(林木編)』誠文堂新光社  
平井信二 1996 『木の大自然』朝倉書店  
牧野富太郎 1982 『原色牧野植物大圖鑑』北隆館  
森田清美 1991 『オコ・サシ・イネギ・シンボウ 小回りがきく担い棒』『かごしまの民具 鹿児島民具博物誌』慶友社  
山口謙治 2012 「25章 九州・沖縄(1) - 古代以前-」『木の考古学』海青社  
山里純一 1995 「南島赤木の貢進・交易」『西海と南島の生活・文化古代王権と交流8』名著出版  
湯本貴和 2012 「7章 木材利用の民俗植物学一昭和30年代の屋久島・宮之浦集落を例として-」『木の考古学』海青社  
和田一之輔「榎の話」『なぶんけんブログ』奈良文化財研究所 掲載日(2023年6月1日 09:00)  
大分市教育委員会 1992 『下部遺跡群大分市下部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報(3)』  
鹿児島市教育委員会 2021 『榎ヶ丸遺跡2』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(89)  
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2024 『六反ヶ丸遺跡4』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(55)  
曾於市 教育委員会 2019 『曾於市の巨木・古木・名木』只 見町史編さん委員会 1992 『図説会津只見の民具』只見 町史資料集第1集  
『南日本新聞データ』鹿児島県立図書館で検索  
『全国遺跡報告総覧』島根大学附属図書館 奈良文化財研究所  
註1 箸台(耳皿)も同様の動きがみられる(伊藤2023)。  
註2 坪根伸也氏の教示による。  
註3 吉田広氏、下濱貴子氏、横幕真氏の教示による。  
註4 喜多つげ製作所社長によると、「榎は神に捧げるものであり、猫が爪を研いだ素材は使えない。」とのことである。「神=天皇」の一端を伝えている可能性もある。









令和5年度  
年報



県立埋蔵文化財センター  
第一調査係の成果(県事業関係の調査)

発掘調査

No.	遺跡名	所在地	事業主体	起工 事業名	調査の 種別	調査対象 表裏積 (㎡)	調査 期間	時代	遺構	遺物	注目される成果	調査者
1	名主原遺跡	鹿野市	土木部 道路維持課	(注)鹿野市単 独多額(県平道 路)道路改善	本調査	4370	5月 ～ 2月	縄文	—	土器(陶器下?)	○弥生時代前期～古墳時 代前期にかけての遺構が 多数併存して検出され た。特に弥生時代は委實 古の可能性が考えられる。 ○その他、径20m程の溝で 掘られた埋蔵施設と推定さ れる遺構も検出された。	今村 数高 新和雄 中ノ下 シヅカ シヅカ
							弥生中期	—	土器(山/口式)			
							弥生後期	竈穴遺構約40基、溝状遺構約 5基、溝状遺構約2基、埴土製 5基、土器集中11ヶ所、土坑7 基、竈穴遺構約4基、ピット 約5基、基・礎石施設3基	土器(基形式、先師式、中野野 式、東原式)、土器山/口式、石 土、新橋(米)、不明土製品、石 土下、石土下土製品、硯石 中・細石、竹、硯石製品、磨 製石片、打製石片、磨製石片 細石、磨製石片、磨製石片 細石、磨製石片、磨製石片 細石、磨製石片、磨製石片 細石、不明鉄製品、ガラス玉、ガ ラス瓦玉			
							古墳前期	—	—			
							古墳後期	溝状遺構2基、遺跡状遺構3基	須置器			
							古代	遺跡状遺構1基、遺跡状遺構 11基	—			
2	中継遺跡	天城町	伊豆天城城(中 土野工区)遺跡 整備	本調査	300	12月 ～ 2月	近世	溝状遺構	陶磁器、磁器、青磁	○近世と考えられる溝状遺 構が検出された。	高宮 豊野	
						近代	ピット11基、石列	陶磁器				
						時期不明	ピット12基、土坑2基	—				
						—	—	—				
3	御油遺跡	豊後市	土木部 道路維持課	特定交通幹線 施設整備事業 (深川工区)	本調査	700	1月 ～ 2月	縄文後期	—	土器(丸底式、中基式)、フ レーズ	○中世と推定される溝状遺 構が検出され、埋設中に後 期の火山灰で覆われてい た。 ○その他、縄文後期と考え られる酸化土器も検出され ている。	上溝 英夫
							縄文前期	—	土器(人形式)			
							古代	土坑1基	土器類			
							中世	溝状遺構4基	—			
							時期不明	埴土製土器1基、土坑2基	—			
							—	—	—			
4	虎野城跡	さつまい	土木部 都市計画課	北郷広域分團 整備	本調査	1500	11月 ～ 1月	中世・近世	ピット194基、土坑2基、礎石遺 構1基 【中世】青磁、白磁、青瓦、土器 土製品 【近世】磁器、肥前系陶磁 器、瓦、陶磁器	○礎石をもつ柱穴が検出さ れ、礎柱状に並ぶことから、 礎石が検出されたと考え られる。	山下 (勉) 山下 (勲)	
							時期不明	礎石2基、溝状遺構71基	鉄製品、古銭			
							—	—	—			
5	鹿野鳥城 二ノ丸跡	鹿野鳥城	商工政策課	鳥城地整備	本調査	800	8月 ～ 10月	近世	溝状遺構1基、柱穴群(柱穴14 基)	陶磁器(磁器、肥前系、磁 器)、瓦瓦、軒瓦瓦、平瓦、軒 平瓦、椀瓦)、青磁	○近世のものと思われる 柱穴が検出された。柱穴に は安山岩や中基炭煎の礎石 が入っているものがあり、一 列に並んでいることから、礎 石ではない等などの可能性 が考えられる。	高宮 豊野
							時期不明	石列、礎石、排水溝、雨樋状遺 構	平瓦、丸瓦、椀瓦、軒瓦、陶磁 器、磁器、土師器、木片			
6	大畑中跡	さつまい	鹿野鳥城 教育委員会	橋中を語る! よみがえる 鹿野鳥城の 私伝文化	本調査	290	6月	縄文早期	—	土器(基/形式、厚底式)、二次 加工土器、石硯、石瓦	○遺物に関連する遺構は 検出されなかったが、中世 帯のものを検出される溝状 遺構及び礎石も検出され た。 ○調査区に隣接して遺跡帯 の礎石が残存しており、大 畑中帯に関連する可能性 が考えられる。	上溝 野口
							縄文後期	—	土器(南塚寺)			
							古墳	—	土器			
							中世	溝状遺構5基、埴土製土器4 基、土坑1基、ピット1基	磁器(龍門司)、青磁、磨 製(青磁)、文刀石			
7	下城跡	稲良市	土木部 道路維持課	鳥城遺跡整備	本調査	184	11月	縄文	礎石遺	土器(石硯式)	○曲輪や空堀、土塁等が良 好に残存しており、中世の ものと思われるピットが検 出された。 ○その他、縄文早期土器が 出土している。	大森 倉元
							中世	ピット10基	須置系土塊			
							近世以降	—	陶器			



県立埋蔵文化財センター  
第一調査係の成果(県事業関係の調査)

報告書作成・整理作業

No.	遺跡名	所在地	事業主体	起原事業名	調査の種類	調査対象 表裏積 (㎡)	調査 年度	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
1	農牧遺跡				整理 報告書 発行	-	H30 ~ R2	縄文前期	-	土器(市原式)	○市原式の神祇の遺物が 多く出土しており、この時期 の高平地域の特色を知る上 で興味深い資料である。	平 原 川
								弥生	壺穴遺物類1群、石製農具1 基、大型土器4基、土坑、柱 穴、溝状遺構	土器(厨形器式、山ノ口式)、 打製石鏝、磨製石鏝、磨平打 製石斧、積方形石鏝、磨・ 砥石、石珠		
								古代	竊銅状遺構、柱穴	土銅器、漆器類		
								中世	古瓦、柱穴	青磁		
								近世	古瓦、柱穴	薩摩漬(知造木・梅島系)		
2	名古屋遺跡		鹿児島県 土木部 道路建設課	(土)鹿児島平 野多摩次郎事 業	整理	-	H30 R3 ~ R5	縄文	-	土器(厨形式)、積方形石鏝	○古墳時代の石盾丁及び 夾製品が多く出土しており、 この時期の生産の特色を知 る上で重要である。 また、土器は数を揃い、だもの が多いことがわかった。	今 村 康 夫 山 下 (暫) 野 野 口 聖 野
								弥生	-	土器(入来式、山ノ口式、赤田 式)、クワ形土器、磨製石 鏝、打製石鏝		
								弥生後期 ~ 古墳	壺穴遺物類07基、溝状遺構5 基、溝状遺構1基、埋没土器 1基、土製器約100個、土師 器、ビラ08基	土器(中津野式、東原式)、漆 器類、土製短刀、土製丸玉、平 砥石製品、石盾丁、石盾丁夾 製品、砥石、磨・積方、磨石、 石鏝、磨玉、磨石製品、磨製石 斧、磨石、刀矛、鉄鏝、磨小磨 片、不明鉄製品、ガラス小玉		
								古代	溝状遺構1基、道状遺構2基	-		
								縄文	-	土器、磨石		
3	虎野城跡	さつま町	土木部 都市計画課	北薩広域公園 整備	整理	-	H01 H06 H28 R2 ~ R5	縄文	-	土器、磨石	○15~18世紀の遺物が多く 出土しているが、近世の遺 物もあることから、一定程度 の管理がとれていたものと 考えられる。	山 下 (暫) 宮 本
								中世	石垣、礎石中礎、石列、石加工 機、工具類、ビラ20基、肥石 遺構、不明遺構、竊銅状遺構	青磁、白磁、青花土師器、瓦 土器、石臼、火打石、磨 石、土師器、磨石、鉄器、不明 鉄製品		
								近世	石積み	漆片、薩摩漆、合子		
								近代	-	磁器、瓦、磁製品(瓦)		
								時期不明	-	磁器、ガラス製品(おはじき)、 瓦		
4	貫倉寺跡ほか	指板町ほか		貫倉寺は語る！ よみがえる 鹿児島 の仏教文 化	報告書 発行	-	R3 R5	縄文早期	-	【大瀬寺跡】土器(神宮式、黒 神式)、二次加工製石、石珠、 石鏝	○県内の発掘の中から3ヶ 所にスポンジ型で調査を 行った。発掘調査だけでなく 文獻調査、石造物などの 情報調査、地域の方々への 聞き取り調査も組み合わせ ることによって、調査が深 くなっていった。また、この 一環を明らかにすることが できた。	上 原 平
								縄文中期	-	【大瀬寺跡】土器(両器式)		
								古墳	-	【大瀬寺跡】土器		
								中世	【神宮寺跡】土坑4基、溝状遺 構0基、ビラ0基、少少土器 類0基、溝状遺構1基、土師 器、漆器、土師器(土師) 遺構、遺土(埋没)	【貫倉寺跡】青磁、白磁、土師 器 【神宮寺跡】青磁、白磁、土師 器、陶磁器、玉石、磨石製品		
								中近世	【大瀬寺跡】溝状遺構10基、華 紋様化土器0基、土坑1基、ビラ 1基	【大瀬寺跡】青磁、漆片(青 石)、薩摩漆(龍門型)、火打石		
近世	【貫倉寺跡】石垣、土坑1基	【貫倉寺跡】瓦(軒瓦、破瓦、瓦 正、破瓦)、磨石類(高橋系、白 磁系、磨石)、磨前漆、琉球陶 器、土師器 【神宮寺跡】青磁、白磁、土師 器、磨前漆(高橋系、白磁系)、 陶磁器、青銅製品(磨石・砥石)、 瓦木遺文、玉石、磨石製品										
5	河ロコレクション (高橋真昼)	開きつま町		よみがえる「河 ロコレクション」 の世界	報告書 発行	-	S37 S38	弥生	-	発掘調査記録写真集	○S37-38の発掘調査記録 写真等から調査の概要が 確認できる。	宮 本
								縄文	土坑1基、伊織	土器(厨式、青磁式、市原式、 赤田式)、サトルボウガイ、石鏝 (磨石・石鏝)、貝製品、骨製製 品		
6	河ロコレクショ ン(黒川洞穴)	日置市ほか			報告書 発行	-	S27 S39 S40 S42	縄文		○黒川洞穴が縄文時代を 通じてキャンプサイトとして 活用され多様な生活がわか れる。	宮 本	



県立埋蔵文化財センター

市町村支援

No.	市町村名	遺跡名	支援内容	年代	注目される成果・支援内容等	市町村職員	センター職員
1	天城町	下藤岡穴	報告書作成 (町内遺跡発掘調査等事業)	縄文	【支援内容】 報告書作成指導助言	具志堅 勇	並品 貴人
2	出水市	出水城跡	整理作業 (町内遺跡発掘調査等事業)	中世 ～ 近世	【支援内容】 整理作業遺物指導	外村 幸中り	関 明彦
3	東牟婁町	藤仁1号墳	確認調査 (町内遺跡発掘調査等事業)	古墳	【支援内容】 確認調査支援	清水 航平	今村 結紀
4	さつま町	秋妻原古墳跡 上芝遺跡	整理作業・ 確認調査 (町内遺跡発掘調査等事業)	古墳	【支援内容】 ・X線撮影	佐藤 真人	原光 俊一
5	高橋千町	野木田遺跡	本調査 (経営体育成基盤 整備事業並木地区)	古墳	【支援内容】 発掘調査支援	小島 有希乃	原光 俊一 船島 文りな
6	知名町	知名町の古墓	報告書作成 (町内遺跡発掘調査等事業)	中世 ～ 近世	【支援内容】 報告書作成指導助言	宮城 幸也	今村 結紀
7	与論町	与論城跡	整理作業・ 報告書作成支援 (町内遺跡発掘調査等事業)	中世	【支援内容】 ・整理・報告書作成支援 ・X線撮影	南 勇輔	船島 文りな 原光 俊一
8	鶴江町	未定	試掘調査	弥生	【支援内容】 試掘調査支援	田代 真介	阿比留 士朗 平 義典
9	喜界町	喜水中央地区27・28工区	本調査 (埋蔵文化財発掘調査 27・28工区)	中世 ～ 近世	【支援内容】 発掘調査業務担当員派遣	島崎 未雨	平 義典

(公財)埋蔵文化財調査センター  
調査第一係の成果

発掘調査

No	遺跡名	所在地	事業主体	発掘 事業名	調査の 種類	調査対象 表裏積 (㎡)	調査 期間	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
1	野宮	志布志市 志布志町 船	国土交通省 九州地方 整備局 大隅地区 埋蔵文化財 調査事業科	平成 22(0)年 10月1日 ～平成 23(0)年 3月31日	本調査	0.640	5月 ～ 2月	旧石器時代	溝跡2基	尖頭器	旧石器時代は、ナイフ和石器文化期と縄石刃文化期の遺構・遺物が出土した。それぞれ埋蔵層が1層ずつ検出されている。	新橋山 川上 園上
								縄文早期	集石6基	土器片(石管式ほか)、石鏝 割片石鏝、打製石鏝3、倉石、磨石 片、叩石	縄文時代早期は、3エリアに分かれて集石6基を検出した。埋蔵層が小規模なものから大規模なものまで幅広いレンジに亘ってある。また、出土土器が集石の基盤に比して検出が少ないことが特徴である。	
								古墳時代	竪穴建物跡1基	土器片(成川式)	古墳時代は、竪穴建物跡1基を検出した。出土土器が小片のため明確な時期を特定できていない。	
								時期不明	土坑2(貯6基) ピット(数基) 竪立柱建物跡	土器片、石鏝、 鏝? (SK4内出土)、鉄 石鏝片・砥石片、貫水通管、青磁	このほか、アカホヤ火山灰上層で竪立柱建物跡1跡、埋土中に型式不明の鉄器と土器が出土した。発見が個となって出土した土器も検出している。	
2	雨水ヶ池	志布志市 志布志町 船	国土交通省 九州地方 整備局 大隅地区 埋蔵文化財 調査事業科	平成 22(0)年 10月1日 ～平成 23(0)年 3月31日	本調査	0.638	5月 ～ 2月	旧石器時代	-	石鏝、スクレイパー、割片、プラン テイングチップ、磨石片、割片	旧石器時代は、複数の層から石鏝などの石器が出土したが、埋蔵層との関係は検出していない。	見島 中原
								縄文時代早期	集石4基	石管式土器、打製石鏝	縄文時代早期は、集石4基を検出した。また出土した土器がおり、磨り込みが割片数の多いものと小さいものに分けられる。	
								縄文時代後期	溝と穴	中世II式土器	初期は、溝と遺構と古道(埋蔵層)を多数検出している。埋蔵層から玉絞口織白磁碗、青磁碗、磨石3割石片水注、貫水通管など多数が出土している。柱穴等は検出していない。	
								中世	溝状遺構5条 古道(硬化層)11条	玉絞口織白磁碗、青磁碗、 摩石3割石片水注、 貫水通管耳堂等		
								近世	溝状遺構1条	白磁碗、貫水通管		
								近代以降	溝状遺構3条 遺跡1条	-		
								時期不明	溝状遺構4条 古道(硬化層)5条	須恵器、土師器、石皿、磨石石、有 溝砥石、砥石片		

整理作業・報告書作成

No	遺跡名	所在地	事業主体	発掘 事業名	調査の 種類	調査対象 表裏積 (㎡)	調査 年度	時代	遺構	遺物	成果	担当者
3	萩ヶ峰	鹿屋市 白水町	国土交通省 九州地方 整備局 大隅地区 埋蔵文化財 調査事業科	平成 22(0)年 10月1日 ～平成 23(0)年 3月31日	整理・ 報告書 発行	-	H26 ～ H26 ～ R4	縄文時代早期	集石3基、土坑1基	神聖土器	縄文時代後期は、黒川式新編(千原原段)の土器の一部とともに西鹿屋島土器である仲原式土器が出土した。大隅半島での出土は初めてとなる。胎土が分析から、奄美大島北部の土器の胎土と近い結果が得られた。	宮崎 文化 院
								縄文時代前期末 ～中期後半	-	深溝式土器	黒川式(千原原段)、組織麻土器 仲原式土器	
								縄文時代後期	-	打製石鏝、磨石石鏝、石鏝、石鏝、 石鏝、打製石片、磨石石片、磨石 石、石皿、砥石	古墳時代では、東原式土器を伴った竪穴建物跡を4基検出した。平面形が不整形で、張り出しやステップ状の段を有するものが多い。出土遺物は量や質のほかに大型丸釜(即ち瓦坪、ミニチュア土器も出土しており) 鉄器の環として使用された可能性も考えられる。	
								古墳時代	竪穴建物跡4基、土 坑2基、土器室1 基、帯状硬化層4条	成川式土器(東原式・菅貫式)、 ミニチュア土器、須恵器、 磨石、石皿		
								近世以降	塗付(肥前系) 薩摩焼(龍門陶系・古代川系)	-		
								旧石器時代	ナイフ形石器	遺構は古墳時代の帯状硬化層が、埋蔵層に2層に分けて50cmに1基が交差する状態で検出した。遺物は旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代早期の石鏝、縄文時代後期の中世編製土器、古墳時代の東原式土器、古代の土師器、近世の塗付・薩摩焼が出土したが、小片がほとんどであった。		
4	白水町	鹿屋市 白水町	国土交通省 九州地方 整備局 大隅地区 埋蔵文化財 調査事業科	平成 22(0)年 10月1日 ～平成 23(0)年 3月31日	整理・ 報告書 発行	-	R4	旧石器時代	-	ナイフ形石器		宮崎 文化 院
								縄文時代早期	-	水晶製石鏝		
5	山ノ上A	鹿屋市 小野原町	国土交通省 九州地方 整備局 大隅地区 埋蔵文化財 調査事業科	平成 22(0)年 10月1日 ～平成 23(0)年 3月31日	整理・ 報告書 発行	-	R4	縄文時代後期	-	組織麻土器		宮崎 文化 院
								古墳時代	帯状硬化層4条	成川式土器(東原式・菅貫式)、		
								古代以降	-	土師器片、塗付(肥前系) 薩摩焼(龍門陶系・古代川系)		
								縄文時代早期	-	打製石鏝		
縄文時代後期	-	黒川式土器(千原原段)、組織麻土器										
古墳時代	成川式土器(東原式・菅貫式)、 ミニチュア土器、 石皿、磨石	縄文時代早期の石器や使用痕跡跡、縄文時代後期の組織麻土器や中層編製土器、古墳時代の東原式土器、菅貫式土器の検出が出た。胎土の特徴から輸入品である可能性の高い重要瓦をもつ規模なつくりの小形丸釜も出土した。										

※これらの成果は、今後、整理作業を進めていく中で再評価される可能性があります。  
利用の際は、埋蔵文化財センター、埋蔵文化財調査センターへ確認、使用承諾を得てください。

(公財)埋蔵文化財センター  
調査第二係の成果

発掘調査

No	遺跡名	所在地	事業主体	発掘事業名	調査の種類	調査対象 表面積 (㎡)	調査 期間	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
6	諏訪ノ前	阿久根市 深賀	東北文通協 大川町 事務所 阿久根市 深賀 事務所	第九州 西部 自動車道 建設 阿久根 川内道路 建設	本調査	10,977	6月 ～ 1月	縄文時代 古墳時代 古代 中世 近世・近代 時期不明	— — — 竪穴柱建物跡6軒 竪穴建物跡1軒 土坑15基 溝状遺構174基 溝状遺構2基 竪穴中層1基	石鏡、石斧、石石 成川式土器 須磨部、土師器 須磨部、土師器、 陶磁器(磁付・青磁・白磁)、 瓦質土器、土鏡、石鏡カマド破片、 洪武通宝、懸仏(木彫)	溝状遺構は、上層の埋土は新しい物質だが、床面に近い埋土になると中世後半(15世紀～18世紀)の陶磁器・瓦質土器、石臼などが出たことが、中世の溝状遺構を、近代ごろまで拡張等で使用していた可能性が高い。また、調査区南側の遺構に向けて土器等の破片が散らばり、近世以降に造成を引けた可能性がある。また、伊藤が20基検出され、積土や成文化物の残存状況が非常に良いものも見られた。中世後半～近世にかけての伊藤と考えられるが、今後科学分析等で精査する必要がある。 遺物は中世後半の陶磁器や瓦質土器、土鏡等が出しているが、特にすり鉢や火鉢が多い様相にある。志倉富士の墓仏は、13世紀後半～14世紀に該当すると考えられ、遺跡の南西方向に存在する南方神社との関連がうかがえる貴重な資料である。	松山 平瀬 川野

整理作業・報告書作成

No	遺跡名	所在地	事業主体	発掘事業名	調査の種類	調査対象 表面積	調査 年度	時代	遺構	遺物	成果	担当者
7	六反ヶ丸	出水市 六月田町	東北文通協 大川町 事務所 阿久根市 深賀 事務所	第九州 西部 自動車道 建設	整理・ 報告書 刊行	—	R4	弥生時代中期 古墳 古代 中世 近世 近代 時期不明	水堀遺構 1基 土部遺構 1基 ピット 13基 段状地形 1条	土部(高麗式土器) 丸木弓、装飾木製品、木製品等 東原式土器、菅貫式土器 肥後系土器 須磨部、土師器、菅貫土器、土師、陶磁器 陶磁器 — ピット 1基	弥生時代中期前半のイヌノ半製の弓が4種、用途不明の装飾木製品等が、積土層の埋土から出土した。水堀としての機能が、この時代の遺構が出土したことを考え、祭祀に関わる水堀と見られた。 古墳時代は、成川式土器を中心とした土器及び磁器が集中している土層1基、ピットを13基検出した。土器からは成川式土器と肥後系土器などが出土しており、在地区土器と外来系土器の混在が見られた。 また、古代では、雄略南方向に広がる段状地形が見つかり、その周辺で「丸」(「官人」)の文字が書かれた土器土器が出土した。 鹿耳島島下に於いて多くの弓が出土する等、貴重な遺跡となった。	林田
8	平佐池 宮跡群	藤原川内 市天取町 西山	東北文通協 大川町 事務所 阿久根市 深賀 事務所	藤原川内 市宮跡群 整備事業	整理・ 報告書 刊行	—	R3	近代	竪穴(遺構式表層・表層中層)2基 溝物庫1か所 工務跡(溝跡・方形 溝跡・階段溝・階段 段・ロープロ土坑・井戸 跡) 石礎・石積み 溝跡 瓦葺り土坑	陶磁器 (磁、皿、鉢、蓋、遺物、急須、瓶、 からから、仏飯器、火鉢、香炉、萬 坪、鳥籠容器、痰盂等) 銅道具 (銅合、天秤組み用蓋き台、センプ イ、チャップ、重ね焼き用ハマ) 製作道具 (成土道具、成形道具、下絵付け道具) その他 (トンバイ、色見乳鉢、火鋸) その他 土鏡、手水鉢、石鏡、貨幣、馬の 尻鬣	藤原式表層・表層中層・物部・工部等の築家遺構施設がまとまって検出された。また、多種多様な磁器製品や瓦質土器が大量に出土し、県内ではあまり出土量が少ない成形道具も多数出土した。 遺跡の歴史的背景として、①明治時代に於ける従軍の地を知る事ができる。②磁器生産技術の進化の過程や年代を知ることができる。③明治時代以降(明治維新後)、個人経営となった平佐池宮跡群の状況を知る事ができるといった点が見られる。	百枝 川口

※これらの成果は、今後、整理作業を進めていく中で再評価される可能性があります。  
利用の際は、埋蔵文化財センター、埋蔵文化財調査センターへ確認、使用承諾を得てください。

(公財)埋蔵文化財センター  
調査第三係の成果

発掘調査

No	遺跡名	所在地	事業主体	起工 年月日	調査の 理由	調査対象 面積(㎡)	調査 期間	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
9	北山	阿久根市 山下	北山遺跡 発掘調査 事業団	九十九町 西野早 田跡	本調査	2,350	9月 ～ 12月	縄文時代	土坑1基、黒石4基 土器、石鏃、打製石斧、磨石、石 錘	縄文時代の地層から出土した 北山内から発掘になると考えら れる土器が出土した。 昨年年度検出した遺跡(SD18)の 延長部分を確認した。溝の最上 部に形成された遺跡とつながり た部分1箇所と見られるが、 溝の下部は二次に分かれたい た。他に複数の遺灰及び遺跡と考 えられる遺構を確認しており、時 期や用途、支連関係について考 証検討が必要である。	山口 野田	
								古代	—	溝遺跡、土葬跡		
	新緑跡	阿久根市 川	北山遺跡 発掘調査 事業団	九十九町 西野早 田跡	本調査	1,066	9月 ～ 12月	中世	—	土葬跡、中世須恵器(甕・壺等〔産 地不明〕)、磨石陶器(甕・磁鉢〔産 地不明等〕)、輸入陶器(青 磁・白磁・黄化等)、輸入土器(青 磁類)、瓦質土器(産地不明)	調査状況と明治時代の地図、 過去の空撮写真等と照合した結 果、一部を埋め残すべき遺 灰と見られていたことを確認した。出 土遺物については昨年年度の成 果とあわせてまとめる必要がある。	山口 野田
								近世・近代	—	陶磁器(備前焼、肥前系)		
								時代不明	溝跡 4基 石列 2基 摩挲硬化土(遺跡) 2基	鉄斧、黒曜石製片等		
								古代	—	溝遺跡、土葬跡		
	新緑跡	阿久根市 川	北山遺跡 発掘調査 事業団	九十九町 西野早 田跡	本調査	1,066	9月 ～ 12月	中世	—	中世須恵器、土葬跡、磨石陶器 輸入土器(青磁・白磁・黄化等)、 瓦質土器(産地不明)	調査状況と明治時代の地図、 過去の空撮写真等と照合した結 果、一部を埋め残すべき遺 灰と見られていたことを確認した。出 土遺物については昨年年度の成 果とあわせてまとめる必要がある。	山口 野田
								時期不明	溝跡 1基	—		
								縄文時代	—	土器		
10	玉利	指原市 十町	北山遺跡 発掘調査 事業団	九十九町 西野早 田跡	本調査	2,074	10月 ～ 2月	縄文時代	—	石鏃	磨石の破片・火山灰層によって埋め られた破片・火山灰層の下から、 弥生時代後半から古墳時代中 葉にかけての遺構や土器など土 器が大量に出土した。	岩小 野
								弥生時代	—	土器(山ノ口Ⅱ式土器ほか)、石包 丁		
								古墳時代	柱穴4基	瓦質土器、小形磨石製石斧 鉄製品2点、礎石、 鉄石製品		
								その他	—	黒曜石		
11	山郷シ	喜野町 川	北山遺跡 発掘調査 事業団	九十九町 西野早 田跡	本調査	1,830	5月 ～ 7月	中世	石敷遺構1、 溝状遺構1、 土坑(黒土土坑青 C)20基、柱穴30基	黒土系青磁(14～15世紀前半が主) 白磁・陶器(甕・中甕)、石製石鏃・滑 石製品 銅器(中銅・は風、銅)、ガラスビーズ	中世の遺跡や伊勢、石積遺構 などが確認された。溝跡から は、調査された中・高などの観 音、青磁・白磁などの陶器、磨 石陶器などをも含む輸入 陶器が大量に出土した。	岩小 野
								近世	溝状遺構1	陶磁器、備前焼、寛永通宝		
								近代以降	—	陶磁器、一銭銅貨、駄骨		

整理作業・報告書作成

No	遺跡名	所在地	事業主体	起工 年月日	調査の 理由	調査対象 面積(㎡)	調査 期間	時代	遺構	遺物	成果	担当者
12	新緑跡	阿久根市 山下	北山遺跡 発掘調査 事業団	九十九町 西野早 田跡	整理	—	R4 R5	古代	—	土葬跡	定文化物が出た土遺構の年代 測定を実施した結果、複数の時 期にわたることと推定した。遺 構の時期を明確に、土地の実 態を見ていく必要がある。	山口 野田
								中世	ピット171基 虎口状遺構 伊勢 竪立柱建物跡	青磁、青花、磁鉢、鉄鏃、土器、石 錘、瓦質土器		
								近世 近代	—	陶磁器		
								時期不明	—	磁器品 サゴ		
13	北山	阿久根市 山下・遺跡	北山遺跡 発掘調査 事業団	九十九町 西野早 田跡	整理	—	R2 R3 R4	縄文	黒石1基	中世式系土器、西平式系土器 打製石鏃、磨製石斧	中世の遺構は、調査前の竪立 柱建物跡とつながり、溝・土 積遺構が中心で、他は大小の 溝とピットが点在している状況 である。	山小 野
								古墳	—	原形式土器		
								古代 中世	竪立柱建物跡7棟 土式20基 柱穴205基 溝9基 礎石1	須恵器(甕・壺・甕など) 土葬跡(甕・坪[壺等]・へうききき ・鉢) 黒色土器(壺) 白磁(甕・皿) 青磁(甕・皿・坪・鉢[越前系 産]) 青花(甕・皿) 陶器(磨石陶器[常滑・備前など]・ 輸入陶器[専用品など]) 磁器品 石製・石製品(火打石、倉石、砥 石)	中世から近世にかけては、磨 石陶器遺構が集中している区域 があり、多量の鉄斧や伊勢等が 出土している。また、陶器で考 えられる伊勢の伊勢が確認さ れている。 遺物は、中世の貿易陶器類 (白磁の甕・皿、青磁の甕・皿・ 鉢、磨石陶器の磨石など)を中 心に、須恵器、土葬跡(へう きききき、倉石、砥石)が主 となっている。 特に、中世から近世の遺物 類(13～14世紀前半と15～17 世紀初葉が中心となることが確 認された。	
								近世	柱穴205基 伊勢13基 磨石陶器遺構14基 摩挲硬化土	磨石 陶器(甕・皿・大甕など) 鉄斧		
								時期不明	竪立柱建物跡1棟 土坑17基 溝2穴2基 伊勢4基 石積遺構1基	土葬 礎石 磨石		

※これらの成果は、今後、整理作業を進めていく中で再評価される可能性があります。  
利用の際は、埋蔵文化財センター、埋蔵文化財調査センターへ確認、使用承諾を得てください。

## 1 資料調査・貸出等

### 資料調査受け入れ数

博物館等	行政	大学	出版社	新聞社	企業	研究会	合計(件)
7	9	6	1	0	0	0	23

調査依頼数	調査依頼数
のべ71	(954) ほか一式

### 写真・図版貸出数

博物館等	行政	大学	出版社	新聞社	企業	研究会	合計(件)
9	5	0	8	1	2	1	26

### 写真・図版・遺物・剥ぎ取り資料貸出数

遺跡数	点数
のべ13	2,302

### 遺物・剥ぎ取り資料貸出数

博物館等	行政	大学	小中高	自治会等	企業	研究会	合計(件)
16	9	2	0	0	3	0	30

### 主な貸出先

国立歴史民俗博物館、九州国立博物館、鹿児島県歴史・美術センター黎明館、ほか各博物館等

## 2 ホームページ(<https://www.jomon-no-mori.jp>)アクセス数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
アクセス数	11,361	13,804	14,131	12,882	12,948	10,644	11,411	12,787	10,075	11,588	12,218	10,876	144,725

## 3 データベース登録数(ホームページにて検索可能)

No	登録遺跡名	登録遺物		登録遺構		
		登録実測図	登録写真	登録実測図	登録写真	
1	市来貝塚	760	118	3	1	
2	井手原遺跡	65	65	5	4	
3	鹿児島城跡(犬道物馬場・火除地)2	462	253	76	17	
4	久保田牧遺跡1	383	354	87	67	
5	石鉢谷B遺跡	187	112	14	14	
6	北山遺跡	602	471	48	34	
7	小牧遺跡4	2,445	737	225	191	
8	川久保遺跡5	1,200	737	82	74	
9	中津野遺跡(低地部・低湿地部編)	1,504	726			
10	上野原遺跡(第2-7地点)第1-4分冊	2,148	1,032	269	93	
11	上野原遺跡(第2-7地点)第5-7分冊	2,070	672	196	60	
令和5年度合計		遺跡数: 10	11,826	5,277	1,025	555
累計		遺跡数: 503		630,591		

## 4 分析・保存処理点数(令和5年度中に処理が完了した遺物数)

No	処理名	処理点数	遺跡名
1	金属器処理	180	小牧遺跡、久保田牧遺跡、北山遺跡、六反ヶ丸遺跡、鹿児島城跡、曲迫遺跡他
2	木器処理	30	鹿児島城跡、中津野遺跡
3	分析(蛍光X線、赤外線、レントゲン)	298	名主原遺跡、北山遺跡、与論城跡、川久保遺跡、平佐焼窯跡群、供養原B遺跡他

## 5 研修・講座等

### 埋蔵文化財専門職員養成講座

No	講座名	実施日	参加者数
1	埋蔵文化財基礎講座	7月20日	7市3町のべ12人
2	埋蔵文化財技術研修講座(調査技術)	7月21日	3市4町のべ9人
3	埋蔵文化財技術研修講座(調査研究法)	1月18日～1月19日	11市7町のべ27人

### 教員の研修講座

No	講座名	実施日	参加者数
1	フレッシュ研修講座 「体験・体感 縄文の森」	8月9日～8月10日	初任者4人
2	パワーアップ研修(10年経験者研修) 「体験・体感 縄文の森」	7月27日～7月28日 8月3日～4日	小・特・重・栄:16人 中・高:11人
3	地域体験研修(フレッシュ研修)・課題研究Ⅱ(パワーアップ研修)	8月23日～8月25日	教職員:8人

## 6 普及・啓発関係

### 鹿児島県立埋蔵文化財センター遺跡フォーラム2022

開催日	会場	内容	参加者数
令和5年12月2日	鹿屋市	かごしま遺跡フォーラム 廻り出された鹿屋の歴史と文化	150人

### 遺跡公開(現地説明会等)

遺跡名	場所	期日	内容	見学者数
大瀬寺跡	さつま町	6月24日	現場公開	40
合 計				40

### (公財)埋蔵文化財調査センター実施分

遺跡名	場所	期日	内容	見学者数
野首遺跡	志布志市	12月9日	現地説明会	150
隈助ノ前遺跡	阿久根市	1月20日	現地説明会	110

### 発掘体験等

遺跡名	場所	期日	内容	学校名等	員数
大瀬寺跡	さつま町	6月7日	遺跡見学・発掘体験	さつま町立柏原小学校5年生	18人
名主原遺跡	鹿屋市	9月5日	遺跡見学	東串良町文化財保護審議会委員	4人
名主原遺跡	鹿屋市	10月3日	遺跡見学・発掘体験	鹿屋市立吾平小学校6年生	32人
合 計					54人

### 職場体験学習・インターンシップ等

期 日	体験者等	内容	員数
5月9日～11日	鹿屋市立園分中学校2年生	職場体験学習	1人
5月16日～18日	鹿屋市立単人中学校3年生	職場体験学習	2人
5月23日～25日	鹿屋市立舞鶴中学校3年生	職場体験学習	5人
合 計			8人



**まいぶんキット貸出事業(ワクワク考古楽を含む)**

貸出内容						貸出対象数
本物の遺物(土器や石器など)をセットにしたものを学校等に貸出し、授業で本物に触れる機会を提供						対象12件、790人以上
	貸出期間	学校等名	市町村名	対象		内容
				学年	児童・生徒数	
1	5月10日	園分南中学校	露島市	1~3	194	縄文土器・石器、廣仏殿敷関連
2	5月29日	宮富小学校	肝付町	5・6	12	大隅園分寺と大隅半島の古代
3	5月31日	森野小学校	志布志市	6	6	縄文土器・石器、廣仏殿敷関連
4	5月31日	立尾野見小学校	志布志市	6	16	縄文土器・石器、廣仏殿敷関連
5	6月19日	米ノ津東小学校	出水市	6	55	縄文土器・石器、廣仏殿敷関連
6	6月19日	枕崎小学校	枕崎市	6	55	縄文土器・石器、廣仏殿敷関連
7	6月22日	西原小学校	鹿屋市	6	77	縄文土器・石器、廣仏殿敷関連
8	6月29日	始原小学校	さつま町	4・5	25	縄文土器・石器、廣仏殿敷関連
9	7月11日	鹿児島盲学校	鹿児島市	中3・高3	6	縄文土器・石器、廣仏殿敷関連
10	12月20日	宮之城中学校	さつま町	1	155	虎居城跡とさつま町の遺跡
11	1月24日	園分小学校	露島市	6	128	縄文土器・石器、廣仏殿敷関連
12	2月9日	鹿島小学校	薩摩川内市	5・6	8	縄文土器・石器、廣仏殿敷関連
合計						737

※「ワクワク考古楽」とは、専門的な知識を持ったセンター職員が、学習指導案を作成し、本物の資料や発掘調査の成果等を効果的に使用して行う授業支援。令和3年度からは「廣寺は語る！～よみがえる鹿児島県の仏教文化」事業として実施している。

**おでかけ体験隊支援**

支援内容						対象数
土器、石器等の実物資料を活用した教育活動の支援と郷土教育推進を目的とした「上野原縄文の森」主体の出張講座で、埋文センター職員は随時支援を行う形で関わっている。						対象2件、215人以上
	出期間	学校等名	市町村名	対象		内容
				学年	児童・生徒数	
1	5月10日	園分南中学校	露島市	1~3	200	火おこし
2	7月11日	鹿児島盲学校	鹿児島市	中3・高3	15	講話
合計						215

## 7 刊行物等

### 発掘調査報告書

No	シリーズ	発掘調査報告書名	所在地	執筆担当	発行月
1	セ222	黒川洞穴	日置市牧上町	堂込秀人	令和6年3月
2	セ223	廣牧遺跡	鹿屋市吾平町	黒川忠広・平美典	令和6年3月
3	セ224	久保田牧遺跡2(縄文時代早期・前期前葉編)・立塚遺跡1(縄文時代早期編)	鹿屋市吾平町	廣栄次	令和6年3月
4	セ225	光台寺跡・照徳院跡・大願寺跡	指宿市岩本 曾於郡大崎町 藤原郡さつま町	上浦麻矢・平美典	令和6年3月
5	セ228	高橋貝塚1(発掘調査記録写真集)	南さつま市金鐘町	堂込秀人	令和6年3月
6	財54	平佐徳家跡群(松山・柚木崎家跡)	薩摩川内市天辰町	百枝勇一・川口雅之	令和6年3月
7	財55	六反ヶ丸遺跡4-E地点一	出水市六月田町	林田真一・川口雅之・東和幸	令和6年3月
8	財56	萩ヶ峰遺跡・白水B遺跡・山ノ上A遺跡	鹿屋市白水町 鹿屋市小野原町	宮崎大和・西園勝彦・北園和代・兒島直美・大保秀樹	令和6年3月

### 埋文だより(各2,400部発行)

No	シリーズ	内容	発行日
1	91号	名主原遺跡発掘調査, 発見! 発掘速報(公財), ワクワク考古楽・現地説明会, 河コレ遺跡めぐり(⑧) 入米遺跡, 令和5年度 発掘調査予定遺跡	9月29日
2	92号	山ノ口遺跡出土遺物展示, 発見! 発掘速報(県), (公財)埋蔵文化財調査センター現地説明会, 自宅で遺跡を見学しよう	2月28日

### 8 鹿児島県立埋蔵文化財センター来所者数(令和4年度)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計	
個人	小学生	2	3	3	19	74	8	2	41	9	7	1	15	184	
	中学生	0	0	0	0	6	0	0	2	32	1	0	1	42	
	高校生	28	8	0	0	6	0	6	25	1	9	8	0	91	
	一般	142	139	127	125	184	151	134	138	145	147	150	178	1,760	
	その他	0	0	0	14	13	6	11	13	6	60	1	89	213	
	計	172	150	130	158	283	165	153	219	193	224	160	283	2,290	
団体	小学生	人員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		団体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	中学生	人員	0	17	0	0	0	0	0	0	0	0	136	0	153
		団体	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5
	高校生	人員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		団体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	一般	人員	0	10	0	12	0	0	0	0	0	54	0	39	115
		団体	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	4
	計	人員	0	27	0	12	0	0	0	0	0	54	136	39	266
		団体	0	5	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2	9
計	小学生	2	3	3	19	74	8	2	41	9	7	1	15	184	
	中学生	0	17	0	0	6	0	0	2	32	1	136	1	195	
	高校生	28	8	0	0	6	0	6	25	1	9	8	0	91	
	一般	142	149	127	137	184	151	134	138	145	201	150	217	1,875	
	その他	0	0	0	14	13	6	11	13	6	60	1	89	213	
	計	172	177	130	170	283	165	153	219	193	278	296	322	2,558	

## 9 (公財)鹿児島県上野原縄文の森との連携

### 企画展・特別展関係

No	開催期間	企画展テーマ	講演会期日	職名・講師	講演会参加者数	総来園者数
				講演会テーマ		
第66回	4月22日 ～7月2日	「きゅら島あまみの歴史と文化！～奄美・徳之島世界自然遺産登録・奄美群島日本復帰70周年記念～」	6月3日	(公財)埋蔵文化財調査センター職員 「きゅら島あまみの歴史と文化」	29	4,527
第67回	7月22日 ～10月1日	「新発見！かごしまの遺跡2023～発掘調査速報展～」	8月19日	(公財)上野原縄文の森職員 「市来貝塚の発掘調査成果」 (公財)埋蔵文化財調査センター職員 「小牧遺跡の発掘調査成果」	38	3,704
			9月16日	始良市教育委員会社会教育課文化財係主査 岩元 康成 氏 「前田遺跡の発掘調査成果」 (公財)埋蔵文化財調査センター職員 「川久保遺跡の発掘調査成果」	56	
第68回	10月21日 ～1月8日	「人のあゆみとジオストーリー ～南九州の火山と生きた人々～」 日本ジオパークエリア拡大認定記念	11月26日	「国分平野の成り立ちと噴火史」 鹿児島大学名誉教授 大木 公彦氏 「南九州の火山と先史時代の人々」 九州大学大学院比較社会文化研究院 特別研究 者 黒塚 光博氏	178	4,244

### 考古学講座

No	期日	タイトル	講師	参加者数
第1回	4月15日	「探検！上野原遺跡」	上野原縄文の森職員	25
第2回	5月20日	「新！国指定史跡 鹿児島城のヒミツ」	西野 元勝氏 (県文化振興課 兼 歴史・美術センター黎明館学芸課 主査)	33
第3回	7月1日	「はじめての考古学～ドキドキ縄文土器～」	松山 初音 (公財)埋蔵文化財調査センター文化財専門員	21
第4回	10月21日	「黒野だけじゃない！福山まち歩き」	東川 隆太郎氏 (まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会代表)	34
第5回	2月10日	「南の縄文文化」 (大野城こころのふるさと館で開催)	宮込 秀人 (鹿児島県考古学会会長・鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事)	73

### 「河コレクション」の展示(常設展示コーナー)

	期日	展示内容
第1回	5月12日～9月8日	河コレクション ～出水貝塚～
第2回	9月9日～1月8日	河コレクション ～奄美群島の遺跡～

---

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第17号

※なお、本研究紀要は査読誌です

発行年月 2024年12月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail [maibun@jomon-no-mori.jp](mailto:maibun@jomon-no-mori.jp)

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1

---